Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-16

談話の文法ー「題目」に関する総合的研究ー

金田，純平

(Degree)
博士（学術）
(Date of Degree)
2008-03-25
(Date of Publication)
2012-03-02
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
甲4286
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1004286

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

博士論文

談話の文法
―「題目」に関する総合的研究―

平成１９年１２月

神戸大学大学院総合人間科学研究科
金田　純平

目次

第1章　はじめに　1
1.1　文／発話の最初に現れるもの—「題目」　1
1.2　「題目」または文頭詞　2
1.3　「題目」の拡張可能性　3
1.4　本研究の意義　5
1.5　研究の目的と方法　6
1.6　本稿の構成　6

第2章　主題提示　9
2.1　本研究における主題提示の位置づけ　9
2.2　情報構造と聞き手の関与　10

第3章　主題の対照研究—フランス語とギリシャ語を中心に—　11
3.1　主題の対照研究を行うことの意義　11
3.2　主題提示の対照—ロマンス諸語・ギリシャ語と日本語　12
3.2.1　左方転移と主題化構文　12
3.2.2　左方転移構文と日本語の主題　16
3.3　焦点　17
3.3.1　前置焦点と分裂文　17
3.3.2　焦点の位置とイントネーション　22
3.4　左周辺の要素としての主題　27
3.4.1　主題とイントネーション　27
3.4.2　主題と焦点の位置　32
3.4.3　日本語の主題・焦点の位置関係　36
3.4.4　日本語の左周辺　37
3.4.5　日本語の右周辺　39
3.4.6　語彙・形態的手段による主題　40
3.5　本章のまとめ　42

第4章　題目提示と韻律—ポーズ・昇降調・間投助詞とフレージング— 43
4.1 はじめに 43
4.1.1 句末イントネーション 43
4.1.2 句末昇降調 43
4.2 句末昇降調の出現環境 44
4.2.1 「区切りの強調」説 44
4.2.2 「ターンの維持」説 45
4.2.3 「相手への働きかけ」説 45
4.2.4 第４の説「言いよどみ」 46
4.3 言いよどみと句末昇降調の共起関係 47
4.3.1 方法 47
4.3.2 結果 49
4.3.3 句末昇降調と句末延伸 49
4.4 言いよどみを生む心内処理—発話モニタリング 52
4.5 断片化 55
4.5.1 イントネーションユニットの構造 56
4.5.2 文末詞と句末昇降調 57
4.5.3 まとめ—句末昇降調とは 58
4.6 主題とのフレージングの問題について 58
4.6.1 フレージングと主題 58
4.6.2 自由左方転移(HTLD)と非流暢性 62
4.7 本節のまとめ 65

第5章　話し言葉の主題提示—無助詞と「って」を中心に 67
5.1 話し言葉の主題提示 67
5.1.1 主題的無助詞 67
5.1.2 主題的無助詞と「って」 68
5.2 談話展開と主題 69
5.3 現場性 73
5.3.1 発話行為と現場依存性 73

5.3.2　現場性と想起しやすさ—情報構造　75
5.4　主題的無助詞の現れにくい発話—自在的言表　77
5.4.1　一般性・総称性・知識　78
5.4.2　個別具体性　78
5.4.3　知識と体験　80
5.5　現場性再考　83
5.6　主題提示に助詞が現れること　86
5.7　これまでのまとめ　88
5.8　主題的無助詞に関する対照　89
5.8.1　主題的無助詞の方言間対照　89
5.8.2　主題的無助詞とフランス語の構文　91
5.9　本節のまとめ　92

第6章　「題目」（文頭詞）の拡張—接続詞・感動詞・呼びかけなど—　95
6.1　「題目」（文頭詞）の拡張　95
6.2　呼びかけ　95
6.2.1　主題と呼びかけ　96
6.2.2　呼びかけの位置　97
6.3　接続詞　98
6.3.1　文末以外の接続詞　99
6.3.2　文連結性向の低い接続詞　101
6.3.3　接続詞と「題目」（文頭詞）　102
6.3.4　文法カテゴリとしての接続詞の再検討　106
6.3.5　「題目」（文頭詞）としての接続詞の通言語的価値　107
6.4　文副詞　108
6.5　感動詞　110
6.5.1　感動詞の位置　110
6.5.2　応答詞と立ち上げ詞　111
6.5.3　してみせる感動詞　113
6.5.4　感動詞の対照—ギリシャ語po poとreを例に—　114

6.6　前置き表現　116
6.6.1　三種類の前置き　116
6.6.2　メタ言語行動としての前置き　117
6.6.3　右周辺に現われた「後付け」　117
6.7　オノマトペ　118
6.7.1　オノマトペの独立用法と語り　118
6.7.2　「ショーアップ語」　119
6.8　まとめ　120

第7章　おわりに　123
7.1　まとめ　123
7.2　結論—行動としての「題目」（文頭詞）提示　124
7.3　従来の品詞分類の限界　126
7.4　主題卓立的な文論へ　126

参考文献　129

謝辞　139

ギリシャ語例文のラテン文字表記について

　ギリシャ語の例文をラテン文字で表記する場合，そのルールが特に存在するわけではなく，文献によってまちまちである。本稿では，ギリシャ語のラテン語表記について PhilippakiWarburton et al. (2004)での表記規則をほぼ踏襲し，次のようなラテン文字表記規則を採る。

母音字

ギリシャ文字	ラテン文字転写	音価	ギリシャ文字	ラテン文字転写	音価
α	a	[a]	ου	u	[u]
αι, ε	e	[e]	αυ	af, av	[af] [av]
ει, η, ι, οι, υ	i	[i]	ευ	ef, ev	[ef] [ev]
ο, ω	o	[o]			

子音字

ギリシャ文字	ラテン文字転写	音価	ギリシャ文字	ラテン文字転写	音価
β	v	[v]	ν	n	[n]
γ	gh	[ɣ] [j̊]*	ντ	d, nd	[d] [nd]
γκ	g, ng	[g] [ŋg]	ξ	ks	[ks]
γγ	ng	[ŋg]	π	p	[p]
γχ	nx	[ŋx]	ρ	r	[r]
δ	dh	[ð]	σ, ς	s	[s] [z]
ζ	z	[z]	τ	t	[t]
θ	th	[θ]	τζ	tz	[dz]
κ	k	[k]	τσ	ts	[ts]
λ	l	[l]	φ	f	[f]
μ	m	[m]	χ	x	[x]
μπ	b, mb	[b] [mb]	ψ	ps	[ps]

- 子音の畳用は，一つの子音として発音されている場合でも子音字を二つ書く。

  例：θάλασσα [θalasa] → thalassa「海」

- 例文中にギリシャ語圏以外の人名等固有名詞が現れる場合は，該当するラテン文字標記をそのまま使用する。

  例：η διατριβή του Τσόμσκι → i dhiatrivi tu Chomsky「チョムスキーの論文」

- 参考文献などにおけるギリシャ語圏の著者名については，文献でのラテン文字表記名を尊重し上の規則を適用せずそのまま使用した。

  例：Θεοδόρα Αλεξοπούλου「テオドラ・アレクソプル」

  上の規則によるラテン文字表記：Theodora Aleksopulu

  文献での表記：Theodora Alexopoulou ←こちらを採用する。

* γ のラテン文字転写について

  PhilippakiWarburton et al. (2004)は，/a/, /o/, /u/の前で[ɣ]（有声軟口蓋摩擦音）と発音されるものについては gh，/i/ /e/の前で[j]（有声硬口蓋摩擦音）と発音されるものについては gh または j と表記しているが，二つの子音は異音であるため本稿では両方とも gh で転写した。

略号

Nom	Nominative	主格	Fut	Future	未来
Acc	Accusative	対格	（ギリシャ語の場合は未来の小辞 θα を指す）		
Gen	Genitive	属格	Sub	Subjunctive	接続法
Dat	Dative	与格	M	Masculine	男性
Voc	Vocative	呼格	F	Feminine	女性
Pres	Present	現在	N	Neuter	中性
Impf	Imperfect	未完了過去	1	First Person	一人称
		（半過去）	2	Second Person	二人称
Imper	Imperative	命令法	3	Third Person	三人称
Past	Simple Past	過去	sg	Singular	単数
	（単純過去，アオリスト）		pl	Plural	複数

第1章　はじめに

1.1　文／発話の最初に現れるもの—「題目」

ヒトが発話する，あるいは文を生成する場合，どのような表現から始めるのであろうか。日本語では，まず，係助詞「は」でマークされる名詞句，すなわち主題が文頭（あるいは「発話頭[1]」）の要素の典型として考えられる。この「は」句で現われる主題は，(1-1)で言えば「この映画について言うと」というように，この文（発話）が何に対しての言及であるかを言語的に提示するものであるといえる。このような機能をもつ助詞には(1-2)の「なら」などもある。

(1-1)　この映画は，笑いと涙に満ち溢れている。

(1-2)　ベイブなら，きっと満塁ホームランを打ってくれるだろう。

また，現象報告文のような主題を取らない文（無題文）では，「が」でマークされる名詞句すなわち主語が文頭に現れやすい。

(1-3)　雨が降ってきた。

主題と主語は通言語的に文頭に現れやすい要素である（cf. Li and Thompson 1976）。その背景には文の構造として主語—述語 subject-predicate，主題—説明 topic-comment / theme-rheme の二つがあり，言語の線状性に従う形で，多くは新情報を担うこととなる述語および説明が文において後（右）に置かれることに関係している。

また，主語となるガ格の名詞句はしばしば焦点（項焦点 argument focus, cf. Lambrecht 1994）となって文頭に現われることもあり，現象報告文に現われるようないわゆる中立叙述の「が」とは違う。また焦点となって文頭に現われる句はガ格以外の名詞句や陳述の副詞や数量詞もあるため，文頭に現われる要素としては焦点も考慮に入れる必要がある

(1-4)　「面接に来たのは誰？」
　　太郎が面接に来たよ。（主語・焦点）

(1-5)　「課長は明日の飲み会に誰を誘うつもりなの？」
　　堀口君を課長は飲み会に誘うみたい。（目的語・焦点）

(1-6)　「初ライブに何人お客さん来てたの？」

[1] 書き言葉では述語で終わる文という単位が認められるが，話し言葉では句（いわゆる文節）だけによる発話も多く，発話の単位として文を考えるには無理があると考えられるため，本研究ではこのような語を用いる。

ぜんぜん／誰もお客さん来なかった。（副詞・数量詞の焦点）

そのほか，主題・主語や焦点以外にも下のように時間や場所，理由表現などの名詞句で始めることも多い。これらは焦点になる場合もあれば焦点にならず，状況設定の語句として現われているとも考えられる。

(1-7)　昨日　三宮で，交通事故があった。

(1-8)　台風による大雨のため，福知山線は現在運転を見合わせております。

以上のことは書き言葉の文法についてであるが，こと話し言葉になると，その文頭ならぬ「発話頭」の要素のバラエティはさらに豊かになる。例えば，先述の「は」や「なら」のような主題に類するものを取ってみても，「って」を伴うものや無助詞名詞句のように主題的要素[2]として現れるものがある。

(1-9)　山田君って，最近どうしてるんだろ？

(1-10)　この論文，何言いたいんかさっぱり分からん。

これらの主題的要素は，例えば「は」を使うと不自然となるような，先行文脈に現れていない指示物を主題的に提示して言及する場合に使用されることが挙げられている（これについては３節で詳しく取り上げる）。また，新たな話題を談話に導入する場合で，かつ恐らく聞き手がその話題となる事物を知らないと話し手が判断する場合[3]には，「は」や「って」のような助詞ではなく，次のように節の形で話題導入を行う場合がある。

(1-11)　こないだ北千里へ阿波踊りに行ってきたんやけど，あんなに体力使うなんて思ってもなかったわ。

1.2　「題目」または文頭詞

本研究では，1.1 節で見たような日本語の談話において発話頭に現れる様々な要素を，主題あるいは題目を中心とする「題目」（または「文頭詞」）として位置づけ，発話の最初に現れるということの意味に注意しながら，発話に際しての話し手の意図と言語形式の対応について考える。現時点での「題目」（文頭詞）の定義は以下のとおりである。

(1-12)　文ないし発話の最初またその近傍に現われる要素を「題目」（文頭詞）

---

[2] 「って」については主題と考える向きが多い（cf. 丹羽 1994，手塚 2001 など）が，無助詞についてはその形態的無標性からも主題を表す形式であるとは必ずしも言えない。

[3] Lambrecht (1994)の”pragmatic presupposition（語用論的前提）”で言い換えると，「『聞き手がこれから話題に上げようとしている事物について知らない』ことが語用論的前提になっている」に相当する。

と呼ぶ。

しかし，3 節での議論の結果を先取りして言えば，現象報告文（無題文）の主語や前に現れる焦点（前置焦点 preposed focus）は，主題や状況表現とは基本的に異なり，基本的に命題ないし述語（述部）に属するものであり，「題目」（文頭詞）には含めないことになる。

なお，本稿の「題目」の語は，一般に国語学で用いられる題目を拡張した概念として位置づけているが，非常に紛らわしいことは否めず，むしろ，「文頭詞」とでも呼ぶべきものであろう。そのため，以降，本稿でいうところの文頭・発話頭の要素はすべてカギ括弧をつけた「題目」（文頭詞）として表示し，従来使用されている主題相当の意味としての題目とは区別する。

1.3　「題目」の拡張可能性

発話頭の要素には，そのほか感動詞[4]（「あっ」「えっ」など）や，呼びかけ詞[5]（「あんた」「太郎くん」「先生」など），あるいは「ねえ」「なあ」，「はい」「いいえ」などのいわゆる「文」の要素から外れるものもあるが，これらは発話の最初に現れることが多く，また談話上非常に重要な役割を果たしていることからも，決して無視するわけにはいかない要素である。

接続詞と文副詞（例：「悲しいことに」「幸いにも」）には，主題や時間・場所表現と同様に発話頭（文頭）に現れやすい。特に接続詞は，書き言葉・話し言葉ともに談話（文章）の展開に大きくかかわっていることは明らかであり，その点において主題とも密接な関係があると思われる。

(1-13)　<u>しかし</u>，電気用品安全法の経過措置の停止には事業者や消費者からの強い反発も依然存在し，さらなる議論が必要である。

感動詞や呼びかけといった話し言葉に属するような表現も発話頭に現れやすい要素である。これらは，命題に直接関わらないことから副詞的であるとされ，その意味では先ほど見た接続詞などに近い。感動詞については，たとえば発見したときに現れる「あ（っ）」は(1-14a)のように発話頭に現れるのが必然的であって，(1-14b)・(1-14c)のように発話の中間

---

[4]　この中には「立ち上げ詞」（cf. 友定 2005）としたほうがより正確と考えられるものがある。「立ち上げ詞」という考え方自体，本研究で言う発話頭に現れる要素を問題にしている点でも重要な示唆となる。

[5] 呼びかけ詞は，相手の呼称が無助詞名詞句として主題的あるいは述語の項として現れているものと連続性がある(cf. 尾上 1996，金田 2005a)。

や末尾に現れるのはきわめて不自然である。

(1-14)　a.　あ，こんなとこにあった。

b. ??　こんなとこに　あ，あった。

c. ??　こんなとこにあった，あ。

このことは極々当たり前のことなのかもしれないが，主題や接続詞が発話の最初に現れやすいことと，感動詞を発してその後に叙述を行うという行動を考えてみると，あながちまったく別のものであるとは言い切れないであろう。また，感動詞の中には，友定(2005)の提唱する「立ち上げ詞」もあるが，これは発話の最初に現れるという点で，本研究でいうところの「題目」（文頭詞）の考え方にも対応している。

次に呼びかけであるが，これも発話の最初に現れやすいことと，想定する聞き手を言語によって指定し働きかけようとするという行動を考えると，主題の提示にもつながってくるのではないだろうか[6]。

(1-15)　a.　山田君，座布団持って行って。

そのほか「題目」（文頭詞）の候補になりそうなものとしては，いわゆる「前置き」的発話(1-16)や，語りの発話で現れるようなオノマトペの独立用法(1-17，cf. 田守 1991)なども考えられる。

(1-16)　つかぬ事聞くけど，きみ，独身？

(1-17)　ボチャーンねこ池落ちよってん。　（尾上 1985 より）

前者の前置き的発話は(1-8)のような話題の導入にも，「ところで」のような話題転換の接続詞にも似ている。後者の「ボチャーン」は，今まであげてきたような「題目」（文頭詞）の候補とは似ても似つかないように見えるが，「ねこがボチャーンて池に落ちよってん」とは違って，「ボチャーン」という状況を再現するようなオノマトペと，その状況の説明とも解釈できる「ねこ池落ちよってん」の間に断絶がある（cf. 尾上 1985）と見れば，主題―説明構造のような二分構造にもつながってくる。「ボチャーン」が主題であるとは到底考えられないが，最初,に「ボチャーン」を発話することと主題を文頭に提示することは，あながち遠いものであるとは言い切れない。

以上，「題目」（文頭詞）として定義できるような表現の候補をいくつか見てきたが，問題点として「題目」（文頭詞）と認めてよいものの範囲をどこまで拡張するのかということが浮かび上がってくる。しかし，本研究では，(1-12)の段階で，とりあえず文ないし発話の

[6] Bally(1932;1965)や山田(1936)にも主題と呼格の連続性を示唆する記述がある。

最初に現れやすいものを「題目」（文頭詞）としたことから，1.1 節で見たように，文の中核をなすような主題，主語および焦点（先述のとおりこれら二つは基本的に「題目」（文頭詞）の範囲から外れる），文（発話）頭に現れる時間・場所といった出来事の背景となるような状況を示す表現が中心的なものとなる。しかし，あくまで最初に現れるということにこそ「題目」（文頭詞）の問題設定の意味があるという見地から，本節で見たような接続詞や感動詞などの，従来の文論ではやや周辺的なものも「題目」（文頭詞）として取り扱う。これらの一見周辺的と思われる要素も発話においては非常に大きな役割を担っており，これらを「題目」（文頭詞）として同等の考察を加えることによって逆に，従来の中心的なテーマであった主題や時間・場所表現，あるいは焦点に対して新たな示唆を与えることも可能になる。

1.4　本研究の意義

本研究では，日本語の話し言葉についての，発話の最初に現れるものを考察する。その場合，伝統的な文法研究，特に主題など「題目」（文頭詞）に関するものが書き言葉での現象について取り上げられることが多く，聞き手とのやり取りといった，話し手の環境とのインタラクションが常に関わる現場依存性のある話し言葉について取り扱う場合には，文法的な問題だけではなく，語用論的な要因が発話における文法性に関わってくる。つまり，話し言葉すなわち「談話」における文法について注目する必要がある。

また，主題など「題目」（文頭詞）に関わる研究は，多くの場合形態・統語論的に扱われることが多く，そのときに関係するピッチやイントネーションパターンについての観察が行われていることが少ない。フランス語などのロマンス諸語や現代ギリシャ語においては，主題提示が話し言葉で頻繁に行われる点で，統語的インタフェースと韻律的インタフェースの両面からの記述・分析が行われ，大きな成果を挙げている。また，外国語との主題に関する対照的研究は益岡(2004)でこそ本格的に行われているものの，特にフランス語に限って言えば，フランス語文法研究の枠組みだけで行われているものが多く，日本語との対照が本格的に行われているとはいえない。そこで本研究では，フランス語（ときに同じロマンス諸語であるイタリア語，スペイン語も）および現代ギリシャ語を中心に日本語との主題についての対照研究を，文法面と韻律面の両方から行うことにした。タイトルにある「総合」とは，今まで個別に扱われることの多かった文法と音声，日本語の主題とフランス語の主題といったことを対照の見地から，一枚岩に収めようとする試みとしての意味が

込められている。

1.5　研究の目的と方法

本研究では，1.1 節(1-12)に挙げられているような，発話の最初（またはそれが連続する場合も考え，その近傍）に現れる言語要素を「題目」（文頭詞）として捉え直す。そこから二段階に分けて，日本語の「題目」（文頭詞）の談話に対する役割についての調査研究を行うことで，ヒトが発話に「題目」（文頭詞）を使用するメカニズムを解明する。これが本研究の目的である。第一段階は，「題目」（文頭詞）が談話上で果たす役割についての記述と分類を行う。ここでは大別して①「題目」（文頭詞）の文法的特徴の対照研究と，②「題目」（文頭詞）に関わる韻律の特徴の研究の二つに分かれるが，これらは完全に区別して取り扱えるわけではない（理由は次章以降に記す）。①②については，おもに主題に関係する表現を取り扱うが，そこで得られた枠組みを，拡張された「題目」（文頭詞）にも適用できるか，あるいは適用できるなら「題目」（文頭詞）のプロトタイプ的なものとしての主題と，感動詞や接続詞などの拡張「題目」（文頭詞）との異同について調査する。

第二段階では第一段階で得られた知見をもとにして，ヒトが発話になぜ「題目」（文頭詞）を用いるのか，あるいは，どのように「題目」（文頭詞）の形式を選択しているのか，話し手の意識に基づいた談話の生成モデルを提案することを最終の目的とする。

1.6　本稿の構成

本稿では前節で述べた第 1 段階についての知見を第 2 章から第 6 章において紹介する。

まず，第 2 章から第 4 章では「題目」（文頭詞）の中心的な位置を占める主題表現についての形態的・構文的特徴についての考察を行う。第 2 章は本研究の「題目」（文頭詞）の枠組みにおける主題の提示についての，これまでの文献での考え方をまとめて，本稿における主題の位置づけを行う。

第 3 章では，ロマンス諸語（特にフランス語）および現代ギリシャ語の話し言葉に特に見られる主題提示表現としての左方転移構文について取り上げる。また，情報構造に関わる主題・焦点と韻律に強い関係があることから，言語形式だけでは音声形式についても構造に含める必要がある。また，左方転移構文や主題化構文，焦点化構文は命題よりも前の左周辺部 left periphery に主題を置くとされるが，日本語の文において左周辺部が存在するのか，あるいはどのような位置づけができるのかについて考察し，「題目」（文頭詞）の構

文的特徴の枠組みを模索する。

第 4 章は日本語の句末形式の韻律に注目する。第 3 章で見たロマンス諸語・ギリシャ語の左方転移構文は明らかに転移成分である句（イントネーションユニット）のピッチパターンには，主題提示のための特有な韻律形式が見られず，句が一つのイントネーションユニットを構成する場合の無標なピッチパターンを取る。この点は日本語においても多く見られるものであり，句（イントネーションユニット）単位でその末尾に特徴的なイントネーションパターンが確認される。この章では日本語の昇降調イントネーションについて取り上げ，非計画的発話に基づく非流暢性とそこ潜む心内処理と発話行動の面から考察を行う。そして，心内処理に関わる主題提示の問題を，非計画的発話の面から考察し，日本語における主題についての認知的側面について特徴を紡ぎ出す。

第 5 章・第 6 章では日本語における各種の「題目」（文頭詞）についての特徴について取り扱う。第 5 章では，日本語の話し言葉に特徴的な主題提示表現を形式である無助詞と「って」についての談話的・文法的特徴についての観察から，そこに潜む心内処理について考察する。また主題的無助詞とこれに意味的・語用論的に対応するフランス語の文との対象を行い，日本語の主題卓立性についても考察する。

第 6 章では，第 3 章・第 4 章で行った言語間対照から浮き彫りとなった日本語の主題に関係する構文的・韻律的特徴を踏まえて，接続詞や感動詞，呼びかけなど従来周辺的とされてきた「題目」（文頭詞）についての考察を行い，これらが主題や状況設定といった，典型的な「題目」（文頭詞）と近似性について論考する。

最後に第 7 章で，「題目」（文頭詞）に関する諸相についての取りまとめを行い，第二段階すなわち「題目」（文頭詞）がどのような発話上の行動に関わっているのかを考察する。

第2章 主題提示

2.1 本研究における主題提示の位置づけ

主題および主題提示に対する考え方にはどのようなものがあるだろうか。Vallduví(1992)を参考にして次にまとめた。なお,「主題」の語には topic と theme の語を特に区別せず両方に対応させている。

(2-1) a 何について言及するのか

b 旧情報 久野(1973)など

c 話題の連続性 Givón (1983)など

d 意識の中心・関心 Chafe (1994)など

e 最初の要素・発話の始点 Halliday (1967, 1994)

主題に対する考え方についての議論は数多の先行研究においても行われているので，これ以上の議論は避けるが，ここでは本研究における「題目」（文頭詞）との位置づけについて考えたい。Halliday の考え方は本研究における「題目」（文頭詞）の定義にほぼ相当するものである。また，話題の連続性や関心について考えてみると，話題の連続性がもっとも高い場合，あるいは発話時点ですでに意識の中心になっている（Chafe のいう active の状態である）場合にはゼロ形式の主題が実現されやすいという現実（三上 1972 でいう「陰題文」，cf. Givón 1983, Suzuki 1993)を考えると，言語化されているものを主題提示として捉える必要がある。また，Wh 疑問文に対する答えのように旧情報をすべて topic としてみる場合もあるが，このような topic は Vallduví(1992)のいう ground であり，ground は話題の連続性を考えて発話の中心となる focus の前後に現れるものはそれぞれ link と tail とされている。Vallduví の考え方をみても，tail すなわち発話（文）の末尾のほうに現れるものを積極的な主題提示であるとは思えず，主題として捉えるべきものはむしろ link すなわち発話（文）の最初（のほうに）置かれているものではないだろうか。

以上のことから本研究で扱う,「題目」（文頭詞）の下位分類としての主題は，次のように位置づけられる。

(2-2) a 言語的に明示されている（積極的に提示されている）。

b 発話（文）の最初あるいはその周辺である。

（「題目」（文頭詞）の定義）

c 後続の発話における言及の対象を表している。

また，主題と話題の違いについてもその位置づけをはっきりさせる必要がある。本論文では，主題および「題目」（文頭詞）は言語形式として現われたものとして考え，話題はむしろ内容（例えば「今，○○について話している」）に関するものであると位置づける。話題を言語的に表現したものが (2-2)の基準を満たして実現されたものは，主題になりうる。

2.2 情報構造と聞き手の関与

主題は，話者間の情報共有度に注目した情報構造の枠組みで捉えられことが多い。たしかに，聞き手にとって既知でない，あるいは話題に上りにくいものは主題にしにくいということは多くの場合言えると思うのであるが，実際に話し手は聞き手の心的状態がどのようなものであるかは, 直接知ることはできず, 両者の関係といった背景や談話現場の状況, あるいは聞き手のリアルタイムの反応を手がかりに推論することしかできない。Lambrecht(1994)では，このような理由から，問題となる事象すなわち主題の対象について聞き手にとって既知であるか未知であるかを話し手がどのように推論しているか，ということを語用論的前提 pragmatic presupposition の語で表している。

たとえば，日本語の談話に大きく関係するものに終助詞があげられるが，多くの研究では話し手の聞き手への関わり方に結び付けられたコミュニケーションモードの問題として扱われてきたが，金水・田窪(1998)においてこれらは言表の事態に対する話し手の認知の問題としても捉えられるという考えにより，コミュニケーションにおいても言語編集のパラメータとして必ずしも聞き手の様子を取り入れる必要はないことが提案されている。

本研究では,「題目」（文頭詞）の提示および形式の選択についての話者のかかわり方を第二段階において調査する以上，金水・田窪(1998)のような，話し手のみを言語編集上のパラメータに置くというスタンスをできるだけ執っていく必要がある。もちろん,「題目」（文頭詞）および主題の研究においてはこれまでも多くの談話的特徴が提示されており，これらの成果は大きな示唆を我々に与えているのは誰もが認めるとおりである。

第3章 主題の対照研究—フランス語とギリシャ語を中心に—

3.1 主題の対照研究を行うことの意義

主題についての言語対照研究は，Li (ed.) (1976)や益岡（編）(2004)などに詳しいが，場所・時間表現を含めた「題目」（文頭詞）に拡張して議論することも十分に意義があることと思われる。

また，主題に関係する研究については，ロマンス諸語や現代ギリシャ語についてのものが多く見られる。Li and Thompson (1976)の分類によると，これら印欧諸語は主語卓立言語 subject prominent languages とされるが，その一方で主題卓立(topic prominent)的な構文である左方転移 left dislocation や主題化構文 topicalization が，話し言葉を中心に見られる点で特徴的である。また，特にイタリア語やギリシャ語について，主題が個別言語の構造に組み込まれていることが，生成文法の枠組みのおいて明らかにされてきた。すなわち，構造として主題および焦点 focus のスロットがあることがイタリア語やギリシャ語について認められている。（cf. Alexopoulou & Kolliakou 2002）。

日本語についても主題が構造に組み込まれていることはこれまで多くの研究によっても確認されてきた。また，談話の見地から，ロマンス諸語やギリシャ語では主題—説明構造をとる構文は話し言葉で多く見られ，また，これらは日本語の話し言葉特有の提題形式である無助詞や「って」にも似た談話的特徴が見られる。その意味では，単に主題—説明という二分構造の枠組み以上に何らかの構造的類似性があるのではないだろうか。

また，主題および焦点に関わる情報構造とイントネーションに強い関係があることもロマンス諸語およびギリシャ語に関して言われている（Di Cristo 1998, Le Gac and Yoo 2000, Delais-Roussarie, Doetjes & Sleeman 2004 など）。日本語の主題についても同様の問題のアプローチの可能性があるが実際にはどうなのであろうか，考えてみる必要がある。

本章では，「題目」（文頭詞）について研究する上で，ロマンス諸語やギリシャ語の主題構造を参考にしてどのような枠組みが採用できるのかを目指してみたい。なお，本研究では全体的にギリシャ語，ロマンス諸語については主にフランス語について取り上げるが，必要に応じてイタリア語やスペイン語の事例や先行研究にも触れることにする。

3.2 主題提示の対照—ロマンス諸語・ギリシャ語と日本語

3.2.1 左方転移と主題化構文

ロマンス諸語およびギリシャ語において，一般に主題提示の方法として考えられているものには，左方転移構文 left dislocation による統語的な形式がある。左方転移による主題提示は，転移されるすなわち主題となる名詞句の意味的特徴，すなわち定性 definiteness や指示性 specificity，総称性 genericity などが関わる。本節では，左方転移およびそれに関係する現象について形式的な側面について注目し，上に挙げたような名詞句の意味的特徴についての議論は差し置くことにする。

左方であるからそれは要素が無標な位置よりも前置された構文であり，その意味では本研究で言う「題目」（文頭詞）の考え方に沿うものである。以下はフランス語の例である。

(3-1) a. J'ai donné un bouquet à Marie.
"I gave a bouquet to Mary."
マリーに花束をあげた。

b. <u>Marie</u>$_i$, je lui$_i$ ai donné un bouquet.
"<u>Mary</u>$_i$, I gave her$_i$ a bouquet."

c. <u>A Marie</u>$_i$, j' t_i ai donné un bouquet[1].
Lit. "To Mary, I gave a bouquet."
マリーには花束をあげた。

(3-1a)は基本的な語順であり，(3-1b)が左方転移構文である。前置した Marie に対して，それを与格代名詞 lui (to her)で照応する構造となっている。この照応する代名詞は残留代名詞 resumptive pronoun とも呼ばれる。この構文は左方転移要素である Marie がなくても文法的な文として通用する。(3-1a)は主題化構文 topicalization であり，(3-1a)の à Marie の部分ごと前置している構文である。この場合は照応する代名詞（ここでは lui）をとらない。

次にギリシャ語を見てみよう。ギリシャ語はロマンス諸語同様，目的語代名詞は通常同士の直前に倚辞 clitic として現れる。また，ロマンス諸語の多くでは一般名詞・形容詞の格変化はなくなっているが，ギリシャ語は主格・対格・属格および呼格の四格を保持してい

[1] "<u>A Marie</u>$_i$, je lui$_i$ ai donné un bouquet."のように，与格成分の左方転移構文（後述の clitic left dislocation に相当する）は主題成分の与格を表す前置詞 à (to)と三人称単数与格を表す lui による二重の与格標識のため，この文を冗長であるとして不自然とする母語話者がむしろ多い(cf. Berrendonner and Reichler-Béguelin 1997)。

るのが特徴である[2]。

(3-2) a. Idha ton Kosta xtes.

(I-)saw the-Kostas.Acc yesterday

（私は）昨日コスタスに会った。

b. O Kostas$_i$ ton$_i$ idha xtes.

the Kostas$_i$.Nom (I-)saw him$_i$ yesterday

コスタスといえば，昨日彼に会ったよ。

c. Ton Kosta$_i$ ton$_i$ idha xtes.

the Kostas$_i$.Acc (I-)saw him$_i$ yesterday

コスタスには昨日会ったよ。

ギリシャ語はイタリア語やスペイン語と同様に主語を明示しなくてもよい（いわゆるPRO-drop）言語であり，(3-2)は動詞 idha「見た」が一人称単数形の活用語尾-a を持つことから，主語が「私」であることは自明である。(3-2a)は無標な(S)VO 語順であり，(3-2b)と(3-2c)が左方転移による主題化である。(3-2b)は文頭に無標である主格で提示し, 動詞”ksero”の目的語として ton (him)で照応している。これに対し(3-2c)は対格で文頭に提示されており, 転移成分と性・数・格が一致する代名詞”ton”で照応する。一般に話し言葉で使用される左方転移による主題化は(3-2c)であり，ギリシャ語において主題化 topicalzation という場合はむしろ(3-2c)の形式を指す。

(3-2b)と(3-2c)はともに左方転移構文であるが，転移される主題成分の格が，命題における格と一致せず主格で現われた(3-2b)は hanging topic left dislocation (HTLD)と呼ばれ，(3-2c)のように格の一致を伴い，動詞に直前またはその近傍に現れる場合の clitic left dislocation (CLLD)と区別される（cf. Riemsdijk and Zwarts 1997）。フランス語では(3-3b)のように対応する代名詞を取らずに直接目的語を主題成分とする主題化構文を取ることは非文法的であるとされ，(3-3a)のように対応する代名詞 le（例では l’）を伴う左方転移による主題が一般的である。しかし間接目的語とは違って直接目的語すなわち対格についての標識がないため HTLD と CLLD を区別できない。

(3-3) a. Ce bouquet$_i$, je l$_i$’ai donné à Marie. （左方転移）

[2] 古典語に見られた与格は衰退し，対格および属格または前置詞句で代用されている。”en taksi”(in order.DAT, “O.K.”), “tis ekato”(the-hundred.DAT, “per cent”)のような一部の成句にその名残をとどめるのみである。

b.　* Ce bouquet j'al donné à Marie.　　（主題化）

しかし，間接目的語が主題にする場合は(3-4a)のように HTLD をとるか，対応する代名詞を伴わない主題化構文(3-4c)をとり，(3-4b)のように，転移成分に格標識—すなわち間接目的語の標識 à—を伴う CLLD は一般には非文法的であるとされる。

(3-4)　a.　Marie$_i$, je lui$_i$ ai donné un bouquet.　(HTLD)　　=(3-1b)

"Mary$_i$, I gave her$_i$ a bouquet."

b.　?A Marie$_i$, je lui$_i$ ai donné un bouquet.　(CLLD)

Lit.　"To Mary$_i$, I gave her$_i$ a bouquet."

c.　A Marie$_i$, j' t_i ai donné un bouquet.　（主題化）　=(3-1c)

Lit.　"To Mary, I gave a bouquet."

マリーには花束をあげた。

しかし，間接目的語の CLLD は認めないという話者が多いとはいえ，絶対に現れないというわけではない。フランス語に関しては CLLD と HTLD とにイントネーション上の違いがなく，また語用論的な違いは見出せないと Delais-Roussarie et al.(2004)は述べている。ギリシャ語の HTLD は CLLD に比べると生産性は高くなく，格が一致しないことから破格 anacoluthon とも呼ばれる(Holton et al. 1997)。

これまで見てきたものは目的語の主題提示であったが，では主語についてはどうであろうか。フランス語の主語代名詞は目的語の代名詞と同じく語アクセントを持つことはないため倚辞として扱われる。そのため目的語と同様の方法で左方転移が可能である。

(3-5)　Jean$_i$, il$_i$ a donné un bouquet à Marie.

"John$_i$, he$_i$ gave a bouquet to Mary"

ジャンは花束をマリーにあげた。

これには，普通名詞や固有名詞だけでなく，人称代名詞の独立形（強勢形）forme tonique を左方転移し，もう一度主格倚辞で受ける場合もあり，対比的な主題になりやすい。

(3-6)　Moi, il faut que j'aille en ville

"Me, it is necessary that I go to town"

私は町に行かなければならない。

主格倚辞の je は que 以下の従属節の中にあるが，文頭にある独立形の moi と呼応することにより左方転移構文を実現させている。

イタリア語やスペイン語は同じロマンス諸語であるフランス語とは違い主語の表示が随

意的である（いわゆる PRO-drop 言語）。ギリシャ語もまた主語の表示が必須ではない。そのため，主語が明示的に現れることは新情報の場合を除けば有標であり，それなりの動機が背後にあるものと思われる。一般に(3-7a)(3-8a)のように動詞よりも前に現れる場合は旧情報として主題として解釈されることが多く，(3-7b)(3-8b)のように動詞より後に現れる場合はむしろ新情報として焦点になりやすい。

(3-7)　イタリア語

a.　Gianni è arrivato.　（主題解釈）

"John is arrived."

ジャンニは来た／来ている。

b.　È arrivato Gianni.　（新情報解釈）

"John arrived."

ジャンニが来た。

(3-8)　ギリシャ語

a.　O Ghiannis　tha erthi　avrio.　（主題解釈）

the-John.Nom Fut come　tomorrow

"John will come tomorrow."

ヤニスは明日来る。

b.　Avrio　tha erthi　o Ghiannis.　（新情報解釈）

"Tomorrow John will come."

明日はヤニスが来る。

また，Duranti and Ochs (1979)はイタリア語について，主語が主題提示される場合，目的語などの左方転移における残留代名詞に相当するものは，動詞の人称活用語尾（(3-10)の場合は essere "be"の 3 人称単数現在形 è "is"）がそのマーカーであるとして，目的語の左方転移と同様であると述べている。ただ，(3-7a)のように SV 語順を取っていても必ずしも主題解釈になるとは限らず，Gianni に焦点がおかれる場合や報告文のように文全体を焦点とする場合もあり，その成立にはイントネーションも関わってくる(cf. Rossi 1998)。

以上見てきたように，フランス語では主格倚辞よりも前，スペイン語・イタリア語・ギリシャ語では動詞よりも前に現れる場合にその成分が主題として扱われる場合がある。この点は，左，すなわち発話の最初のほうに一旦提示するといった意味で「題目」（文頭詞）の概念と相通じるところが大きい。しかし，前にあるからといってそれが主題である保証

はなく, 旧情報と関わりやすい主題とはむしろ対立する焦点である場合もある (3.3 節参照)。

3.2.2 左方転移構文と日本語の主題

ロマンス諸語やギリシャ語において，最も典型的とされる主題提示形式である左方転移構文において, その特徴的な現象として命題内に提示された成分に対応する代名詞倚辞(時に語彙的な形式）での呼応が見られることはすでに述べたとおりであるが，この代名詞による呼応について考えてみる。

日本語では，既知である内容は明示的に現われないことがある。いわゆるゼロ照応であるが，直接目的語・間接目的語に関してはロマンス諸語（フランス語では主語も）やギリシャ語では代名詞倚辞が現われることが必須である。

(3-9) Q: 君はあの花束を久乃にあげたの？
A: うん，（僕は）（あの花束を）（久乃に）あげたよ

(3-10) Q: Tu as donné ce bouquet à Hisano?
"You have given that bouquet to Hisano?"
A: Oui, je le lui ai donné. / * j'ai donné.
"Yes, I it to-her have given"

(3-11) Q: Edhoses ekina ta luludhia sti Hisano?
"(You-)gave those the flowers to-the Hisano? "
A: Ne, tis ta edhosa. / * edhosa.
"Yes, to-her them (I-)gave."

これに対して，他動詞の絶対用法は日本語では目的語を空位にはできないことが多い。

(3-12) a. Fumer tue[3].
b. To kapnisma skotoni.
c. Smoking kills.
d. ?喫煙は殺す。／喫煙は人を殺す。

(3-12a, b, c)はそれぞれフランス語，ギリシャ語，英語で煙草のパッケージに書かれた注意事項であるが, 他動詞「殺す」が目的語を取らない絶対用法で現われている。しかし, (3-12d)の日本語では，他動詞の目的語に「人を」のような漠然としたものを置いておかないと不

[3] フランス語の fumer "to smoke"および英語の smoking も動詞の絶対用法と考えられる。

自然である。日本語では，項が空位で表されることで照応を行う読みになってしまうため，絶対用法が成立しない。以上のことから，ロマンス諸語やギリシャ語における代名詞倚辞の出現と日本語のゼロ照応が鏡像的に対応していると言える。

ロマンス諸語やギリシャ語の左方転移に立ち返ってみれば，転移された成分（主題）に対して命題内で対応する代名詞などで受けることと，日本語が「は」などで主題提示された成分を命題内で「それ」「彼」などで明示的に対応させることが少ないことは，上で見た代名詞の出現とゼロ照応の鏡像性を考えると，実は同じ構造であることを示唆している。

(3-13) a. Cette pomme$_i$ c'est moi qui l$_i$'ai mangé.

"That apple$_i$, it's I that ate it$_i$."

b. あのりんご$_i$は僕が（*それ$_i$を）食べた。

3.3 焦点

3.3.1 前置焦点と分裂文

フランス語では左方転移構文とは別に，残留代名詞を伴わない主題化構文も現れることは 3.2.3 節で見たとおりである。では，ほかの言語でこれに形式的に対応する構文はどうであろうか。福嶌(2004)はスペイン語について，いわゆる主題化構文に相当するものは主題ではなく焦点となる要素が文頭に現れると述べている。

(3-14) a. El piano$_i$, lo$_i$ toca Juan.

the piano, it plays John

ピアノはフアンが弾く

b. **El piano** toca Juan.

（ほかでもない）ピアノをフアンが弾くのだ（福嶌 2004 より）

(3-14a)は左方転移構文で，文頭の el piano「ピアノ」が主題として解釈されるのに対し，(3-14b)のそれは主題ではなく，むしろ「フアンが弾くのはピアノだ」のように焦点が前置されているような構文になっている。同じことはギリシャ語についても言える。

(3-15) a. Ton Kosta$_i$ ton$_i$ idha xtes.

the Kostas$_i$.Acc (I-)saw him$_i$ yesterday

コスタスには昨日会った。＝(3-5c)

b. **Ton Kosta** idha xtes (, oxi to Ghiorgho).

the Kostas.Acc (I-)saw yesterday (not the George.Acc).

（ヨルゴスではなくて）コスタスに昨日会った。

(3-15a)は(3-14a)と同様，対格の目的語 ton Kosta「コスタス」を主題とする左方転移構文(CLLD)であるが，(3-15b)では ton Kosta が焦点を帯びるような解釈となっている。(3-12b)・(3-15b)のような構文は焦点前置構文 focus preposing (Cf. Alexopoulou 1996)（または focus preposing）と呼ばれる[4]。スペイン語やギリシャ語（フランス語もイタリア語も）では，通常, 焦点は文末に置かれるが, それが動詞よりも前に現れるという点で有標 marked である。主語が新情報で焦点となる場合も同様に文末に置かれるが，その焦点になっている主語が動詞よりも前に現れる場合があり，韻律を無視して語順だけを見れば主題解釈の場合と競合する。さらに，全体焦点文における主語として現れる場合もあり，単に語順の問題として主題および焦点を考えることは限界がある。

このような焦点前置構文についてはどのように見るべきであろうか。Kiss(1998)は，焦点に二種類あることを指摘している。Wh 疑問文に対する答えのように前提に対する指定的焦点(identificational focus)と，新情報としての情報焦点(information focus)を挙げている。前者は日本語学でいう指定あるいは総記の解釈 exhaustive reading を生み，これには構文上，前置されなければならないと Kiss は述べている。つまり，最後に置いてはいけないということである。後者の新情報としての焦点は前置するなどといった統語的操作を必要とせず，一般的に文の最後におかれる点で，指定的焦点と相補的である。

(3-16) a. **Ston Petro** dhanisan to vivlio.
to-the Peter.ACC lent.3pl the-book.ACC
"It's **to Peter** that they lent the book."
（ほかでもない）ペトロスに（彼らは）本を貸した。

b Dhanisan to vivlio **ston Petro**.
"They lent the book **to Peter**"
（彼らは）本をペトロスに貸した。 （Kiss 1998 より）

(3-16a)の ston Petro は指定的焦点であり，これが動詞 dhanisan "(they) lent"よりも前に現れて

[4] ギリシャ語にも主題化構文がないわけではない。Alexopoulou and Kolliakou (2002)および Roussou and Tsimpli (2006)は，主題化構文がおもにニュースなどに限って使われると述べているが，映画 *Politiki Kouzina*（2004，邦題『タッチ・オブ・スパイス』）にも Melani, pote allaksete? "Ink, when did you change?"「インクはいつ変えたんだ」という台詞がある。不定（または不可算）の名詞句の場合は目的語倚辞で受けられないため，主題化構文を取っている。その意味でも，主題提示はせいぜい左周辺に置かれることであり，倚辞を伴う左方転移構文が主題提示構文であるとはいえない。

いる[5]。(3-16b)は，旧情報から新情報へと流れる無標な語順における情報焦点である。

では，主題化構文をもつフランス語ではどうなるか。焦点前置構文にもっとも対応しているものはおそらく分裂文 cleft sentence であろう。

(3-17) a. À la gare j'ai vu Jean.

"In the station I saw John."

駅でジャンと会ったよ。

b. * Jean j'ai vu à la gare.

c. C'est Jean que j'ai vu à la gare.

"It's John that I saw in the station."

ジャンと駅で会ったよ。（駅で会ったのはジャンだ。）

(3-17a)は情報焦点として文末に Jean が現れているが，これを焦点前置した(3-17b)は非文法的であるとされる[6]。「ほかでもないジャンに」のように Jean を指定的焦点とする場合には(3-17c)の分裂文が選択される。分裂文による焦点前置は，虚辞的ともいえる c'est を除いて焦点となる要素が最も前に現れている点においてもスペイン語やギリシャ語の焦点前置構文に対応しているものといえる[7]。

(3-18) C'est Henri qui est arrivé[8].

"It's Henry who came."

アンリが来た。（来たのはアンリだった。）

(3-18)は疑問 Qui est arrivé?「誰が来たの」の答えとしての発話であるが，Henri が焦点になるような構文である。しかし，この場合のように主語が疑問になっているものの答えとしては，次のように見た目上無標な語順でも十分に可能である。

(3-19) Henri est arrivé.

"Henry came."

---

[5] Haidou (2004)では，ギリシャ語の前置焦点には，情報構造上の焦点であることは認めながらも，総記解釈が必ずしも出るわけではないことを指摘している。

[6] Rowlett (2007)によると，歴史的にはフランス語にも焦点前置構文が存在し現在にも生き延びているということである。つまり，レジスターの高い近代フランス語(Modern French, ModF)的な書き言葉としては可能であり，レジスターの低い現代フランス語(Contemporary French, ConF)では認めないとしている。

[7] しかし，ベルギー，特にフランドル地方では焦点前置構文が使われることがある。また，英語やオランダ語などゲルマン諸語との接触によって"focus fronting à l'anglaise"（英語風焦点前置）の使用が近年拡大しているのではないかという意見もある(cf. Rowlett 2007)。

[8] この構文は，質問 Qui est arrivé?（誰が来たの）の答えとは違って，焦点・前提がない場合，無題文的な解釈（例：アンリが来た）になる。

アンリが来た。

(3-18)と(3-19)は，構文こそ異なるものの焦点の Henry が（分裂文の最初の”c’est”を除いて）最初の要素であり，焦点が前提「誰かが来た」にあたる est arrivé「来た」よりも前に現れている点では焦点前置構文と対応している。

しかし，(3-19)は通常の無標の語順ではあるが，主語に焦点が置かれないことが少なくないことを考えると，はたしてそれらが同一のものであるかどうかは疑いの余地がある。実際にはイントネーション上の区別があり，また(3-18)のような分裂文が常に焦点化をあらわす構文ではない点も問題である。形式的には分裂文をとっていながら，文全体が新情報（Lambrecht 1994 のいう sentence-focus）になるような場合がある。

(3-20) Laisse, lui dis-je. Ne vous occupez pas de moi. C’est ma mère qui est morte.

Lit. “Leave (me alone), to him said-I. Don’t occupy yourself about me. It is my mother who died”

（ほっといてくれ，とわたしは彼にいった。俺のことはかまわないでくれ，母が死んだのだ。）（川本 1985 より）

(3-20)は文脈上，誰が死んだのかが問われているわけではないため，下線部の分裂文は ma mère「（私の）母」を焦点とするような解釈はできず，無題文のようになる。このタイプの表現は c’est X qui といった分裂文だけでなく，j’ai X qui “I have X that”や il y a X qui ”Lit. it there has X that”という構文としても現れる（Lambrecht 1984, 1994）。

(3-21) Qu’est-ce qui t’arrive? - J’ai ma voiture qui est en panne.

“What’s happened to you?” - “It is my car that is broken”

（何があったの？ ―車が故障しているの。）

（Lambrecht 1994 より筆者改変）

(3-21)は「何があった」と訊かれての返答であるが，これも同様に，何かが故障していることが前提となっているわけではなく，無題文的である。(3-18)と(3-20)は表層では同じような分裂文であるが，イントネーションパターンに明らかに違いがある。これについては 3.4 節で述べるが，構文として同じ形式をとっていてもイントネーションパターンの違いが実際の発話に見られることから，本当の意味で同じ構文であるとはいえない。(3-20)のように全体焦点になるものは広域焦点分裂文 broad focus cleft として，(3-17c)・(3-18)のような指定的焦点を浮き彫りにする（mise en relief）いわゆる強調構文としての分裂文を焦点・前提分裂文 focus-ground cleft と区別される (cf. Doetjes, Rebuschi and Rialland 2004)。また，広域焦

点分裂文は”il y a / J’ai X qui”のような提示文 presentational にも通じている。

ギリシャ語では分裂文は一般的ではないが，(3-18)および(3-20)に対応する表現は次のようになると思われる。

(3-22) a. Irthe O Kostas.

came the Kostas.Nom

“Kostas came.”

コスタスが来た。（情報焦点解釈または指定的焦点解釈）

b. O Kostas irthe.

“Kostas came.”

解釈 1：コスタスは来た。（主題解釈）

解釈 2：（他の誰でもない）コスタスが来た。（指定的焦点解釈）

解釈 3：コスタスが来た。（報告文，全体焦点解釈）

焦点を強調する分裂文に相当するのは(3-22b)の解釈 2 であり，全体焦点となるような分裂文は(3-22b)の解釈 3 になる。(3-22b)は構文上同じ SV 語順で三通りの解釈が可能であるが，いずれも韻律上大きな違いがある。その理由は後で述べるが，いずれにしても，語順は同じであれそれがどのように発話されるかによって談話上では十分に区別される。あるいは，まったく違う発話意図でもって現れた構文が，上のケースにおいてたまたま同じ形式になっただけであると考えることができる。また，ギリシャ語の(3-22a)のような VS 語順はロマンス諸語のイタリア語やスペイン語にも現れる。この場合は前節で述べたように主語が新情報であるなどの情報焦点となるような場合の一般的な語順として多く現れる。

(3-23) (Xtes / Eki / Ksafnika) irthe o Kostas.

(Yesterday/ There[9] / Suddenly) came the-Kostas.NOM

（昨日／そこに／突然）コスタスが来た。（無題文的解釈）

しかし，VS 語順になる場合は，単に動詞と主語名詞句だけでは落ち着きが悪い。動詞の前に「昨日」「そこに」「突然」のような表現があるほうが相応しい(cf. Holton, Mackridge & Philippaki-Warburton 1997;2004)。このことは，題目位置に現れる場所や時間などの状況表現の問題とも関わっているが，もしこれらの状況表現がなく，いきなり VS 語順で始まる場合も文脈上あるいは発話現場において何らかの関連が必要であり，その意味でも(3-22b)の

[9] ここでは”at / to that place”としての”there”である。VS 構文はしばしば英語の there 構文にも対応するが，これについては本稿での言及範囲を超えているので特に扱わない。

解釈 2 のような指定的焦点の読みのものとは同じ状況で発話されたものであるとは思えない。

以上のことから，フランス語およびギリシャ語の主題構文について，構文だけではなく韻律パターンの両方で決定されていることを概観した。また，主題化に関わる問題としては，焦点の問題も同時に考えなければいけないことを確認した。また，主題と韻律こそ大きく違う点で，構文自体が表層上は似たように見えるのに構造を持っているという点での類似点もある。

3.3.2 焦点の位置とイントネーション

フランス語およびギリシャ語の主題と焦点に関わる韻律パターンは，概観してみる限りピッチ曲線に関しては解明されていると思われる。また，両言語におけるそれは，かなり多くの点で共通点が見られる。本節ではこれらについて紹介する。

主題の韻律形式を見る前に，まず焦点についての韻律を見てみよう。焦点には指定的焦点と情報焦点の二種類があることはすでに述べたとおりであるが，これら二つの焦点についての韻律的特徴はフランス語・ギリシャ語双方の先行研究を参考にすると次のとおりである（平叙文の場合）。

(3-24) 指定的焦点

・指定的焦点のかかる句には強いピッチアクセントが現れ，その終端で下降する。

・指定的焦点より後の要素のピッチレンジは圧縮される（Pierrehumbert and Beckman 1988 のいうダウンステップ）かほぼ平板になり，イントネーションユニットの終端は下降する。

(3-25) 情報焦点

・情報焦点はイントネーションユニットの終端にあり，その要素の終端でピッチは下降する。

(Cf. Baltazani & Jun 1999; Beyssade et al. 2004; Delais-Roussarie et al. 2002, 2004; Le Gac & Yoo 2002; Botinis et al. 2005)

(3-24)の指定的焦点の最初の項目のピッチアクセントであるが，ギリシャ語は後ろの３音節のどれかに現れる自由アクセントである点でフランス語とは違っているが，ピッチが高くなるという点では共通している。(3-25)の情報焦点は，構造的にも韻律的にも無標な形式を

とっている。また情報焦点は指定的焦点と共起し得ないことから，情報焦点のあるイントネーションユニットがピッチレンジの圧縮を蒙ることはない。以下にこれら二つの焦点のピッチパターンの例を示す。

(3-26)　Il a écrit **dix-sept** romans policiers.

“He wrote **seventeen** ditective novels.”

彼は 17 冊の推理小説を書いた。

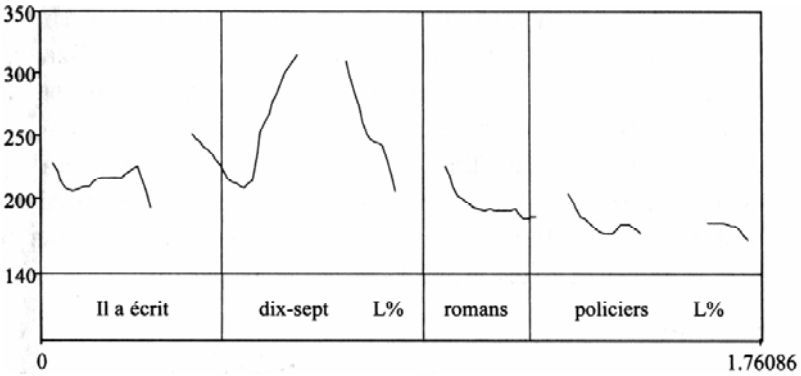


図 3-1　指定的焦点のピッチパターン例（dix-sept に焦点）

(3-26)では，dix-sept「17」に焦点が置かれている指定的焦点の例であるが，dix-sept にはピッチの大幅な上昇とその後に下降を伴う「ピッチの山」が置かれ，romans policiers 以下のピッチレンジは圧縮され全体的に低ピッチを取っている。

(3-27)　**Mallarmé** a acheté une mandoline.

“**Mallarmé** bought a mandolin”

マラルメがマンドリンを買った（マンドリンを買ったのはマラルメだ）

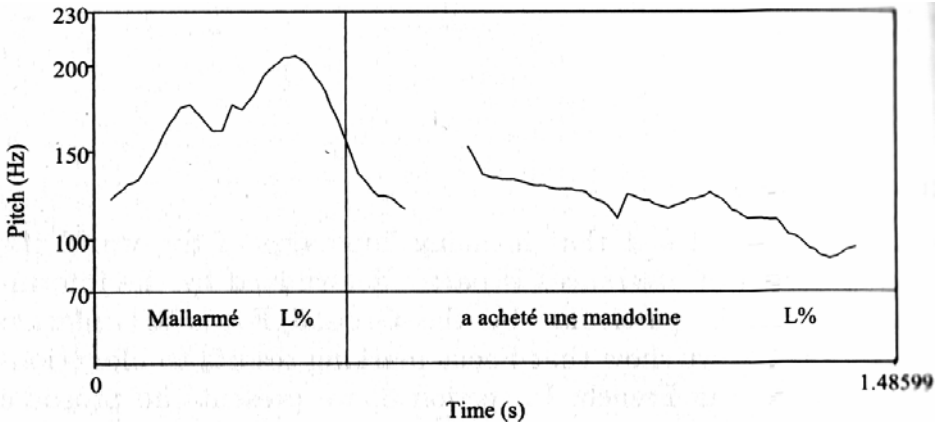


図 3-2　指定的焦点のピッチパターン例（Mallarmé に焦点）

(図 3-1, 3-2 ともに出典は Beyssade et al. 2004:478-479)

この例は，Qui a acheté une mandoline?「誰がマンドリンを買ったの」という疑問に対する

答えの発話であり，Mallarmé が指定的焦点となってそれが主語の位置に置かれている点で焦点前置構文としても見なせる。ピッチ曲線を見ると，Mallarmé だけで大きなピッチの山が見られ，前提となる a acheté une mandoline「マンドリンを買った」のピッチレンジが圧縮されている。

同じことは，分裂文についても言える。まずはいわゆる強調構文とされる指定的焦点が置かれる分裂文の例を見る。

(3-28)　C’est **pour Tournier** qu’elle va voté.

“It is **for Tournier** that she is going to vote.”

トゥルニエに彼女は投票しようとしている。

（彼女が投票しようとしているのはトゥルニエ（に）だ。）

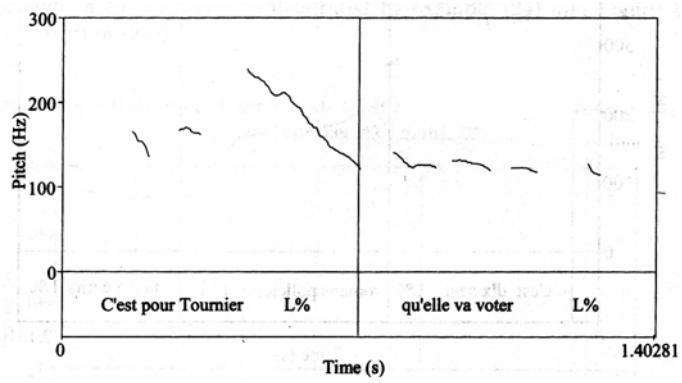


図 3-3　指定的焦点を提示する分裂文のピッチパターン例

（出展：Doetjes, Rebuschi & Rialland 2004:543）

(3-28)では(3-27)と同じく，指定的焦点である pour Tournier “for Tournier”に高いピッチとその直後の下降が見られ，前提となる elle va voter “she is going to vote”のピッチレンジは低く抑えられている。また焦点自体のピッチパターンは(3-27)は無標な語順，(3-28)は分裂文と構文こそ違えど, 指定的焦点の前置とイントネーションは基本的に対応していると言える。

次に，出来事文でもある全体焦点文のピッチパターンを見てみよう。まずは無標の語順から確かめる。

(3-29)　Jean-Pierre est arrivé.

“Jean-Pierre came.”

ジャンピエールが来た

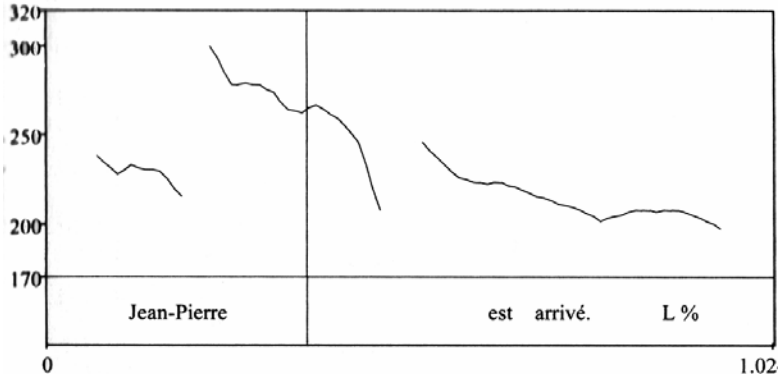


図 3-4　情報焦点のピッチパターン例

(出典：Beyssade et al. 2004:478)

(3-29)は全体焦点文（出来事文）の例であるが，Jean-Pierre est arrivé「ジャンピエールが来た」全体で一つのイントネーションユニットがおかれている。一見したところ，主語である”Jean-Pierre”に音声的な卓立が現れているようにも見えるが, 動詞句の est arrivé のピッチレンジを抑えることなく, 連続的になだらかにピッチが下降している点で(3-27)と異なる。

全体焦点の分裂文のピッチ曲線も見ておこう。

(3-30)　C’est l’ petit qu’est tombé dans l’escalier.

“It is the young one that fell down in the stairs.”

子供が階段で転んだのだ。

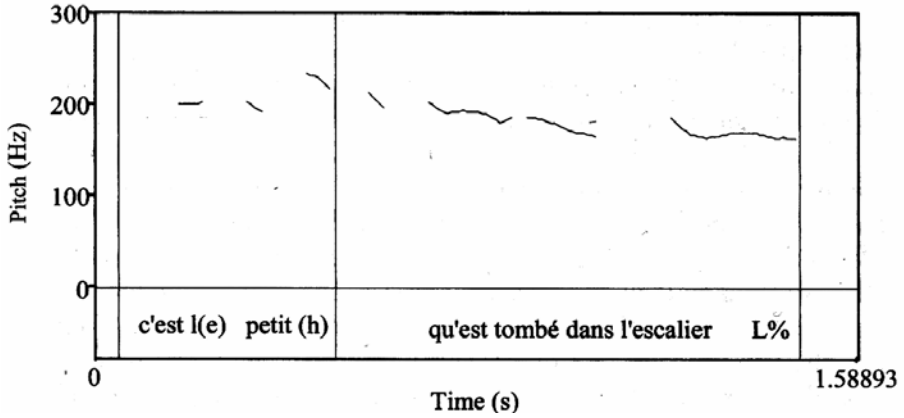


図 3-5　全体焦点分裂文のピッチパターン例

（出展：Doetjes, Rebuschi & Rialland 2004:549）

これも(3-29)と同じく，que 以下が緩やかに下降し，全体でひとつのイントネーションユニットを構成している。指定的焦点のケースと同じように，構文の違いを超えて情報構造がイントネーションと対応していることがわかる。

最後にギリシャ語の焦点前置構文と無標のイントネーションを確認する。

(3-31)　Q:　Pion epenese i Eleni?

Lit. “Whom praised the Elene?”

エレニは誰を褒めたの？

A:　**To Virona**　　epenese.

The-Viron.Acc　　praise.3sg.Past

彼女はヴィロナス（バイロン）を褒めた。

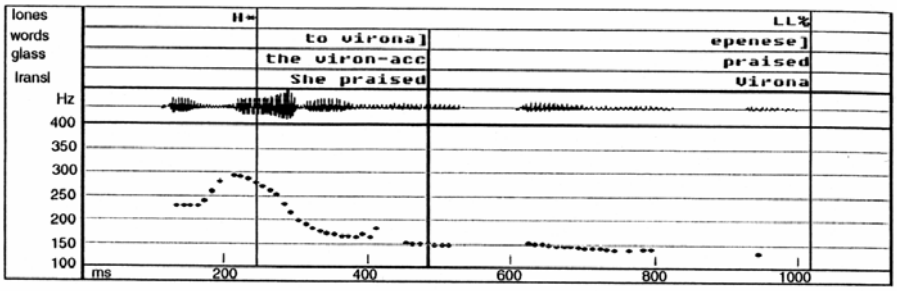


図 3-6　焦点前置構文のピッチパターン例

(3-31)は「誰を褒めたの」という疑問に対する答えであり，対格の to Virona「ヴィロナスを」を焦点前置したものである。焦点の to Virona でピッチの上昇と下降が起こり，それ以降のピッチレンジが抑えられている点で，フランス語における焦点前置である(3-26)～(3-28)とほぼ同様のパターンを示す。

次は無標の語順のイントネーションである。

(3-32)　Q:　Ti ekane i Eleni?

Lit. “What did the Elene?”

エレニは何をしたの？

A:　Epenese **to Virona**.

“(She) praised **the Viron**.”

（彼女は）ヴィロナスを褒めた。

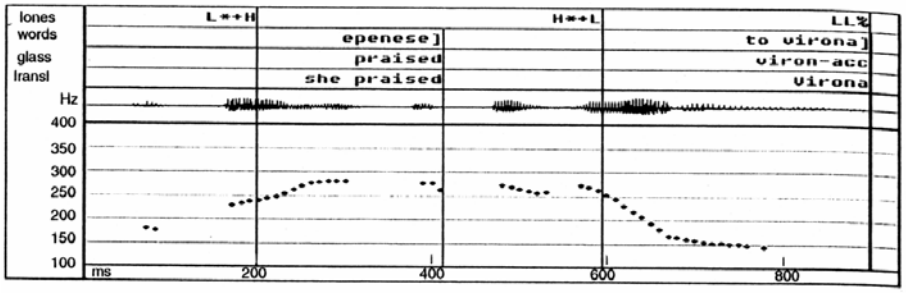


図 3-7　無標な文のピッチパターン例

（図 3-6, 3-7 ともに出展：Baltazani 2006:1668）

「エレニは何をしたの」という疑問の答えであるため，主題は主語の i Eleni「エレニ」である。主語が文脈上明らかであるか，もしくは自明であれば主語を明示する必要はないので，これは i Eleni が暗示された主題である陰題文であると言える。Epenese to Virona「ヴィロナスを褒めた」全体が主題に対する説明であり，しかも焦点となっていることからひとつのイントネーションユニットを構成している。これもフランス語の場合と同じ結果が見られる。

前提に対するものとしての指定的焦点が設定される場合，その場所にピッチの上昇と下降が現れる。そしてそれよりも後の要素のピッチレンジは低く圧縮される。つまり韻律的に卓立を焦点の位置に作っている。逆に全体が焦点となるような文ではそれ全体で上昇と緩やかな下降というようにピッチ曲線が大まかに言えば「へ」の字を描く，ひとつのイントネーションユニットが構成されている。また，フランス語では無標の語順と，分裂文のような有標な構文において焦点を表現する場合でも，焦点の位置およびタイプとイントネーションが，文の表層的な構造を超える形で対応するような関係が見出される。このことは，焦点に関してフランス語は統語的指標よりも音声的な指標のほうが相対的に強いことを示している。逆にギリシャ語は，フランス語に比べて語順が自由であることもあって，統語的指標と音声的な指標が協調関係にある。

3.4　左周辺の要素としての主題

3.4.1　主題とイントネーション

次に主題であるが，主題は一般には旧情報であり卓立的にはなりにくい。しかし久野(1973)は日本語の「は」について卓立のある場合には対比の意味を持つと述べており，また通言語的に主題が対比を表すという特徴がみられる（cf. Chafe 1976）ことからも，音声的に有標な形式を持ち得ないとは言い切れない。では，フランス語とギリシャ語の主題のイントネーションの特徴はどのようなものであろうか。

まず，フランス語の主題に現れるイントネーションパターンには Di Cristo(1998)および Delais-Roussarie et al.(2004)によると二種類あることが示されている。一つ目は，句末にかけてのピッチの大幅な上昇であり，その終端で下降する場合を含む。もう一つは，ピッチの緩やかな上昇と，最終音節の母音の延長によって表れされるもので，これは主題に限らず，たとえば等位接続のように列挙する場合のそれぞれの要素に対して現れるような，連続的でかつ句の区切りを表すものと考えられている（Beyssade et al. 2004）。

これらの構文とのかかわりを見ると，(3-33a)のような左方転移では両方が，(3-33b)の主題化では後者の連続調イントネーションのみが現れると Delais-Roussarie et al.(2004)は主張している。

(3-33) a. Marie$_i$, je lui$_i$ ai donné un bouquet. （左方転移）=(3-1b)

"Mary$_i$, I gave her$_i$ a bouquet."

b. A Marie, j'ai donné un bouquet. （主題化構文）=(3-1c)

"To Mary, I gave a bouquet."

マリーには花束をあげた。

しかし，フランス語の主題を考えた場合，主語（主格）および直接目的語（対格）の左周辺への転移による主題化は対応する倚辞などが必要であり，基本的に左方転移しか認められない。そのため，これらが左方転移する場合には同時に主題化構文の代用として現れている可能性が否定できない。以下にフランス語の主題に現れるイントネーションパターンの例を示す。

(3-34) Marie$_i$, c'est clair qu'elle$_i$ sera fâchée contre son frère.

"Mary$_i$, it is clear that she$_i$ will be angry with her brother"

「マリーは，明らかに兄さんに対して怒っているだろう」

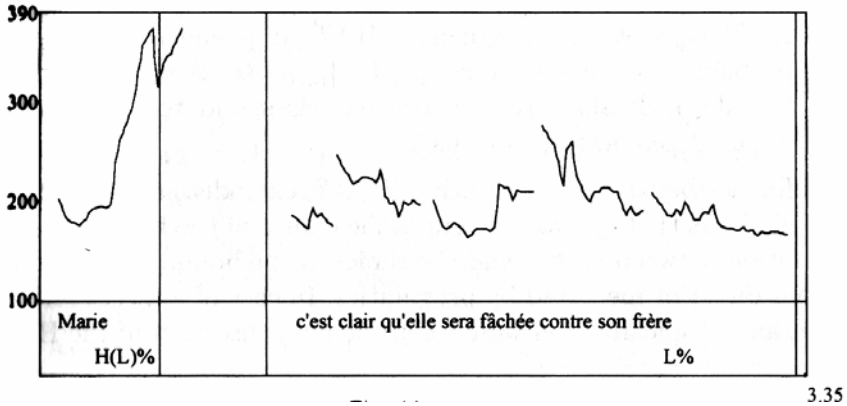


図 3-8　主題のピッチパターン例（上昇(下降)調"Marie"）

(出典: Delais-Roussarie et al. 2004:513)

(3-34)は Marie を主題とする文であり，それ自体は que 以下の従属節の主語 elle と呼応している。このタイプは左方転移構文であり，その時のイントネーションパターンは大幅なピッチの上昇（H）あるいはその後に下降（L）を伴うイントネーションである。またその後では fâchée（怒っている）に山が置かれるような独立したイントネーションユニットを構成しており，主題句の Marie と切り離される形で設定されている（図 3-8 の"%"は句境界を

意味する)。

(3-35) Aux filles elle a donné des exercices d'algèbre, (aux garçons elle a dicté des problèmes de géométrie.)

"To the girls she gave exercises of algebra, (to the boys she dictated problems of geometry)"

「(彼女は) 女子には代数の練習問題を与え, (男子には幾何の問題をさせた)」

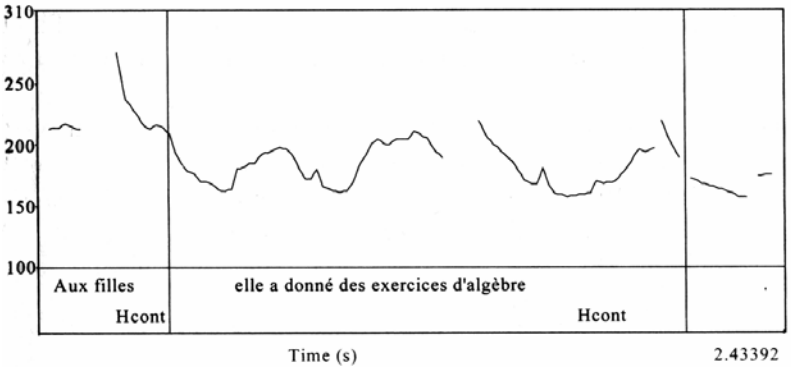


図 3-9 主題のピッチパターン例 (連続調"Aux filles")

(出典：Delais-Roussarie et al. 2004:515)

(3-35)は主題化構文の例である。この発話は後に aux garçons「男子には…」が続く「女子に」と「男子に」を対比する内容であり, 対比性のある主題化構文が選ばれている。イントネーション上の特徴としては, 主題表現 aux filles「女子には」において(3-33)の Marie よりは緩やかな上昇を行い, また elle 以下の主文と連続するようなイントネーションパターン (図 3-9 の Hcont: Continuous High) をとっている。また, この例では algèbre「代数」の後に同じ連続調 (Hcont) が現れているが, これは aux garçons「男子には」と続くことに起因すると考えられる。

ギリシャ語でも, 主題に現れるイントネーションパターンはフランス語と同様, 句末にかけての上昇を伴うもので連続と区切りを表す形式である。

(3-36) Ta marulia$_i$ **o Manolis** ta$_i$ efaghe.

"The lettuces$_i$ **Manolis** ate them$_i$."

レタスはマノリス (人名) が食べた。

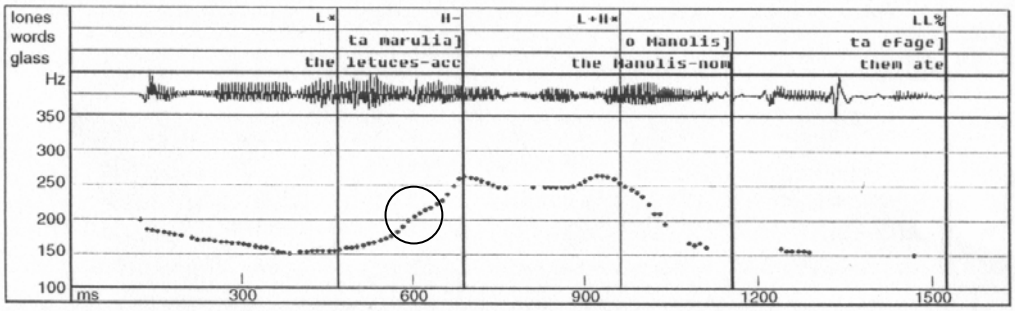


図 3-10　主題のピッチパターン例

（出展：Baltazani 2006:1669）

主題の ta marulia「レタス」はその末にかけて上昇調で現れる。そして焦点となる o Manolis「マノリス」に連続的に接続する。

ギリシャ語はフランス語と違い語末の 3 音節のどこかにストレスが置かれる自由アクセント言語であるが，ta marulia は後ろから 2 番目の音節(penultimate)の母音 u に置かれ，当然そこのピッチも高くなるはずである。確かに，図 3-10 を見ると主題句における上昇の途中で小さな頂点があり（○で囲んだ箇所）これが語アクセントであることが予想できる。しかし全体としては上昇の傾向にあり，結果，語アクセントのないはずの最終音節 ultimate の基本周波数(F0)が最大になっている。つまり，ギリシャ語の主題となる句に現れる韻律は上昇調であるといえる。このイントネーションパターンもまた，列挙する場合に個々の要素に対して現れるという意味で無標のイントネーションパターンであるとされる（cf. Baltazani and Jun 1999）。

フランス語およびギリシャ語の上昇調イントネーションは，主題に限らず動詞や焦点よりも前にある時間・場所のような状況補語についても現れる。以下にフランス語とギリシャ語のピッチパターンの例を示す。

(3-37)　Vendredi à l’école, c’est **Valérie** qui l’a grondé Jean-Marie.

“Friday in the school, it’s **Valerie** that scolded Jean-Marie.”

「金曜日学校では，ヴァレリーがジャンマリーを叱った」

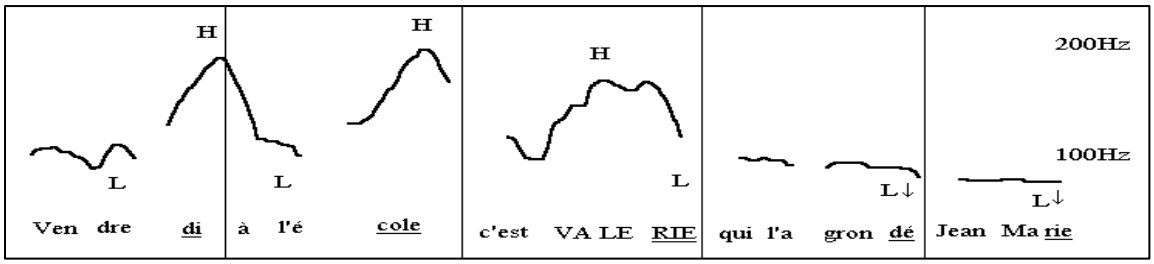


図 3-11　フランス語の左周辺要素のイントネーション（”vendredi”および”a l’école”の枠）

(3-38) Tin dheftera[10] sto spiti, **i Marina** xtipise ton Manoli.

The Monday in-the house **the Marina.Nom** hit the Manolis.ACC

"On Monday in the house, **Marina** hit Manolis"

「月曜日家では，マリーナがマノリスをぶった」

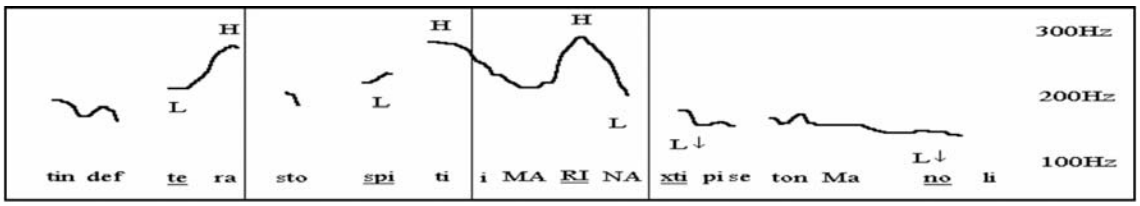


図 3-12　ギリシャ語の左周辺要素のイントネーション（"tin deftera"および"sto spiti"の枠）

（図 3-11, 3-12 ともに出典は Le Gac and Yoo 2002）

(3-37)・(3-38)ともに最初に時間（Vendredi「金曜日」，tin dheftera「月曜日」），次に場所（à l'école「学校で」，sto spiti「家で」）といった状況表現が置かれている。これらの状況表現のピッチを見てみると，これまで見てきたような左方転移ないし主題化された要素に現れるピッチパターンに酷似している。加えて，ギリシャ語の例(3-38)における状況表現は，後ろから 2 番目の音節に語アクセントがある（tin-def-té-ra，sto-spí-ti）。単語だけを発話する場合なら，語アクセントのある音節のピッチが最も高くなるのに対し，ここでは最終音節にかけての単調的なピッチ上昇である。(3-36)の主題句 ta-ma-rú-lia「レタス」においても語アクセントのある後ろから 2 番目の音節 ru においてピッチが最大にはならず，全体的な上昇パターンを取っている点（図 3-10 参照）で共通している。つまり，これまで見てきたような典型的な左方転移ないし主題化構文による主題に現れるピッチパターンと文頭の状況表現のに現れるピッチパターンは同じものであることがわかる。

これらの言語で主題要素とは，核となる命題に対して左周辺に置かれるものの一つに過ぎず，左方転移の場合は命題内で対応する代名詞，主題化構文の場合は命題における項の空位 gap によって特徴付けられるものである。しかしそれでは，左方転移のように対応する代名詞を表示するなどの形態・統語的な指標の要求といった問題がある。仮に残留代名詞が，左方転移された要素に対して前方照応 anaphora を行う形で項の空位を補充していると考えれば，それは命題側の問題（命題部分を発話する段階での言語編集）であり，結果として，左方転移された名詞句は，単に左周辺に名詞句が置かれたものとして状況設定的な場所・時間などの表現と同じものとして扱える。さらに，主題形式に対して現れるとさ

[10] 図 3-12 では"deftera"となっているが同じである。

れるこのような連続と区切りを表すとされるイントネーションパターンは，句に対して課せられるものであり，全体として連続を保ちつつも，句としての区切りを作る場合に現れる無標なイントネーションである（Beyssade et al. 2004）。したがって主題を表すための特定のイントネーションではないことが予想される[11]。つまり，フランス語（および他のロマンス諸語もおそらく）やギリシャ語における左方転移および主題化構文による主題とは，形式的にはせいぜい場所や時間表現などと同様のものであり，次にように位置づけられる。

(3-39)　・核となる命題の左周辺に置かれる。

　　・説明 comment に連続的に接続する。

核となる命題は，主語表示が随意的なギリシャ語やスペイン語，イタリア語では倚辞を含む動詞およびそれ以降，フランス語では主語位置の代名詞および名詞以降である。(3-40)では縦棒より左が左周辺，右が命題である。

(3-40)　a.　フランス語

Jean$_i$, Marie$_j$　|　il$_i$ la$_j$ voit demain.

John$_i$ Mary$_j$　　he$_i$ her$_j$ sees tomorrow

b.　ギリシャ語

O Ghiannis　ti Maria$_j$　|　tha tin$_j$ sinandhisi avrio.

the-John.Nom　the-Mary.Acc　Fut her see　tomorrow

“John$_i$,, Mary$_j$,,　|　he$_i$ sees her$_j$ tomorrow”

ジャン（ヤニス）は，マリー（マリア）とは明日会う（予定だ）。

3.4.2　主題と焦点の位置

主題については上で見たように命題の左側（左周辺）に置かれる一要素にすぎないことを見たが，焦点，特に前置された焦点との位置関係についてはどうであろうか。前節では主題についてのピッチについて見てきたが，焦点となる要素も同時に現れているはずであり，それについてもう一度取り上げることにする。

前置焦点と旧情報（前提）となる名詞句が現れる場合を見てみよう。

[11] フランス語では(3-32)のようにピッチの大幅な上昇と下降を伴う，有標な左方転移要素もあるため，そこまで単純化できない。このタイプのイントネーションをもつ左方転移については第 4 章で取り扱う。

(3-41)　a.　旧情報が焦点よりも前に現れる場合

<u>Ta marulia</u>$_i$ **o Manolis** ta$_i$ efaghe.

“The lettuces$_i$ **Manolis** ate them$_i$.”

レタスはマノリスが食べた。=(3-34)

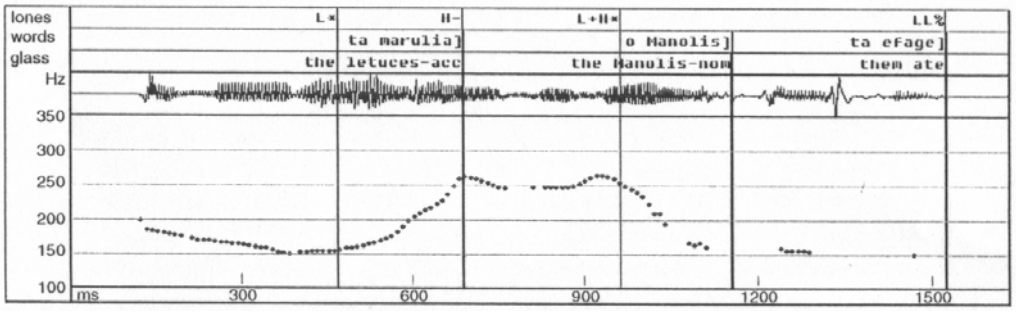


図 3-13　旧情報が焦点よりも前（左）にある場合のピッチ曲線（図 3-10 再掲）

b.　旧情報が焦点よりも後に現れる場合[12]

O Manolis ta$_i$ efaghe <u>ta marulia</u>$_i$.

Lit. “**The Manolis** them$_i$ ate the lettuces$_i$”

レタスはマノリス（人名）が食べた。

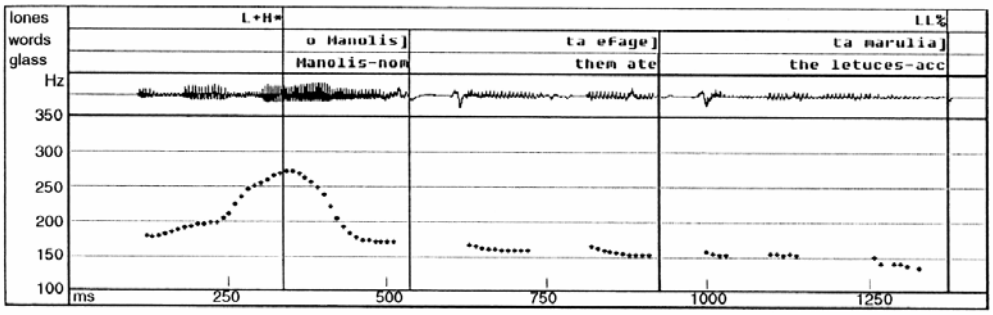


図 3-14　旧情報が焦点よりも後ろ（右）にある場合のピッチ曲線

（出展：Baltazani 2004:1669）

(3-41a)は旧情報の ta marulia「レタス」が前置焦点 o Manolis よりも前に現れるタイプであるが，これは ta marulia が上昇イントネーションで現れ，前置焦点である o Manolis に連続しており，前節で見たような主題としての特徴がある。しかし(3-41b)のように前置焦点よ

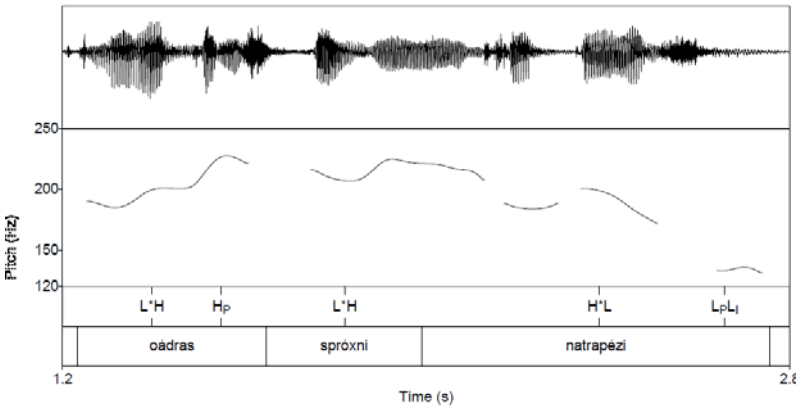
[12] もうひとつ考えられる語順に, 焦点 o Manolis と倚辞を含む動詞 ta efaghe の間に ta marulia が来る O Manolis ta marulia ta efaghe. もあるが，この語順では o Manolis は焦点ではなく主題でなければならず，その場合は「マノリスはレタス（について）は食べた」のように efaghe「食べた」が焦点になる。したがって，焦点が o Manolis である場合，ta marulia の位置は(3-39a, b)の二つしか考えられない。

りも後ろに現れると，ta marulia は目的語倚辞＋動詞の ta efaghe “ate them”に続いてピッチレンジが低く抑えられている。このことは，主題は前置焦点よりも前に現れなければならないことを示している。一般に左周辺に現れる要素は焦点よりも前になければならないことは，文献でも多く報告されている（Baltazani and Jun 1999, Roussou and Tsimpli 2006）。しかし，いくら ta marulia が話題の中心―「レタスは誰が食べたのか」という前提に基づく―であってもこれが命題の位置，あるいはそれよりも右に置かれた場合は韻律的にも卓立のず，ただの旧情報のひとつとして埋没してしまう。そういった意味からも，名詞句を左周辺に置くことに発話上のなんらかの意義があることがわかる。

以上は，前置された指定的焦点についてであったが，情報焦点と主題についてもこの関係が保たれることを見ておこう。

(3-42)　Q: Ti sproxni o andras?

“What pushes the man?”



男は何を押していますか？

A:　O andras sproxni (e)na trapezi.

The man pushes　a　table.

男はテーブルを押しています。

図 3-15　主題＋情報焦点の場合のピッチ曲線

（出展：Skopeteas and Féry (to appear)）

主題である o andras「男」ではピッチの上昇が現れ，その後の動詞＋目的語の sproxni (e)na trapezi では終端に向かってストレスアクセントによる多少の上下を伴いながら緩やかに下降する。3.3.1 節で見たように焦点前置とは違って情報焦点はピッチレンジの圧縮を起こさない。

以上，左周辺に現れる主題等の成分は焦点（指定的焦点・情報焦点ともに）よりも前に

現れることを確認した。このような構造をロマンス諸語やギリシャ語は持っていることから，Valluduví (1992)はカタロニア語の情報構造を元に，焦点 focus に対する旧情報ないし前提を背景 ground とし, さらにこれを focus の前後についてそれぞれ link と tail としている。3.2.1 節で見た左方転移や主題化構文によって主題化された要素や左周辺に現れる時間・場所表現は link であり，これらはフランス語やギリシャ語では主に上昇調の連続的イントネーションと伴って現れる。これに対して前置された焦点の後ろ側に当たる tail は，韻律的には低く圧縮されたピッチレンジとして実現される。

また，左方転移に対して右方転移 right dislocation がある。

(3-43) a. Marie$_i$, je la$_i$ vois demain. （左方転移）
"Mary, I see her tomorrow."
マリーには明日会うよ。

b. Je la$_i$ vois demain, Marie$_i$. （右方転移）
"I see her tomorrow, Mary."
明日会うよ，マリーに（は）。

(3-43a)は左方転移として Marie が主題になっているが，(3-43b)ではこれが命題よりも右に現れたものである。Lambrecht (1994)によると，右方転移は基本的に旧情報のみが可能であり，命題における項になっているものに対して現れる（Aboutness 要件）。右方転移の韻律的特徴としては，焦点の最後でピッチが下降したあとに，圧縮されたピッチレンジが現れる。これは焦点が前置された場合にそれよりも後の要素のピッチレンジが低く抑えられるのと同様である。

以上から，フランス語・ギリシャ語などの言語における文の構造としては，左周辺，命題，右周辺が存在し，焦点が現れた場合の命題と右周辺は共通することが言える。また焦点の位置は，前置焦点の場合はピッチレンジの拡大と後部要素のピッチの低下とピッチレンジの圧縮によって位置づけられる点では命題の中にあると考えられるが，焦点の前に現れる名詞句は主題と同じ統語的特徴（左方転移）もしくは韻律的特徴をもち，焦点のスロットが左周辺と命題の間，もしくは命題の再左方にあることがわかる。情報焦点（全体焦点，広域焦点）では，命題自体が焦点となり，特別な卓立も起こらないことから前置焦点のスロットが空である場合の焦点である。そういった意味で，焦点のスロットは主題などが入る左周辺と命題の間に入ると考えられる。

(3-44) Left Perifery (Topic) | (preposed) Focus | Proposition | Right Perifery

フランス語については，焦点前置構文が基本的に不可能であることから Rowlett (2007)では Focus のスロットが存在しないと述べているが，主語が焦点になる場合や分裂文ではこれが可能になることを 3.3.1 節で見たとおり，特定の状況に限られる Focus スロットであると考えられる。スペイン語やイタリア語，ギリシャ語では焦点前置構文が可能であることから Focus スロットが確固として存在することが言える。また，焦点については命題内の位置において，その場で(in situ)音声的な卓立が現われ，後部要素のピッチレンジが圧縮されるものもあり，焦点（指定的焦点）は Kiss(1998)の主張とは異なり必ずしも命題の最初に前置されなければならないわけではない。したがって，前置焦点のスロットは命題の直前，左周辺の直後の位置にあると考えられるが，主題や状況設定の表現のスロットとなる左周辺の領域を侵せないことから，命題における特別な位置であると考えるべきである。その意味で，文頭に前置された焦点は題目（文頭語）の典型的なものから外れ，むしろ非卓立的なものが左周辺に置かれることから，題目の要件には音声的な卓立を持たないことを付け加える必要がある。

3.4.3 日本語の主題・焦点の位置関係

日本語の文構造は，益岡(1987)が示しているように，主題—説明構造が基本であり，説明の中に項—述語構造があるという考え方ができる。主題は常に項構造（命題）よりも上位にあり，表層としては前（左）に現れる。フォーマルな研究においても，日本語の主題は IP の specifier にあると考えられている(Fukui 1995)。しかしその一方で，Tateishi(1994)のように主題のための特別の位置はないという考え方もある。「は」に関して言えば，主題提示に使われるだけでなく，名詞句などに付いて対比の意味を生む点，数量詞に付いて「少なくとも」の意味を生む副助詞としての用法がある点を考えると，「は」を主要部とする句のための位置を考えることは適切ではない。

そこから考える必要がある問題として，「は」が付く名詞句を即座に主題として扱ってよいのかということが浮かび上がってくる。何を以って主題と呼べるのかということについて考えなければならないだろう。そこで左周辺に現われる要素を Topic として扱えるっているような言語，即ち上で見てきたフランス語やギリシャ語などとを対照して，日本語の主題について再考することに意義はあるだろう。

まず，日本語において(3-42)で示した構造があるかについてのチェックを行いたい。主題と焦点（指定的焦点）の位置関係については日本語においても決まっているようである。

(3-45)　Q:　あのワインは誰にあげたの？

a.　あのワインは**堀口君に**あげたよ。

b.　?**堀口君に**あのワインはあげたよ。

(3-43)は二人の話し手が「あのワイン」についての知識を共有しており，それを問題にしている点，そして左に置かれている点で主題であると考えることができる。これに対する答えの発話は「あのワインは誰かにあげた」ことが前提になっており，「堀口君」が指定的焦点となる。その順番としては，「あのワインは」をわざわざ言うならば(3-43a)のように，主題とされる「あのワインは」よりも後にあるほうが自然であり，(3-43b)のように焦点より後にあると不自然である。したがって，前置焦点のスロットが主題よりも後ろ（右側）にあることが日本語においても言えることがわかる。

3.4.4　日本語の左周辺

次に日本語の左周辺について考えてみる。実際に Lambrecht (1986)が，口語フランス語”non-standard French”は，主語卓立ではなくむしろ主題卓立言語であり，主題―説明構造を持つとまで主張しているように，左周辺には特別な地位が認められるであろう。この左周辺は日本語ではどう位置づけられるであろうか。まず，主題とは別の，時間・場所といった状況設定をする表現について考えてみる。

益岡(1997)は，時間の副詞節「～とき」「～ときに」について，「に」が有無によって文の意味が異なることを指摘している。

(3-46)　a.　**京都の古本屋に行ったときに**この本を見つけた。

b.　この本を見つけたのは**京都の古本屋に行ったとき**だ。

(3-47)　a.　<u>京都の古本屋に行ったとき</u>思いがけない本を見つけた。

b.　#　思いがけない本を見つけたのは京都の古本屋に行ったときだ。

（益岡 1997）

(3-46a)は「に」が付く「とき」節は，(3-46b)のように分裂文で置き換えることができ，旧情報「この本を見つけた」に対して，焦点として「京都の古本屋に行ったとき」が提示された表現である。これに対して(3-47b)は出来事を時系列に沿って並べている表現であり，これを(3-47b)のように分裂文で言い換えると「京都の古本屋に行ったとき」が焦点になり「思いがけない本」が，「例の思いがけない本」といった旧情報・前提でなければならず(3-47a)の内容とはあわない。「に」がつく「とき」節は後件のイベントが起こった時を指定

する表現であり,「に」が付かないものは後件のイベントの背景としての事態を表現するものである。益岡は前者を「時の指定」後者を「時の設定」と呼び，前者は焦点の解釈が可能なものである。この違いは，節の主要部である形式名詞「とき」についての助詞「に」の有無としても考えることができ，Masunaga(1988)や加藤(1997, 2003)のいう無助詞の脱焦点機能にもつながっている。

しかし，助詞の有無が問題であるというわけではない。時間表現だけでなく場所表現についても「指定」と「設定」の違いが見られる。

(3-48)　塚口駅で人身事故があった。

「塚口駅で」は出来事「人身事故があった」の場所を表しているが，これは焦点解釈と非焦点解釈が可能である。焦点解釈の場合は「何駅で人身事故があったのか」という質問に対する答えのように前提が関わっているが，非焦点解釈の場合は，たとえばニュースのように何の前触れのない場合の発話であり，命題「人身事故があった」を広域焦点とする場合の，出来事の場所の設定を行っている。これらの違いは，ピッチに現われる。「塚口駅で」が焦点になる場合の「場所の指定」は,「塚口駅で」がもっとも高く，以下「人身事故が」「あった」の順にダウンステップを起こして低くなっていく。「場所の設定」である非焦点解釈の場合は,「塚口駅で」に対して,「人身事故が」のほうが高くなる。「人身事故が起こった」は広域焦点であり,「塚口駅で」自体は主題ではない。しかし，ピッチについて見てみれば，主題表現と何ら遜色がない。

(3-49)　塚口駅（に）は，通勤特急が停車する。

「塚口駅（に）は」は主題として考えられるが，ピッチについて見てみれば「通勤特急が」のほうが高くなり，(3-48)の「塚口駅で」を非焦点解釈した場合とまったく同じである。また，中村(2001)は次のような例を提示して，南(1974)の枠組みを用いて設定と指定の違いによって統語的レベルが違うことを示している。

(3-50)　a.　9 月 25 日，被告は，20 日に出た判決に基づき，静岡へ送られた。

b.　*9 月 25 日に，被告は，20 日出た判決に基づき，静岡へ送られた。

（中村 2001）

「に」のつく時間表現は A 類の動詞句に，無助詞の時間表現は主題と同じレベルの C 類にあると主張している。これも(3-50b)において，指定的焦点「9 月 25 日に」が主題「被告は」よりも前に現れており，非文として解釈されるものと思われる。また，(3-50a)をピッチの面から見ると，「9 月 25 日」と「被告は」はほぼ同じピッチレンジで発話される。これは

(3-37)(3-38)で見たようなフランス語およびギリシャ語の左周辺に置かれた二つの状況表現がほぼ同じピッチレンジで上昇調を取っていることを考えると，日本語においてもさほど変わらないことが言えるであろう。

時や原因･目的の表現が文頭またはその近くに現れる場合は，背景的な情報としての状況設定になり，新情報を担う命題と結びつけるための提示成分であると考えられる。そしてそれは主題とも基本的に共通する特徴を持つことからも，日本語においても主題はせいぜい左周辺に置かれた状況設定の表現の一つであると言える。

3.4.5 日本語の右周辺

今度は，左周辺に対する右周辺について考えてみよう。ロマンス諸語やギリシャ語の基本語順は SVO であり，右周辺の成分はそれよりも右側にピッチが抑えられる形で現われる。日本語は SOV であるため，右周辺はいわゆる倒置された成分にあたる。話し言葉において倒置は頻繁に見られ，多くの場合は主題など旧情報をダメ押しのように再び明示するケースであろう。

(3-51) Q: あのワインは誰にあげたの？

a. あのワインは**堀口君に**あげたよ。=(3-45a)

b. **堀口君に**あげたよ，あのワインは。

c. **堀口君に**あげたよ。

ピッチについても，(3-51b)の倒置された「あのワインは」は「あげたよ」よりも低く現われることを考えるとフランス語などの右周辺と対応する。

また左周辺の「は」のつく句と右周辺のそれは情報の面での違いが見られる。

(3-52) a. ところで，この単語はどういう意味？

b. ところで，どういう意味，<u>この単語は</u>。

(3-52a)の「この単語は」が「どういう意味」よりも左側にある場合は，「この単語」についてすでに話題に上っていても，いきなり新聞を見せて聞くような話題に上っていない場合にも現われうるが，(3-52b)のように右周辺に現れる場合は，話題に上っていなければ不自然である。新規の話題として提示する場合は左側でなければならず，その意味でも主題を発話の早い段階すなわち左側に明示することに大きな意義があるといえる。それが主題提示であると考えるならば，右周辺に現われる「は」のつく句は，主題提示，あるいは主題の設定を積極的に行うものではない。右周辺のものは，左側の場合に見られる主題の設

定としての役割を失い，むしろ，念押しなどといった発話態度に関係する，さしずめ終助詞のような，モダリティにかかわる要素になっていると考えられる。

3.4.6 語彙・形態的手段による主題

福嶌(2004)は，日本語の主題をスペイン語に翻訳する場合の特徴を語彙的手段（形態的手段），音声的手段，統語的手段を挙げるている(cf. ibid.:131)が，ここでは残りの語彙・形態的手段について考えてみたい。

日本語の主題提示は語彙的（形態的）に「は」を伴うことによって表される。その他これに類する提示法としては,「なら」「も」などの取り立て助詞や，話し言葉で見られる「って」や無助詞による提示もある。形態的に主題提示を行う言語は少ないといわれているが，例えば朝鮮語 の nun/un，ビルマ語の hà（cf. Kato 2004）や景頗語の go[1] (cf. 張 2004)などが挙げられる。これらの主題を形態的に表すマーカーは，主題卓立言語 subject prominent languages の一部に見られる (cf. Li and Thompson 1976)。

ロマンス諸語やギリシャ語についてみてみると，主題的なマーカーとして考えられるものに，フランス語の quant à，スペイン語の(en) cuanto a，ギリシャ語の oso ghia などの句があげられる。

(3-53) a. フランス語

Quant à nos projets, nous ne pouvons encore rien dire.

“As for our plan, we cannot yet say anything.”

我々の案についてまだ何も言えません。

b. スペイン語

En cuanto al BMW, parece que los frenos le fallan constantamente.

Lit. “As for the BMW, appears that the breakes to-it fail constantly”

“As for BMW, it appears that its brakes fail constantly.”

（車といえば）彼の BMW，あれ，ブレーキがすぐ故障するんだそうだ。

（福嶌 2004:133 より，原典は Zubizarreta 1999，下線は筆者による）

c. ギリシャ語

Oso ghia tis emfanisis tu os ithopiu se kapies tenies, o Kirios Chéreau ipe xaraktiristika oti dhe theori ton eafto tu kalo ithopio tu kinimatoghrafu.

“As for his appearances as actor in some movies, Mr. Chéreau said

chratacteristically that he doesn't consider himself to be a good actor of movie."

幾つかの映画への俳優としての出演について，シェロー氏は自分を良い映画俳優だとは思っていないと独特の表現で語った。

（http://www.cinephilia.gr/2005/chereau2.htm）

これらは英語の as for と同様，それ自体で主題を表すマーカーであるというよりも，「～については」「～と言えば」といった，言及の範囲を限定するような意味合いを持っている[13]。福嶌(2004)はスペイン語の(en) cuanto a について，これは文脈を引き継ぐものの，そこから話題を展開するのではなくむしろ話題を転換することが多く，典型的な主題のひとつとしては認めがたいと述べている。また，これらの表現は文頭に置かれることが必須というわけではない。主題であるかどうかはむしろそれが文頭に置かれるかどうかという問題のほうが重要である。(3-54a)のように形容詞句相当の前置詞句としても現れたり，(3-54b)のように文末に現れる場合がある[14]。

(3-54) a. **名詞句を限定修飾する前置詞句として**

Perceptions des éducateurs quant à la prise de médicaments psychotropes par les adolescents placés en centres jeunesse dans la région montréalaise

"Educators' perceptions in regard to the use of psychotropic medication by adolescents housed in youth care centres in the montreal area."

モントリオール地区における青少年ケアセンター在住の少年による向精神薬の服用についての教育者の認識（論文タイトル）

b. **文末**

Je me sens très optimiste quant à l'avenir du pessimisme.

" I feel very optimistic as for the future of pessimism."

私は悲観主義の未来についてとても楽観的に感じている。

以上のことから quant à などの句が主題を示すのは，それが左方転移と同じく左周辺におかれる場合であることが分かる。quant à などの前置詞句はそれ自体で積極的に主題を表すものではなく，単に「～について」の意味を持つ前置詞句として考えるのが妥当である[15]。

---

[13] "quant", "cuanto", "oson"はいずれももともと"as much"の意味を持っていた点で共通している。

[14] (3-54b)の l'avenir du pessimisme は日本語に訳すとどうしても主題的になるが，語順の問題として主題提示を積極的に行っているとは思えない。L'avenir du pessimisme は話題の中心であることから題目ではあるかもしれないが，本稿における「題目」（文頭詞）ではない。

[15] この意味においては日本語の「は」もまた「（少なくとも）三キロは泳いだ」のような数量詞につ

3.5 本章のまとめ

本章ではフランス語とギリシャ語の主題に注目し，その構造の統語的側面と韻律的側面を先行研究より拾い出した。フランス語とギリシャ語の主題は，左周辺の要素の一つに過ぎない可能性があることを指摘した。そこからすべき「題目」（文頭詞）の再定義は次のとおりである。

(3-55) 文ないし発話の最初またその近傍に現われる句で, 音声的卓立を持たず, 命題に対してやや独立的なイントネーションパターンで発話される場, その句を「題目」（文頭詞）と呼ぶ。

左周辺に置かれた時間や場所表現は命題で叙述される出来事や内容の成立した背景を設定しているが，主題はそれよりもメタ言語的に命題で示される内容についての判断ないし解釈の対象範囲を指定しているとも言える。佐久間(1940)のいう「課題の場」という主題提示についての考え方は，同じく左周辺に現われる場所・時間といった状況としての場に比喩できるような，メタ言語操作の場としての主題の設定の側面を切り出している。主題とは，いわば枠組みないしドメイン指定的な要素（cf. Chafe 1976, Berrendonner and Reichler-Béguelin 1997, 澤田・中川 2004）の一つに過ぎないと言える。

また，主題に関わる韻律的特徴は，状況表現や主題を提示するためのに対する韻律というよりも，独立性の高い一つの句を与えるという行動に帰せられる。つまりフレージングの問題である。次章では，日本語の句の独立性が言語的ないし音声的に認められる場合に注目し，その背後にある認知活動について考察を行うことにする。

くことを考えると必ずしも主題を表すわけではなく,「は」は本当に主題を表す形式なのかという問題を引き起こす。この問題については今後の課題とする。

第4章 題目提示と韻律—ポーズ・昇降調・間投助詞とフレージング—

4.1 はじめに

第 3 章ではフランス語およびギリシャ語の主題に顕著に現れるイントネーション特徴に触れ，主題提示には句の構成すなわちフレージングも関係している，ことを指摘した。本章では日本語のフレージングに現れるイントネーションパターンに注目して，その背後に存在する認知活動についての考察を経て，主題提示について捉え直してみたい。

4.1.1 句末イントネーション

イントネーションについてには平叙や疑問を区別したりする文法的機能と，発話の態度を表したりする情緒的機能があると考えられている（cf. 郡 1997）。このようなイントネーションは文末[1]だけでなく，文中の句単位に現れるものが幾つかある。句末に現れるイントネーションは文末と同様，上昇調や下降調あるいは上昇下降を伴うものがあることが知られている（伊豆原 1994，郡 1997，石井・キャンベル 2004）。その中でも上昇下降の現れるイントネーションはしばしば議論の対象となってきた。そこで，本稿ではその音調を取り上げ，井上(1997)に倣い句末昇降調と呼ぶことにする。

4.1.2 句末昇降調

句末昇降調は今日の日常会話では頻繁に見られ，「尻上がりイントネーション」(杉藤 1983)，「上昇下降調」（郡 1997）とも呼ばれる。しかし，このイントネーションはかつて「政治家の演説調」（秋永 1966）や「全共闘アジ演説口調」（井上 1997）のように政治的な演説という特定の属性の話者と発話状況に結びつけられたように，特殊なイントネーションとして認知されていたようだが，その後，若い女性話者に使用されることが報告され（柴田 1977），今日では男女を問わずかなり広い年代の話者にその使用層が広がっている。その意味では日本語の一つの句末形式として十分定着しているものと思われる。

次に音韻的特徴を見てみると，句末昇降調は句末の最終モーラの母音が延長し，ピッチが上昇の後急激な下降する山型のイントネーションである[2]。

---

[1] 発話において何を「文末」とするのか，あるいは「文末」を定義すること自体ははっきりしていないが，ここで言う「文末」は動詞・形容詞の言い切り形（終止形）または「だ」「です」などの判定辞が現れる箇所として考える。

[2] 上村(1989:1715)などのように強さ(intensity)が増大して，それを引き伸ばして下降調で発音すると

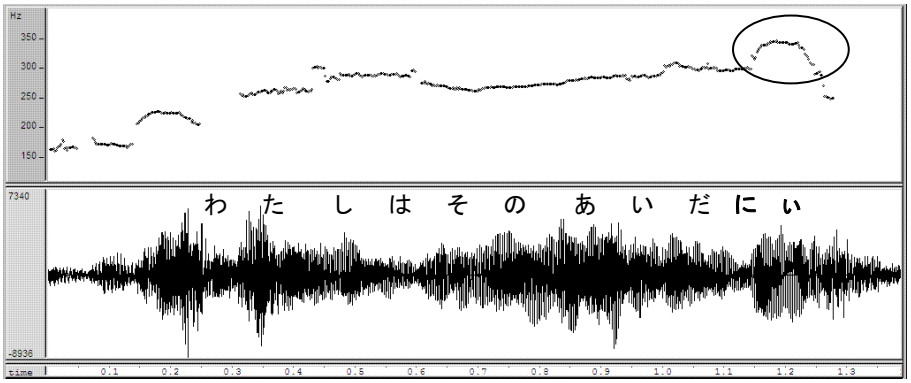


図 4-1　句末昇降調のピッチと波形（円で囲んだ部分）

図 4-1 は発話「…私はその間に…」の句末の「に」に昇降調が伴う発話音声のピッチと波形である。「に」の発音の始点（約 300Hz）から 350Hz 辺りまで上昇し，そのあと急激に下降しているように，かなり大きな幅でピッチの上昇下降が行われる。

4.2 句末昇降調の出現環境

では，句末昇降調はそれ自体どのような発話上の効果を持つのであろうか。先行研究

句末昇降調はどのような発話状況で現れるのであろうか。先行研究で主に挙げられているものとしては，「区切りの強調」（杉藤 1983，郡 1997）と「ターン（発話順序）の維持」（原 1993，井上 1997，郡 1997），「相手への働きかけ」（伊豆原 1994，井上 1997，市川 2005）の三つが挙げられる。まずこれらについて見ていこう。

4.2.1　「区切りの強調」説

「区切りの強調」は発話の切れ目（特にコンマポーズが置かれるような場合）ごとに現れ，その境界を明示するという特徴である。強調かどうかについてはともかくとして，句末昇降調が 1 節で見たように句全体に係る点，また，定延(2006)で指摘されているように意味的な区切りに対応する点で発話上の区切りの標識としての特徴は見出される。

(4-1)　「古い本と雑誌」

a.　ふる[いぃ]ほんとざっし　：[古い[本と雑誌]]

b.　ふるいほん[とぉ]ざっし　：[[古い本と]雑誌]

（定延 2006:126 より一部改変）

つまり，句末昇降調が現れることによって一つの意味のかたまりとして閉じてしまい，

の考え方もあるが，本稿では昇降調をピッチの問題として単純化して考える。

(4-1a)では「古い」が，(4-1b)では「古い本」が一つの意味上の単位を構成するようになる。

4.2.2 「ターンの維持」説

句末昇降調は話者の発話順序（ターン）を相手に譲渡しないようにするために現れるという見方がある。《このイントネーションが現れた場合にはまだ私の話は続きます（ので割り込まないでください）》という談話上の標識ではないかという考え方である。また，井上(1997)は相手に譲渡しないようにするという態度と，句末昇降調が高年層や保守的な話者にとって耳障りだという印象が結びついているという言説を提示している。

筆者はこれについての明確な答えは現時点では有していないが，少なくとも問題のイントネーションが「文末」ではない「句末」に現れるものであることから，文としては不完全な，言い切りの現れない句レベルや接続表現（接続詞または接続助詞を含む節）で終わる発話単位になっていることがむしろターンを維持しているかのように見えているだけなのではないだろうかと考える[3]。本稿ではターンの維持説に対して言及は紙面の都合で避けこととする。

4.2.3 「相手への働きかけ」説

句末昇降調が聞き手への働きかけを行うイントネーションであるという先行研究がある。市川(2005)は，句末のイントネーション（通常，昇降調，音引き（延伸））と聞き手の反応（うなずき，あいづち）との関係について，句末昇降調が現れる場合に聞き手の反応が顕著に多かったことを示している。つまり，聞き手の反応を誘発するものとして句末昇降調が現れるのではないかという示唆になっている。また，句末昇降調は説明的な発話において現れやすいと言われている（cf. 村中・原 1994，井上 1997）。これは聞き手にちゃんと伝わっているかを確認しようとする意図が話し手にあるというように考えれば，相手への働きかけの一種とも考えてもよい。

このような考え方は，ザトラウスキー(2006)の言う日本語の談話上のルール，すなわち《発話末に聞き手のあいづちを得る必要があるため話し手は視線を向けたりうなずいたりする》ことにも結びついていると思われる。聞き手のあいづちを得るためのキューとして句末昇降調があると言う見方もここからできるのであるが，この説については再び取り上げて議論する。

[3]「ターンの維持」説に対する批判は定延(2006)でも行われている。

4.2.4　第４の説「言いよどみ」

前節では昇降調研究において多く言及されてきた言説を紹介したが，それ以外にも句末昇降調には，「言いよどみ（非流暢）」と関係があるのではないかという指摘が以前からなされている。例えば外山(1981)の句末昇降調についての観察は次のとおりである。

(4-2)　学生に英語を訳させる。あまり下調べがよく出来ていない学生ほど，
「この問題のォ，エートォ，すみやかなァー，解明がァ……」
といった，語尾を引っ張る言い方をする。考えあぐねているということもあるが，反面，自信のなさを表してもいるのであろう。言いよどんでいるときに，この調子が多いように思われる。

(1981:139，下線は筆者による)

また，柴田(1977)も当時使用が拡大しつつあったこのイントネーションに対して苦言を呈しながらも，(4-3b)のように「あー」などのフィラーを挟んで発話する従来の方式に成り代わるものとして(4-3a)のような句末昇降調を認めている箇所がある。

(4-3)　a.　現代敬語の特色ワー。場面に応ずる相対敬語ダカラー。…
b.　現代敬語の特色ワ　アー　場面に応ずる相対敬語ダカラ　アー…

（1977:16 より抜粋，下線は筆者による）

フィラーを挟むという点では，言いよどみと関係があると柴田は見ている。

また，数量的な調査に基づくものとして，国立国語研究所「日本語話し言葉コーパス」(1999-2003)に基づく研究の中に句末上昇調に触れたものがある。それによると，学会スピーチおよび模擬スピーチでの発話について，自発性の印象評価（すなわち，原稿の読み上げのように感じられない度合い）に対して言いよどみ（単語の断片，言い間違い，フィラー）の発生に相関があることを指摘している[4]。また，句末昇降調の出現率については，自発性の印象評価（図２の▲，5 が最も自発的，1 が最も朗読的）とは正の相関，発話スタイル（同◆，5 が最もフォーマル，1 が最もカジュアル）とはほぼ負の相関があったことも認めている。つまり，自発性の高いスピーチでは，言いよどみが増え，句末昇降調の出現も増加するのである。この結果から，言いよどみと句末昇降調の出現は間接的に相関があるのではないかと予想できる。

[4] ただし，国研(1999-2003)では，フィラーに関しては単語の断片・言い間違いに比べて相関が弱く，発話の自発性評価の差を検出する場合には有効な指標であるとしている。

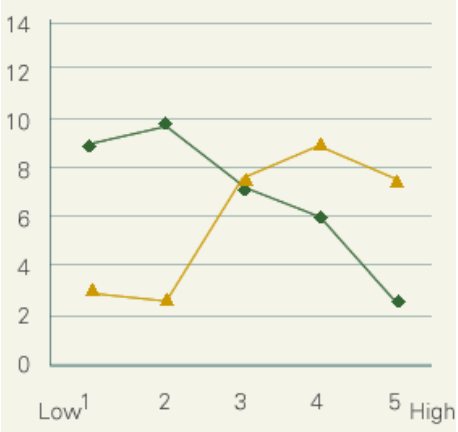


図 4-2　昇降調の共起率（縦軸，%）と発話のフォーマルさ（□）・発話の自発性（▲）

http://www2.kokken.go.jp/csj/public/j6_2.html より

4.3 言いよどみと句末昇降調の共起関係

前節で紹介した先行研究に基づいて，筆者は自然対話コーパス（後述）を用いて言いよどみと句末昇降調の相関関係について調査を行った[5]。

4.3.1 方法

各発話について，言いよどみの指標としてのフィラー及び単語の断片（これらをまとめてフィラー群とする）の有無と，その発話に現れる句末イントネーションとの共起関係について調査した[6]。

【自然対話コーパス】

2004 年度に録画した対話映像・音声コーパスの一部を使用して以下のような調査を行った。

【対象となる発話】

関西地方在住の日本語母語話者インフォーマント 14 名（うち男性３名，女性 11 名）による自然対話 18 セッションに対して，最初の５分間の発話を対象とした。ただし，あいづちとして取れる発話（例「うん」「ふーん」「なるほど」「そうなんだ」）や驚き（「あー」「えっ」）のみからなる発話は対象外とした。フィラーのみによる発話は対象に含めた。これは，フィラーに対しても昇降調などのイントネーションが現れるからである（例：えーっ[と

[5] 金田(2005b)および Kaneda(2005)で行った調査で使用したコーパスと同じものを使用しているが，今回は調査対象の発話を拡大した上で検証を行った。

[6] 注 29 では，フィラーは単語の断片などに比べて自発性との相関が低いという指摘を挙げているが，本調査は自発性ではなく，非流暢と句末昇降調の共起を対象としているため当該の指摘に対しての矛盾はさほどないと思われる。

お])。また対象となる句に間投助詞がつく場合は除外した[7]。対象件数は 1,860 発話であった。

【調査方法】

全発話をフィラーおよび単語の断片の有無に分類し，「フィラー有」「フィラー無」のカテゴリに分類し，これらについて共起する句末イントネーション５種の組み合わせの件数を調べた。

【句末イントネーションに基づく分類】

発話内の句末イントネーションは，「通常」「延伸」「昇降調」「強調」「上昇調」に分類した。「延伸」とは句末母音の延伸を伴うものであるが，そこに上昇音調が見られた場合は「上昇調」カテゴリに，上昇のあとすぐに下降のあるものを「昇降調」のカテゴリに，ピッチの変化がほとんどないものを「延伸」とした。また「強調」とは，郡(1997)の言う「強調上昇調」のことであり，句末母音の延伸なしに句末のピッチを撥ね上げて発音されたものを指す。なお，郡（ibid.）との対応では，「疑問上昇調」が本稿での「上昇調」，「上昇下降調」が本稿の「昇降調」にあたり，郡の「下降調」は判別が難しいケースがあったので，上昇の無い句末母音の延伸と合わせて「延伸」とした。「延伸」「昇降調」「強調」「上昇調」は，発話中に一つでもあれば，当該のイントネーションとして分類した。このうち複数が現れるものについては，最初に現れたイントネーションパターンを分類の対象とした[8]。またこの４つのいずれも現れない発話を「通常」のイントネーションのものとして分類した。これらの分類は調査者一名による聴覚印象に基づいて行われた。

---

[7] 例えば 20 代の近畿方言話者において「さ」は昇降調，「な」は上昇調で現れることが多い。詳細は高木(2006)および金田(2006)を参照されたい。

[8] 金田(2005b)・Kaneda(2005)では，句末延伸および昇降調についてのフィラー等の共起に関係について，当該イントネーションよりも後方にフィラー等の共起率が前方に対して有意に高かったことから，前方のイントネーションの影響が強いものと判断したこのような基準をとった。

4.3.2 結果

結果は表 4-1 のようになった。

表 4-1　フィラー・単語の断片の有無に対する句末イントネーションの共起関係

	通常	延伸	昇降調	強調	上昇調	合計
フィラー群有	173	47	81	15	1	317
(%)	(13.2)	(29.2)	(26.0)	(22.7)	(12.5)	(17.0)
フィラー群無	1,141	114	230	51	7	1,543
(%)	(86.8)	(70.8)	(74.0)	(77.3)	(87.5)	(83.0)
合計	1,314	161	311	66	8	1,860

「通常」に対して，「延伸」「昇降調」「強調」とフィラー群との共起率は同一性の検定の結果，有意に高いことが分かった（それぞれ 0.1%, 0.1%, 5%の有意水準）[9]。また「延伸」「昇降調」「強調」のいずれの二つについては有意差が無かった。なお「上昇調」については件数が少ないため検定を行わなかった。

言いよどみと句末の昇降調および延伸, 強調上昇調のイントネーションとの共起関係は, これだけでは完全に相関があるとは言い切れないが，少なくとも通常のイントネーションでの発話に比べ，同一発話中に現れることが多いということは言えるであろう。

4.3.3 句末昇降調と句末延伸

前節では，計量的分析により句末昇降調と言いよどみとの間に，一応の関連が見られることを見出せた。本節では，句末昇降調がどのように言いよどみと関係しているかを，同じく言いよどみと関連のあった「延伸」カテゴリと比較しながら考えてみたい。

まず，句末延伸であるがこの韻律特徴はためらいによる言いよどみと結びついていると思われる（cf. 定延・中川 2005）。そのため，このイントネーション自体が言いよどみの中に現れやすい。実際に自然対話コーパスの実例を見てみると，(4-4)（4-5）のように句末延伸が現れる発話では何かを考えながら，あるいは思い出しながら，すなわち心内で言語編集を行いながら発話しているような印象を受ける。

(4-4)　今**わー**　ちゅ**うー**　あの　うちの塾**がー**　高一までなんですね

(018-0191,0192)

[9] 同一性の検定は「通常」カテゴリに対して「延伸」「昇降調」「上昇調」をそれぞれ対置させた自由度 1 のカイ二乗検定で行った。

(4-5)　なんか　指揮者っていうのはどういうことに気をつけ**てー**

いや　その歴史性**とー**　これからの指揮者のあり方みたいな

(021-0163)

※　長音符を伴う太字ものは句末延伸を表す。

発話状況を見てみると，「あの」「その」「何ていうか」のようなフィラーのみの発話で，その末尾母音が延伸しているというパターンも多く観察され，フィラー以外の場合では，何かを考えながらあるいは思い出しながらの発話であることが殆どであった。

句末昇降調でも似たような特徴の発話が見られる。例えば(4-6)では，話し手は自分が受けている試験の内容について聞き手に説明しているような発話であるが，「こう」や「えー」が示すように，何らかの言語編集を心内で行っていることが予想される。

(4-6)　だか[**らぁ**]　こう言語セクション[**とぉ**]　えー　数学のセクション[**とぉ**]

分析セクションっていう文章問題があるんやけ[**どぉ**]　(002-0107)

では，句末延伸(4-4)(4-5)と句末昇降調(4-6)の違いは何であろうか。4.2.3 節で見たように，昇降調には聞き手への働きかけの機能が認められると言う先行研究に倣って，聞き手の反応について見てみよう。

(4-7)　B:　今**わー**　ちゅ**うー**　あの　うちの塾**がー**　高一までなんですね

A:　<u>ふうん</u>

B:　で　高一の英語**とー**　(018-0191～0194)

(4-8)　B:　なんか　指揮者っていうのはどういうことに気をつけ**てー**

いや　その歴史性**とー**　これからの指揮者のあり方みたいな

A:　<u>うん</u>　(021-0163,0164)

(4-9)　B:　だか[**らぁ**]　こう言語セクション[**とぉ**]　えー

A:　<u>うん</u>

B:　数学のセクション[**とぉ**]

A:　<u>うん</u>

B:　分析セクションっていう文章問題があるんやけ[**どぉ**]

A:　<u>うん</u>

(002-0107,0108)

句末延伸の後には，相槌が現れるケースは(4-8)などで僅かであり，多くは(4-6)のように発話連続が終わるまで聞き手にターンが移動しない。逆に句末昇降調(4-9)では，その直後に

聞き手の相槌やうなずきが現れることが多かった。この結果は市川(2005)を支持するものである。

しかし，句末昇降調が現れるからといって必ずしも聞き手のうなずきが現れるわけではない。実際に(4-9)でも B の最初の発話「だから」に対して A は昇降調であるにもかかわらず反応していない。また，極端な例として二者間での反応の仕方の違いが顕著な例もあったので紹介しておく。(4-10)では，A の発話「脳のメカニズムとかを…」に対しては B は句末昇降調が現れるとほぼうなずいているのに対し，B の発話「あ，そういう…」に対しては発話し終わるまで A は反応していない。

(4-10) A　脳のメカニズムとか[**おぉ**]やらず[**にぃ**]
B:　　うん
A:　脳のことをやるっていうの[**はぁ**]
B:　　うん
A:　なんか　どーなんかなぁとか　思ったり
B:　　うん　あ　そういう
B:　脳のメカニズム[**のぉ**]　勉強しない[**でぇ**]　やるってこと
A:　そうそうそうそう　だからー　　(001-0017～0026)

さらに興味深いことに，(4-10）の会話部分では A は図 3 のように常に前のめりの体勢で机の上の書類を見ていて，B の方に視線を向けることがない。このことは，次の二つの背反したことを示唆している。一つ目は音声情報だけで聞き手の反応を誘うキューとなっているという示唆，もう一つは(4-9)で見たように句末昇降調が聞き手の反応を誘うためのものではないという示唆である。実際に市川(2005)でも，昇降調が現れたときに聞き手が反応した割合が 56.8%（50/88）と，通常の句末イントネーションと比較すると有意に高いものの，実際にはそれほど高い確率であるとは言えない。その意味で，前者の示唆は修正して《句末昇降調は聞き手にとってのあいづちのキューとなりうる》程度にとどめておいて，句末昇降調は《聞き手の反応を誘うものではなく，あくまで聞き手の反応は任意である》と考えるべきではないだろうか。ザトラウスキー(2006)の挙げる日本語コミュニケーションのルール《発話末に聞き手のあいづちを得る必要がある》は，非常に協調的，あるいは共同

図 4-3　前のめりになる話者 A

作業的な会話では妥当であるといえるものの，例えば他人に発言権を渡さずに延々としゃべり続ける人の存在を考えると，一般の言語コミュニケーションに対してこのルールを適用できるかは疑わしい。そういう意味からも，句末昇降調が聞き手への働きかけだけを目的とするという言説は妥当とはいえない。

4.4 言いよどみを生む心内処理—発話モニタリング

そこで，もう一度心内言語編集の観点に立ち返って句末の昇降調と延伸について考えてみることにする。作例ではあるが，フィラー「あの」「えーと」が昇降調と延伸で現れた場合の違いについて見てみよう。

(4-11) A: 桂ざこばの前座名って何だったっけ？

B_1: えー**とー**，朝丸。

B_2: えー[**とぉ**]，朝丸。 （作例）

「えーと」であるがこれが句末延伸で現れた場合（B_1）は，「えーとー，何やったかなー」と話し手が純粋の名前の検索を心内で行っているような印象を受けるが，句末昇降調で現れた場合(B_2)では「えーとぉ」の時点で話し手は答えの検索をすでに終えていて，全体としては何か勿体ぶったような含みのある発話に聞こえる。その意味では句末昇降調が句末延伸のように純粋な探索がバックグラウンドで行われていることを仄めかすのではなく，何か別の心内処理が行われているのではないかという予想が出来る。そして両者の差は「あの」についてを見ることで顕著に現れる。

(4-12) A: 桂ざこばの前座名って何だったっけ？

B_1' あ**のー**，朝丸。

B_2': ??あ[**のぉ**]，朝丸。 （作例）

句末延伸の「あの」(B_1')は(4-11)の B_1 と似たような名前の検索がバックグラウンドで行われているような発話に聞こえるが，昇降調の(B_2')はこの場合極めて不自然である。もし昇降調が自然になるとすれば(4-13)のように答えとは違う発話が「あの」に続くと考えられる。

(4-13) A: 桂ざこばの前座名って何だったっけ？

C_1: あ**のー**，いま忙しいんだけど。

C_2: あ[**のぉ**]，いま忙しいんだけど。 （作例）

このケースでは，延伸・昇降調とも多少ニュアンスに差はあるものの，いずれも自然である。(4-12)と(4-13)を分けるものは何であろうか。

定延・田窪(1995)によるとフィラー「あの」が現れるケースには，二種類のパターンがある。一つは名前の検索中であり，もう一つは適切な表現の考慮が行われているという状況である。そこから考えると，(4-12)のケースは名前の検索であり，(4-13)では後者の適切な表現の考慮であると言える。(4-12)の場合には昇降調はふさわしくなく，同じく名前の検索を行うような句末延伸と結びつくことが出来る。(4-13)の場合では C の発話内容が名前の検索ではなく，むしろ適切な表現の考慮—このケースでは《聞き手に適切な形で，「邪魔するな」と警告する発話を考える》—を行っていると見ることが出来るが，この場合にはどちらの句末イントネーションでも不自然ではなくなる。そこから考えると，(4-12b_2')が不自然になる理由として，後続の発話内容への計画（名前の検索）と，その昇降調で表されるような心内態度が齟齬を起こしていると考えられる。また，(4-12b_1')(4-13c_1)がともに自然な発話であることは，句末延伸は単語の検索といった心内処理が行われているというよりも，また，昇降調のような特別の心内態度を表すのではなく，単にためらいの態度がある場合に現れるに過ぎない。自然対話コーパスの実例では，相手が初対面の年上の人物である場合にも句末延伸が頻出したケース(4-14)が確認されたが，これは何かを考えてのものというよりも，相手との関係で話し手がためらいがちになっているという態度があるためにこのような句末延伸が現れていると考えられる（cf. 定延・中川 2005）。

(4-14) バイトー　あのー　むこう　実家の方でー　あのー　前から始めててー
で一　塾講　塾をやってるもんでー　[スー[10]]

(022-0293～0295)

もし，(4-14)の発話が句末延伸ではなく昇降調で発話されたなら，話者がためらいがちに発話しているという印象はなくなり，むしろはきはきとした（あるいはふてぶてしい）印象が現れる。その意味では，ためらいがちという態度と句末延伸を伴う言いよどみが関係しているといえる。

では，昇降調とは結局何であろうか。

(4-15) a なん[かぁ]　その T 先生[はぁ]　なんていうかー　論文を書い[てぇ]　こー　b そういうー理論的な研究をやっ[てぇ]　来た人っていうより[はぁ]
ほんとにー　実践の場にだーっと入り込んでー　いろんな調査　とか
インタビューとかし[てぇ]
そういうのまとめ[てぇ]，論文にしたり本にしたりしてるような感じのー

[10] この[スー]は「空気すすり」である。定延(2007)を参照されたい。

うーん　　（021-0019～0022）

(4-15)の発話では話し手は単に T 先生のことを聞き手に説明するのではなく，思い出しながらあるいは言葉を選びながら発話しているような印象を受ける。その証拠として，第一に「こう」や「そういう」のような何かを思い出すような表現が現れていること，第二に(4-15)の下線部 a では図４のように聞き手とは視線を反らせて発話している点である。波線部 b ではこれとは対照的に図５のように聞き手の方を向いて身振りを交えて発話している。

図 4-4　相手と視線を反らせている話者

図 4-5　相手と視線を合わせて話す話者

図４のように聞き手とは視線を外して対人チャンネルを一旦切断するというという行為と句末昇降調が現れることを考えると，ここでは単なる思い出しだけではなく，定延・田窪(1995)のいう「あの」の第２パターンのように《適切な表現の考慮》が行われているのではないだろうか。また，4.3.3 節で批判した《聞き手への働きかけ》という面もまた話し手主観の側に立てば,《聞き手にあることを伝えたい，しかし聞き手にはちゃんと伝わっているだろうか》という心内態度は,「発話モニタリング」という考えを導入すれば《適切な表現の考慮》にも同時に説明できるのではないだろうか。つまり，話し手が《言いたい事を正しく言語にエンコードできているかを気にする》ことがこの発話モニタリングである。たとえそれが説明の発話において聞き手が理解しやすいように配慮するといった聞き手目当てのものであったとしても，結局のところ言い直しやパラフレーズといった修正・補完にもつながるのであり，その行動の動機はいずれも話し手自身に回帰される。発話計画におけるモニタリングの過程で言語表現の吟味が終了した句を文の断片として産出していくという作業において，吟味済みの句の末尾に昇降調をつけて発話するということではないだろうか。昇降調が現れるからといってそこでモニタリングが終了するわけではなく，その発話中モニタリングが行われているのである。その場合，過負荷によって処理に時間を要した場合には不自然なポーズやフィラーなどの言いよどみの標識が現れるのではないだ

ろうか。もちろんそのフィラーとて先述の「えーと」「あの」のように心内処理を反映したものが現われるのである。

ただし，4.3 節で，句末昇降調が言いよどみとの共起に関係するとは述べてきたが，あくまで句末昇降調と言いよどみとは本来別のものである。

4.5 発話の断片化

前節では，句末昇降調が，話し手が正しく言語編集したいという意図に基づく発話モニタリングの行われているときに現れるということを述べたが，もう一つの視点として，句レベルに発話が断片化するということについても考える必要がある。断片化とは一つのメッセージとなる文以下の単位，すなわち句や文節レベルで発話が行われることをいう。2 節で見てきた句末昇降調と句末延伸は，それぞれ発話モニタリング，ためらいという外的要因，すなわち態度の表れとしたが，これらの要因は同時にメッセージ（文）の断片化を引き起こす。定延(2005，2006)によれば，話者はある単語を発する，ある音を発するというような，発話における下位レベルの行動に気をとられる事でたちまち言いよどみやつっかえが起こり，ぎこちなく「下手」な発話になってしまう。前節で述べた発話モニタリングはまさに発話に対して下位レベルの行動であり，ためらいもまた発話の下位レベルの行動の進行を妨げる方向に力が働いている。

そのような「下手」な発話に現れる断片化した句は，単なるアクセントや全体的なイントネーションを有した句だけで現れることもあれば，モニタリングを伴うことによってか昇降調がその末尾について現われることもある。この場合に，定延（ibid.）は句とはいえども発話の終端を文末らしくしようとする動きが現われると述べている。言い換えれば，4.2.1 節で取り上げた「区切り」をつけることが文末らしくすることに関わっているのである。その意味で句末昇降調は発話の「区切り」を表すものとしてその終端に現われると位置づけることが出来る。

では，句末延伸はどうであろうか。実際に同一文節中に延伸と昇降調が共起した実例がある。

(4-16) だから　ま　それは　慣れ
わたしー[はぁ]　あの　これが　ほん　あ　ほんとじゃない
学部から上がってき[てぇ]　(040-0185,0186)

(4-16)の「わたしは」は「わたし」の末尾母音が延伸し，その後に続く助詞「は」に昇降調

が現れている。日本語が膠着語であることからも，最も後に現われる要素において一つの句（ないし文節）として閉じる。その意味では助詞「は」はこの場合，句「わたしは」の終端でありそこで句として閉じているので，そこに課せられる昇降調は句末のものであるといえる。しかし「し」に係る延伸は句末であるとはいえない。逆に「??わた[しぃ]わー」のように，「し」に昇降調，「は」に延伸を置いて発話することは非常に奇妙である。つまり，昇降調は句中には現われる句末にしか現われ得ないことが言える。そして，延伸は場所を問わない（cf. 定延・中川 2005）ことから，句末延伸とは，たまたま句末に現われたためらいの談話標識に過ぎない。そのことから考えると，句末昇降調は句という発話単位の構成を終えた状態でしか現われることができないと言う点でモニタリングと産出の過程を経たものとしての「区切り」の意味を持つと言えよう。

4.5.1 イントネーションユニットの構造

イントネーションユニットとはポーズやピッチの建て直しなどによって判断される発話の単位である。通説的には，一定のイントネーション曲線の連続があり，その最初にピッチが基準値にリセットされるという特徴を持ったものとして理解されているであろう（cf. Chafe 1987, Pierrehumbert & Beckman 1988）。

日本語のイントネーションユニットについては，文節ないし句レベルで十分に成立する。Iwasaki(1993)では，英語ではイントネーションユニットが基本的に主語と動詞（と目的語・補語など）からなる節 clause レベルで現われるのに対し，日本語では名詞や動詞といった語句を中心とする文節レベルでも十分に英語の節レベル，すなわちほぼ文のレベルに相当するということが述べられている。Iwasaki(ibid.)によると，イントネーションユニットは４つの要素からなり，左から論理 ideational，主観 subjective，結合 cohesive，対人 interactional となっている。詳細な説明は同論文を参照していただきたいが，日本語では文節（句）だけでこれらの４つを持つことが出来る点に注目したい。例えば「マミにだけはね（Iwasaki 1993:45）」という句については，格助詞を含む「マミに」が論理，「だけ」が主観，「は」が結合，そして間投助詞「ね」が対人の要素である。すなわち文節(句)だけで，論理関係と対人関係を持つ単位を構成している。

ここで句末昇降調が現れる場合を考えて見たい。もちろん「マミにだけは[ねぇ]」のように間投助詞が昇降調で現れるが，間投助詞なしでも「マミに｜だけ｜[はぁ]」のように文節の最後尾「は」に対して句末昇降調は現われる。その意味で句末昇降調は Iwasaki の

言う対人要素に当たる。対人が適切かどうかの議論はあるとしても，少なくとも句末昇降調の現われる句には論理と主観の要素を持っており，これは，モニタリングによって吟味が為されているということに繋がっている。つまり句末昇降調の現われる発話とは，断片化こそしているものの，ある程度の考えを担った，あるいは情報を含んでいる発話単位である。

4.5.2 文末詞と句末昇降調

これまで本稿では句末昇降調を間投助詞がつかないような「マミにだけ[はぁ]」に現われる句末イントネーションとして位置づけてきたが，実際には「ね」「さ」「な」などの間投助詞に対して昇降調やその他のイントネーション（強調上昇調など）が現れる。また，「ね」や「な」は共通語や大阪方言では上昇調として現われることも多い。しかし，間投助詞の多くは昇降調との相性がよく，「さ」ややぞんざいな「よ」，あるいは方言に現われる「や」や「の」は昇降調で現われることが多いように思われる。実際，高木(2006)および金田(2006)でも若年層の近畿方言話者が使う「さ」のほとんどが昇降調で現われることを確認している。また，東京方言の「ね」や筆者の母方言である大阪方言の「な」についても高年齢層の話者が上昇調で言うことはまれでむしろ昇降調か下降調で現われるということからも，日本語の間投助詞に現れるイントネーションは昇降調が最も典型的なのではないかという予想が出来る。もしそうだとすれば，間投助詞を持たず音調だけからなる句末昇降調が登場し，また広がりを見せると言うことは何ら不自然なことではない。つまり間投助詞なしの句末昇降調と，間投助詞のある句末形式はパラダイムを為すものとして考えることが出来るのではないだろうか[11]。

さらに藤原(1990)では，句末昇降調を「文末詞」相当であると看做しているという点で，間投助詞とパラダイムを為すという説のサポートとなる。文末詞とは藤原の提唱する，文中の句末に現れる間投助詞と文末に現われる終助詞の区別をなくそうという考え方である。実際には間投助詞以外にも《判定辞＋終助詞／間投助詞》という形式でひとつの間投助詞として機能するものが日本語には見られる。「ですね」や「だよ」という形式は，「そこをですね，右に曲がってですね…」「そこをだよ，右に曲がってだよ…」というように句末

[11] 柴田(1977:16)では「以前はこの部分（筆者注：句末昇降調）をどう話していたかと言えば，「アー」とか「イー」とかいう無意味な音をはさむか，（デス）ネのような間投詞を入れるかした」（下線は筆者による）とあり，ここでも間投助詞との関係が示唆されている。

に現われることができ，これらは「そこをね，右に曲がってね…」という単独の間投助詞「ね」とパラダイムを為している。さらに句末昇降調で言うことで「そこ[おぉ]，右に曲がっ[てぇ]…」にもなる。このような状況を考えると，藤原の考えるとおり間投助詞や終助詞と言う枠組みだけでは句末のこのような形式を捉えるには不十分ではある。ましてや句末昇降調のように語彙形式を持たず音調のみという形式は文末詞というカテゴリを考えることで，間投助詞などと同じ特徴を持つものとして考えることが出来よう。

4.5.3 まとめ—句末昇降調とは

句末昇降調とは，話し手が言いたい事を出来るだけ正確にエンコードしたいという意図に基づいて行われる発話モニタリングが行われている場合に現われる韻律特徴である。そして，モニタリングに伴う発話計画によって発話がまとまったメッセージとしての文ではなく，その断片としての句（文節）として発せられることから，句末昇降調は，その末尾に①モニタリングによる発話内容の吟味が済んでいる，②句として閉じた発話であるという「区切り」の標識である，という二つの状態を表す標識として位置づけられる。

また，間投助詞（文末詞）が句末に現われるとこともまた，発話モニタリングに関係したものとして考えることが出来る。つまり句末昇降調は唯一の，発話モニタリングの過程を経たことを表す標識なのではなく，その標識は間投助詞（間投助詞も何らかのイントネーションパターンとともに現われる）などを含めて複数あり，句末昇降調はその中の一つに過ぎない。

4.6 主題とのフレージングの問題について

本章ではこれまで，いったん主題とは離れて日本語におけるフレージングにおけるイントネーションパターンについて注目してきた。句の右側に昇降調や強調上昇調のイントネーションをつけることは，間投助詞をつけることにも相当し，句レベルに断片化した発話の末端を示すことにもつながっている。では，このフレージングと主題はどのように関わっているのか。本節ではこの問題について考えていくことにする。

4.6.1 フレージングと主題

詳しくは第 5 章で取り上げるが，無助詞形式による主題提示は日本語においてよく見られる。これは「は」や「って」のような主題マーカーに相当する標識を持たず，それ自体

が主題であるかの判断は，実際のところさまざまな問題がある。無助詞が主題性を持ちうる場合としては，丹羽(1989)が述べているように文頭近くに現われるものが典型的である。

(4-17) a. 私カレー好きじゃないの[12]。

b. カレー私好きじゃないの。

(4-17)は，論理的には同じ内容を指しているが，(4-17a)は「わたし」の属性のついての表明の発話であり，「わたし」が主題であるのに対し，(4-17b)は「カレー」についての話者の態度を表明している点で，「カレー」が主題であるといえる。このことはフランス語やギリシャ語でも次のように言い分けられる。

(4-18) a. Moi$_i$, je$_i$ n'aime pas le cari.

"Me$_i$, I$_i$ don't like curry. "

b. Le cari$_i$, je ne l$_i$'aime pas[13].

"Curry$_i$, I don't like it$_i$."

(4-19) a. Emena$_i$ dhe mu$_i$ aresi to kari.

I.Gen not I.Gen pleases the curry.Nom.

"Me, I don't like curry."

b. To kari dhe mu aresi.

the curry.Nom not I.Gen pleases

"Curry, I don't like it."

(4-19)のギリシャ語の aresi は，イタリア語の piacere スペイン語の gustar "to please, to be taken fancy of"と同様，好きな対象を主語に取り，無標な語順では動詞の後ろに置かれる。そのため，左方転移はできず，動詞よりも前に現れることで主題化される。また「私」については，フランス語もギリシャ語も倚辞ではなく，独立性のある強形の人称代名詞が用いられている。

しかし，日本語の(4-17b)は「カレー」だけでなく「私」も主題性を持っていないとは言えない。フランス語やギリシャ語においても重複主題が認められる点で，日本語において

---

[12] 「好きじゃない」は「好きではない」であり，「好きでは」の部分の主題性も問題になるかもしれない。しかし融音形式である「好きじゃない」が取られていることで，「好きでは」「ない」という分析可能性を否定している見なし，ここでは「好きでは」の主題性がないものとして考える。

[13] 通常，直接目的語の主題化には左方転移しかできないが，aimer "to love"，détester "to dislike"など好悪に関する動詞については，対応する代名詞を伴わない主題化構文が可能であるといわれている（cf. Rowlett 2007）。

も重複主題があったとしてまったく問題はない。

(4-20) a. Moi$_i$, le cari$_j$, je$_i$ ne l$_j$' aime pas.

b. Emena$_i$ to kari dhe mu$_i$ aresi.

"Me$_i$, curry$_j$, I$_i$ don't like it$_j$"

また，ギリシャ語においては(4-21)のように to kari「カレー」が emena「私」よりも前に現れることもある。

(4-21) To kari emena$_i$ dhe mu$_i$ aresi.

"Curry$_i$, me$_j$, I$_j$ don't like it$_i$."

ところが，日本語では，(4-17a)のように「私」のほうが前にあると，多くの場合，「カレー」に対して主題性を認めずに，「好きだ」の項として対象の意味役割を持つ命題の要素であるという判断になる。しかし，これも，昇降調や間投助詞によるフレージング，すなわち句としての独立性を持つと，その限りではない。

(4-22) a. わたしぃ　カレー好きじゃないの。

b. わたしぃ　カレエェ　好きじゃないの。

(4-22a)は「わたし」の末尾に昇降調イントネーションをつけたものであるが，この場合は，(4-17a)と同じく「わたし」は主題として，「カレー」は項としての解釈が優勢である。しかし，(4-22b)のように「カレー」にも昇降調が現われると，「カレーについて言えば」といった主題解釈も(4-22a)よりもされやすくなる。また，このことは間投助詞やポーズ，あるいは句末母音の延伸によっても実現される。

(4-23) a. わたしね　カレーね　好きじゃないの。

間投助詞や昇降調によって末尾の区切りが特徴付けられた句は独立性を持つことから，「カレー」が述語「好きだ」を中心とする命題から切り離され，主題的な解釈を生む。

また，句ごとに区切られる発話は，非流暢とも関連していることは本節よりも前に述べてきたとおりであるが，同様のことは非流暢性の指標とも言えるポーズ(4-24a)，句末母音の延伸(4-24b)，フィラー(4-24c)についても言える。

(4-24) a. わたし　　カレー　　好きじゃない。

b. わたしー　カレーー　好きじゃないの。

c. わたし　あのー　カレー　あのー　好きじゃないんです。

このことは，2 章で触れた主題の定義のひとつである「言及範囲の対象を定める」ことに非流暢性が関わりうることを示している。4.4～4.5 節で述べたように，非流暢を生み出す

背景には，発話において，単語編集や判断，あるいは適切な表現の選択といった心内処理が同時進行的に行われているという考え方がある。「カレーは好き」といった品定め文における「言及範囲の対象を定める」主題は，それに対する説明（レーマ）を発話する前の判断（自分が実際に好きか嫌いかという情報レベルのものだけではなく，たとえば異常にカレーが好きである人を相手にした場合や，カレーについての話題で盛り上がっている場合に「カレーが嫌い」と言ってよいものかの対人配慮的な吟味もある）が必要であり，その判断の過程には主題性が関わっていると考えられる。

また，イントネーションの面から見てみれば，「カレー」の主題解釈がされにくい場合は，「カレー」が「好きじゃない」と一緒にイントネーションユニットを作るように発音される。逆に，主題解釈が可能になりやすい場合は，「カレー」は左にある「私」よりも低いピッチで現われる。つまり，ダウンステップによって「カレー」のピッチが低くなっているからであり，「私」と同じイントネーションユニットに取り込まれていることがわかる。そして，低くなった「カレー」に対して，「好きじゃないの」ではピッチレンジの建て直しが行われることから，別のイントネーションユニットに属する。つまり，3 節で見たような左周辺と命題の境界にイントネーションユニットの断絶があると考えれば，その発話のしかたにより，構造上の違いが明確に現われる。また，(4-23)のように間投助詞や句末イントネーションが現れる場合や，(4-24)のような非流暢が関わる場合では，左周辺の主題要素は必ずしもひとつのイントネーションユニットに属する必要はなく，「わたし」「カレー」そして「好きじゃない」が別々のイントネーションユニットになる。この場合でも，「カレー」は主題解釈が生まれることから，左周辺はひとつのイントネーションユニットを構成する必要はなく，命題のみがそれを要求されるものと考えることができる。(4-25)にその断絶の位置と解釈の関係を示す。

(4-25) a. 私｜カレー好きじゃないの。（命題内解釈）

b. 私　カレー｜好きじゃないの。（主題解釈）

c. 私｜カレー｜好きじゃないの。（主題解釈）

左周辺の単一イントネーションユニット化については主題要素だけでなく，場所・時間などの状況設定表現にも見られる。(4-26)の「きのう」「パリで」は時間・場所の背景設定であり，この場合，「きのう」と「パリで」が連続する。また，出来事を表す命題部分である「ダイアナが」とは繋がらずに，「ダイアナが」でピッチの建て直しが行われることからも，左周辺の単一イントネーションユニット化と，命題成分との断絶が見られる。

(4-26) きのう　パリで｜ダイアナが交通事故で亡くなった。

ニュースでの発話のように流暢である場合は, 左周辺要素の単一イントネーションユニット化は顕著であろう。

4.6.2 自由左方転移(HTLD)と非流暢性

3 章 3.2.3 節では，左方転移構文には，主題成分と性・数・格が位置する倚辞を伴う，拘束左方転移 clitic left dislocation (CLLD)と，主に無標の形式（主格）で現われる自由左方転移 hanging topic left dislocation (HTLD)があることを述べた[14]。フランス語では一般名詞の格標識が消失しており，また，Delais-Roussarie et al.(2004)が触れているように韻律上の違いも見られないことから，形式的な CLLD と HTLD の区別は希薄である。しかし，一般名詞の格を保持するギリシャ語では CLLD と HTLD は区別される。HTLD の特徴としては，定義のとおり命題における倚辞と左方転移要素格の一致が必須ではない点，それからイントネーション上では，末尾でのピッチは下降する点で，上昇調を取る CLLD とはまったく別のものである。この場合は，格が一致していても末尾ピッチの下降を伴う点では HTLD として扱われる（Holton 1997）

ギリシャ語における HTLD は, 主題とされているものの, 日本語に訳す場合に提題の「は」などではむしろ対応させにくい。

(4-27) a. <u>Ton Kosta</u>$_i$ ton$_i$ kalese i Maria xtes.
the Kostas$_i$.Acc called him$_i$ the Mary.Nom yesterday
コスタスは昨日マリアが呼んでたよ。

b. <u>O Kostas</u>$_{i,}$ ton$_i$ kalese i Maria xtes..
the Kostas$_i$.Nom called him$_i$ the Mary.Nom yesterday
コスタスといえば，昨日マリアが彼を呼んでたよ。

(4-27a)は，主題成分 ton Kosta と，命題部分の倚辞の格がともに対格(ton Kosta, ton)で一致しているが，主題成分が上昇調で現れる場合は，日本語に訳するなら多くの場合格助詞つきの「は」として主題化される（「が」や「を」に対しては「は」単独で代行される）訳になる。しかし，主題成分に格の一致の見られない無標の主格で現れている(4-27b)では，主語として主格の i Maria「マリアが」が現われていて，男性単数対格倚辞の ton ”him”が

[14] 自由左方転移，拘束左方転移および独立的左方転移の語は意訳に基づく筆者による命名である。

現われている以上，ton が o Kostas「コスタス」を指している解釈にしかならない。従って，この文で現われている文脈を考えると，選考する談話に「コスタス」のことが現われ，ある話者がその「コスタス」を活性化させて，「そういえばコスタスといえば」のように，非計画的な発話であることが予想される。逆に(4-27a)では，主文において対格 ton で受ける「コスタス」が，主格の o Kostas ではなく対格の ton Kosta が現われていることから，発話の段階で「コスタス」が目的語であることが確定しているはずであり，格が一致しない(4-27b)とは対照的であるといえる。そういった意味では左方転移構文は，単なる主題化だけはなく，とりあえず発話における問題（課題）の対象を提示しておいて，あとで新情報の説明（レーマ）への言語の検索ないし編集を行うための構文として働く場合がある。

フランス語では上で述べたように一般名詞の格変化が衰退しているため，HTLD と CLLD の区別ができない。Delais-Roussarie et al. (2004)は，フランス語の HTLD と CLLD における主題成分に現われるイントネーションパターンに，主題化構文にも現われる無標な上昇調と，主題化構文には現われない上昇下降調の 2 種類あることを述べていたが，上昇下降調についてはイントネーションの切れ目が現われる点でギリシャ語の HTLD と対応している。また，規範的には間接目的語において CLLD に代わって主題化構文が現われることを考えると，左方転移のうち，説明部分へ連続する上昇調のものは，ギリシャ語の CLLD に相当し，切れ目を作る上昇下降調は HTLD ではないかという予想ができる。つまりフランス語の左方転移には違った性質の CLLD と HTLD が混在しているのではないだろうか。

さらにフランス語に顕著に見られる左方転移の一種として，命題との対応関係—すなわち残留代名詞による前方照応—が見られないものが挙げられる。

(4-28) Moi, la bicyclette, je n’aime pas me fatiguer.

“Me, the bicycle, I don’t like to get tired.”

おれ，自転車，疲れるのいやだなあ。

(4-28)のうち moi「私」はあとの je と呼応しているが，la bicyclette「自転車」は命題のいずれにも対応せずに，命題の左周辺に独立的に現れている。このような発話の背景には，たとえば，自転車でどこかへ行く案が出たときのような文脈で，話し手は自転車のことを考えていることが推定される。主題を意識 consciousness (cf. Chafe 1976, 1994)の中心と考えるならば，この la bicyclette も確かに主題的である。このような左方転移は aboutness すなわち命題との文法的対応関係が希薄であることから，Riemsdijk (1997)では独立的左方転移

loose aboutness left dislocation (LALD)と呼ばれている。転移 dislocation という言葉を考えると，それは本来あったはずの位置からの移動を意味しているように，対応する要素ないし痕跡 trace がなければならない。しかし LALD は，文脈上のものにこそ対応しているものの，文法的な対応関係がなく，それを左方転移として考えるべきかは問題がないわけではない。しかし，左周辺に現われる点では主題や背景情報と基本的には変わらない。

また，LALD よりは文法的対応関係があるような，左方転移もある。

(4-29) a. [La femme de mon frère]$_i$ / Ma belle-soeur$_i$, elle$_i$ est malade.

"[The wife of my brother]$_i$ / My sisiter-in-law$_i$, she is sick"

うちの兄貴の嫁さん（うちの兄嫁，うちの義理の姉）病気なのよ。

b. Moi, mon frère$_i$, sa$_i$ femme$_j$, elle$_j$ est malade.

"Me, my brother$_i$, his$_i$ wife$_j$, she$_j$ is sick."

うち，兄貴，嫁さん，病気なのよ。

(4-29a)のように「姉嫁」を主題とするような発話に対し，(4-29b)ではこれが moi「私」か，mon frère「私の兄」，sa femme「彼の妻」とあたかも順次分解されているように主題提示されている。これは moi「私」から mon frère「私の兄」，そして sa femme「彼の妻」というように連想的な連続関係を持っている。また，この sa femme の sa "his"の解釈については，すでに問題になっている，話者と話者の兄以外の男性を外界照応 exophora することは（発話上，語用論的に）不可能であり，より左にある mon frère の束縛を受ける。この束縛が統語的要因によるものかどうかについての議論は避けるが，少なくとも談話の面ではより左にある主題のほうが上位であり，話者自身を中心としてより近い要素への連想に則っており，線条性を考えても自然な流れであるといえる。日本語においては，(4-28)の訳のとおり，mon や sa といった所有表現がなくても，「嫁さん」が「私の兄の嫁さん」であるという解釈以外には考えられない。総主文としての重複主題文「象は鼻は長い」の「鼻」が「象の鼻」以外の解釈を妨げる点においても，主題にも階層が見られる。

このような階層ができることは，連想によって話題の範囲が移行ないし縮小させるような心の動きに対応しており，非計画的発話であるからこそ，「うちの兄貴の嫁さん」のような十分な言語編集がなされず，とりあえず「うち」「兄貴」「嫁さん」と，言及の範囲についての提示が漸次的に展開される。フランス語においても(4-28)や(4-29b)のように，とりあえず，la bicyclette「自転車」や mon frère「私の兄」，sa famme「（彼の）嫁」が独立的に現われることは，命題との関わりが薄いこともあって，非計画的な発話にこそ起こると

いえる。Ashby(1988)や林(1990)ではフランス語の左方転移と非計画的発話の関連性を指摘しているが, 言及の対象あるいは意識に上っている指示物を無標な形式をとりあえず提示しておくことが HTLD あるいは LALD の実質であると言える。

4.7 本節のまとめ

本節では，日本語の句末形式，特に昇降調や間投助詞に注目し，それが現われる背景としては，発話計画の未完による発話の断片化に関わっていることを指摘した。また，これらや，句末母音の延伸やフィラー，ポーズが現われることによって，主題と命題の分離が行われることを構造の面と, 背後に潜む発話計画の問題と位置づけられることを確認した。

主題化と非計画的発話との関係についてはギリシャ語やフランス語においても観察され, 左周辺に，上昇下降イントネーションを持って独立的に，無標の格形式で現われる名詞句について，単なる主題化ではなく，意識の対象が言語として漏れてしまう発話計画の未完に伴ってとりあえず前置きされるものであることを確認した。いわば，これらは「とりあえず」主題であり，意識内での連想によって言及範囲を狭めていくような心の動きが言語に現われたものであるといえる。いわゆる主題には対比や属性叙述に使われるような連続的，構造的な主題と，非計画的発話に現われるような非連続的な「とりあえず」主題の 2 種類があり，日本語の「は」などの助詞を伴う主題は,「とりあえず」主題では「～と言えば」のような表現をとらざるを得ないことから，少なくとも前者の，構造的な連続的な主題であると言える。

第5章　話し言葉の主題提示—無助詞と「って」を中心に

5.1 話し言葉の主題提示

話し言葉では，書き言葉に比べコンテクスト依存性が高い。これは，話し言葉のほとんどが聞き手の存在する場において行われることを考えると，話者間の共有する情報に大きく左右されることが特に問題となってくる。また，書き言葉と同様，先行する文脈も同時に共有されやすいものとなっている。本章では，話し言葉に特有な主題提示形式である無助詞と「って」を中心に，コンテクスト依存性の高さに裏打ちされた主題提示の特徴と，その背後に存在する話し手の認知行動についての考察を行いたい。

5.1.1 主題的無助詞

話し言葉の大きな特徴に無助詞名詞句が現れる点が挙げられる。

(5-1) a.　きのう尾藤君は久しぶりに学校に来ていた。

b.　きのう尾藤君久しぶりに学校来てたよ。

(5-1b)は「尾藤君」が無助詞で現れているものであるが，(5-1a)と比べてみても「尾藤君」という人物について,《学校に来ていた》という説明を与えるような題述構造になっていると考えられるので，主題的な役割を与えられていると言える。通常，日本語の題述構造をとる文(有題文)では主題に当たる名詞句は(5-1a)のように係助詞「は」でマークされるのが一般的であるが,「は」による主題とはその特徴に違いがあることが先行研究でも言及されている。

なお，おなじく無助詞の「学校」であるが，こちらは主題ではなく説明の内部，すなわち命題の要素になっていて，述語「来る」の選択する項である。「尾藤君」も述語「来る」の選択する項にはなっているが，この発話ではむしろ主題的な役割を担っている。一般に文頭に近い無助詞名詞句は主題的に，述語に近い場合では述語との結びつきが強くなると言われている(cf. 丹羽 1989; 丸山 1995, 1996a, 1996b, 1996; 杉本 2000, 2004)。

以上のことから，(5-1b)の「尾藤君」のように主題的に働く無助詞名詞句を「は」や後述する「って[1]」などで表されるような主題の一種と考え，主題的無助詞と呼ぶことにする。

[1] 引用用法の「って」は考察対象外とする。(例：あいつが犯人だって思ってた)

5.1.2 主題的無助詞と「って」

主題的無助詞の最大の特徴として，新規主題導入が挙げられる(cf. 丹羽 2006)。先行文脈で話題になっていない名詞句を主題として導入する場合，既知情報について主題化する「は」では不適切になり，無助詞が現れることが多い。

(5-2) a. あ，そうそう，中村さんこの春から復学したよ。

b. ? あ，そうそう，中村さんはこの春から復学したよ。

c. あ，そうそう，中村さんがこの春から復学したよ[2]。

無助詞で現れた「中村さん」は，「は」でマークされた場合と違って，文脈上初出の指示物であっても現れることができる。その意味では(5-2c)のような出来事文(無題文)として見ることもできる。もしそうならば，主題的無助詞は主題ではなく，格助詞「が」の付くものと同じであることになるが，(5-3)は無助詞が「が」と違って，主題として有効であることを如実に表している。

(5-3) 「おばあちゃん，来てる？」

a. おばあちゃん来てるよ。

b. * おばあちゃんが来てるよ。

質問の答えとして(5-3a)が自然なのは，話題になっている「おばあちゃん」が無助詞で現れると主題として解釈できるからである。しかし(5-3b)の「おばあちゃんが」は主題として解釈できず，答えの発話として不適切である。本来この発話は全体が新情報となるような出来事文(描写文・報告文)として現れなければならないからである。(5-2)で無助詞と「が」が意味的に近く感じられたのは，主題「中村さん」が文脈で始めて導入され新情報としても解釈できること，述語が出来事的だったことからに起因すると思われる[3]。

主題的無助詞は，主題である。「は」による主題との違いは，新規主題導入が可能な点である。その意味において，主題的無助詞は「は」主題から意味的に独立していると言える。

主題的無助詞と並んで話し言葉に多く見られる主題形式に「って」がある。これもまた

---

[2] 本稿における主題的無助詞や「って」の許容度は筆者の判断に基づくものであることをお断りしておく。これらの用法は拡大してきており世代によって許容度の判断が違う（cf. 藤村 1993）が，用法の変化が現在進行的であることからも，主題的無助詞や「って」については非文である(アステリスクによるマーク)という判断はせず，自然（無印）・やや不自然 (疑問符一つ)・不自然 (疑問符二つ)の三段階にとどめた。

[3] 大谷(1995)は，本稿でいう主題的無助詞に題目性と出来事性を認め，これのある文を有題文と無題文(出来事文)の両方の特徴を持つ中間的なものと位置づけている。

主題的無助詞同様，話題に上っていない事柄を主題として導入する場合に使用されることが知られている(cf. 渡辺 1995)。

(5-4) a. あ，そうそう，県大会っていつだっけ。

b.？ あ，そうそう，県大会はいつだっけ。

c. あ，そうそう，県大会いつだっけ。

主題的無助詞と「って」主題の違いについてはこれだけでははっきりしないが，一般的または一時的な属性を表す述語をとることが指摘されている(cf. 丹羽 1994, 高橋 2003, 岩男 2005)。

5.2 談話展開と主題

主題的無助詞や「って」主題は新規に導入される場合に現れ，その場合「は」では不自然となりやすいことは 5.1.1 節で確認したが, ではその逆に既に話題になっている指示物の主題提示はどうなるのだろうか。この場合は，ゼロ形式の主題（つまり陰題文）を除けば一般的に「は」が現れやすいと言われている。

(5-5) ―音楽って，何が好き？

音楽{??∅／??って／は}，バロックが好きですね。

(∅は無助詞を表す，例文は丹羽 1994:41 より一部改変)

(5-6) ―『ER』の DVD って，どこで借りれるの？

『ER』の DVD{?∅／??って／は}駅前のツタヤで借りれるよ。

質問に対する答えの発話では，新規導入の「って」は使用しにくく，もっぱら「は」が現れる。また，場合によっては答えの発話で主題的無助詞が現れても不自然ではないケースもある。

(5-7) ―おばあちゃんって，もう帰ったの？

おばあちゃん{∅／??って／は}もう帰ったよ。

(5-5)～(5-7)のケースでは，答えの発話ではいずれも「って」が不適切であり，「は」が自然であることが分かる。主題的無助詞については「は」と「って」の中間的な領域にあるようだが，その特徴はこれだけでは判然としない。

しかし，答え方によっては，主題となる指示物が同じであっても，「は」が不自然で，「って」や無助詞が自然になる場合がある。

(5-8) ―フランス語講座って聞いてる？

a. フランス語講座{∅／??って／は}聞いてるよ。

b. フランス語講座{∅／って／?は}まだやってるの？

c. フランス語講座{??∅／って／??は}ラジオの？[4]

(5-8a)の発話は質問に対するちゃんとした答えとなっているが，この場合は(5-7)と同様，「って」は不自然だが無助詞はそれほど悪くは無い。しかし(5-8b)のように質問に対して，別の質問をする場合は今度は「は」が不自然になり「って」が最もしっくりくる。また，(5-8c)のように話し手が「フランス語講座」がテレビ放送なのかラジオ放送なのかを確定できない場合，すなわち「フランス語講座」の指すものを同定できない場合は「って」のみが現れる(cf. 竹林 2004)。いずれにしても，質問に沿っていない発話の場合は，(5-5)～(5-7)で見られる「は」主題出現の規則は破られ，むしろ新規主題導入にあたる無助詞や「って」が自然になる。また，質問に対する答え方にも主題形式が関係する。(5-9a)のように質問に沿った形で回答しているなら「は」が最も自然だが，(5-9b)のように語用論的にはほぼ同じ情報であっても，質問の形式(問題形式)に沿わない形式で答える場合は，むしろ無助詞や「って」が自然になる。

(5-9) ―『ER』の DVD は，どこで借りれるの？

a. 『ER』の DVD{?∅／??って／は}駅前のツタヤで借りれるよ。

b. 『ER』の DVD{∅／って／??は}駅前のツタヤで見たよ。

つまり，同じ問題形式で問答が行われているのなら，答えの発話は「は」で主題提示するのが最も適切だが，質問と答えで問題形式が変わる場合には，新規主題導入と同じ状況が発生するものと考えられる。以上から，話者交替のある場合の主題の特徴は次のように考えることができる。

(5-10) ・主題が「は」でマークされるのは話題になっているだけではなく同じ話題が保持されている場合に限って現れる。この状況では「って」は現れてはいけない。

・同じものが話題の中心であっても，問題形式(内容)が違う場合には「は」は現れにくく，無助詞や「って」が使用される。

今度は，同じ話者による談話の連続での主題の提示について見てみよう。

(5-11) a. 久乃ていう子がおんねんけど，

[4] 実際の NHK の番組タイトルは，ラジオ放送が「フランス語講座」，テレビ放送が「フランス語会話」であるが，ここでは話者がタイトルの違いを知らない場合を想定している。

b. そいつ{∅／は／?って}もともと華道やっててんな。

c. 久乃｛?∅／は／??って}，お花もっとやりたいんやけどな，

d. あいつ｛∅／??は／って}CAD オペレーターやから仕事忙しいし，お花全然手付かずやねんて。

e. で，この前「もっとはよ帰れる仕事探しいや」って言うたってんけど，あの子｛∅／は／って｝煮え切らんところあるから，「うーん，でもなあ」とか言いよんねん。

f. で，いろいろ提案してんけどな，久乃｛?∅／は／??って}「うーん」って迷ってんのか聞いてへんのか何も言わへんねん[5]。

これは話者の知人の「久乃」という人物についての話である。(5-11a)は語りの最初であり聞き手に配慮した導入表現を採っているため考察対象から省くが，それ以外では三つの主題提示の形式が現れうる。まず，「って」は最も制約が厳しく，(5-11d, e)のように「CAD オペレーターである」「煮え切らないところがある」のような背景情報が現れるような箇所でないと不自然である。それに比べて「は」の現れうる場所は(5-11b, c ,f)のように談話の進行につながっている箇所が含まれている。主題的無助詞はやはりこの二つの中間的なステータスを持ちはっきりとした特徴はつかめないが，少なくとも「って」が現れる背景情報については無助詞も現れやすい。つまり，話題を進行させるには「は」が，臨時的に背景情報を補足する場合には無助詞や「って」が現れやすいと言えるであろう。

しかし，補足説明とはどういうことだろうか。次の例は談話の連続の仕方が違えば「って」は補足説明でなくても現れることを示している。

(5-12) a. あの子美人だけど，性格｛∅／は／??って}めちゃくちゃ悪い。だからみんなに嫌われてるんだ。

b. あの子美人だけど，ほら，性格｛∅／は／って}めちゃくちゃ悪いでしょ。だからみんなに嫌われてるんだ。

(5-12a)は，性格が悪いから嫌われているという話題の連続が見られるので「って」が不適切になるといえるのだが，(5-12b)は性格についての発話を挿入的に行うことで断続的になり，「って」が現れやすくなる。これは「って」と疑問文の相性に関係があるようだが，そ

[5] 本稿では例文(12)のように筆者の母方言である大阪方言による例も共通語のそれとは区別せずに扱った。主題的無助詞や「って」が話し言葉に特有な形態であり，許容度の若干の差は想定されるものの共通語・大阪方言ともにこれらの用法が共通していることからあえて区別しなかった。

れとは別の理由も考えられる。(5-12a)は一連の談話の中で一つの内容を完結させているのに対し，(5-12b)では聞き手に同意を求める発話スタイルをとることで，臨時的に語りの場から離れていると考えられる。つまり，補足説明とは語りの場から臨時的に離れて現実世界で聞き手に情報を提供するもの，いわば物語に対する実況解説という発話であると考えられる。

先ほどの話者交替のある場合の特徴とあわせて，「は」や「って」および主題的無助詞について次のようなことが言える。

(5-13) ・主題が「は」でマークされるのは同じ話題が保持されている場合に現れる。語りの発話では，話題の進行に関係する。

・無助詞や「って」によって表される新規に導入された主題は，同じものが話題の中心であっても，問題の内容が違う場合や，語りの場から臨時的に離れた談話の挿入がある場合に現れる。

従来，新規主題導入は話題の中心に無い指示物をいきなり話題にする場合に取られる主題提示の方法とされたが，上のケースを見ると，話題の中心となる指示物が変わっても変わらなくても，別の問題・情報を新規に扱う場合に無助詞や「って」が現れる。談話の連続の中ではこれらは，話題転換(topic shift)の場合に現れる。(5-11d, e)のように話題の中心を変えずに別の問題を扱う場合や，例えば話題になっている人物の性格を新たに話題にするような話題の中心の小移動は小話題転換(minor topic shift)と呼ばれる[6]。小話題転換は，相手の言葉尻を捕まえてターンを取る場合にもよく見られる。

(5-14) ―こないだ新幹線乗ったら松本人志のお兄さんが隣の座ってて，パソコンで仕事かなんかの書類作ってたよ。

a. その人｛∅／?は／って｝，オレと出身高校同じなんだよ。

b. オレ｛∅／??は／??って｝，その人と出身高校同じなんだよ[7]。

(5-14a)は話題の中心は「松本人志の兄」のまま別の問題「出身高校」を導入しているのに

[6] 全く違う話題になる場合は，“major topic shift”(大話題転換)と呼ばれる。Suzuki (1993)は，主題的無助詞を小話題境界(minor topic boundary)の表示としているが，本稿で言う小話題転換と指しているものは同じである。

[7] (15b)は「実は」を付けると「って」もより自然になるが，相手の「松本の兄が隣の席だった」という話の直後の発話としては不自然である。しかし，この話題がしばらく続いてから「実は，オレって…」と切り出す場合や，相手が「･･･書類作ってたよ。で，実はオレって…」と続ける場合であれば自然である。「実は」が意外性の表出を意図した発話に現れることから，話題連続性が低くなっているために「って」が許容されるのではないかと考えられる。

対し，(5-14b)は話し手を指す語を新規の主題にしている。ここでも「は」はいずれも不自然であり，また，後者の場合は「って」も不適切になるが，これは一人称代名詞であることに関係している可能性がある。いずれにしても，小話題転換と新規主題導入は基本的に同じものと考えられる。

主題的無助詞および「って」は，新規に主題を導入する場合，あるいは同じ話題でも問題意識の捉え方が変わる場合に現れることを確認した。逆に「は」は談話の流れに従う形で，ターン交替がある場合には問題意識の持続，ターン交替の少ない語りでは話題の順序的進行の場合に現れると考えられる。しかし，「は」は小話題転換が起こる話の脱線や，語りから臨時的に離れるような挿入的談話には適しておらず，その場合は新規主題導入として，無助詞や「って」が現れる。

この言語事実に関係することとして，Benveniste(1966)はフランス語の過去時制の使い分けについて“discours”(談話)と“histoire”(歴史・物語)の二分法を見出しているが，これらは上で見たようなターン交替の多いやり取り的な発話と語りの発話との違いとして再定義できる。語り(物語・体験談，すなわち histoire)は現実空間(話者が共有する物理空間)や談話空間(談話の現場)と切り離されたその中で完結する場であり，やり取り的な発話(＝discours)は談話空間と現実空間への参照が中心となり，一・二人称代名詞などの直示的表現が多くなる。新規主題導入・小話題転換はもっぱら談話空間内で行われるものと考えれば，語りに挿入されるような解説的談話も語りの場から一時離脱して談話空間に現れるというように考えてもよい。

5.3 現場性

5.3.1 発話行為と現場依存性

尾上(1996)は，主題的無助詞が現れる発話に下のような，教え・勧め・質問・感嘆，あるいは話し手の心情や意思の表明などを挙げている[8]。

(5-15) a. この時計止まってるよ

b. お湯あつい？

c. わたし，歌手になりたい。　　(以上尾上 1996 より)

これらについて，藤原(1992)や楠本(2002)は聞き手への働きかけがある発話には主題的無助

[8] 初出は尾上氏の 1987 年の国語学会発表配布資料であるが，筆者はこれを未入手のため代わりに氏の 1996 年の認知科学会ワークショップ配布資料を参照した。

詞が現れると述べているが, (5-15c)は, 働きのある発話とも独り言であるとも考えられる。独り言は必ずしも聞き手に働きかけているとは限らないので，主題的無助詞が聞き手に働きかける発話で現れるというだけでは説明にならない[9]。

(5-16) a. このチョコレートおいしい。

b. このチョコレートはおいしい。 (尾上 1996 より)

(5-16a)の発話は, 今口に入れたチョコレートがおいしかった事を伝える発話というよりもむしろ「おいしい！」のような叫びの一語文に近い。このような発話は喚体であり，話し手がチョコレートを食べたときの感動(体感)を叫ぶ発話であると言える。こういった感動・体感の発話はその発話現場だからこそ有効であり，その意味で現場依存的である。また，(5-15ab)のような相手に働きかけのある発話もその発話現場において有効であり，これらの発話で主題的無助詞として現れる指示物は，いずれも発話現場で話し手・聞き手ともに知覚できるものである[10]。このことから尾上(1996)は(5-15)(5-16)のような話し手の感動や体感の叫びや働きかけのある発話を「現場内行為としての言表」として，現場に依存しない説明や描写などの発話「自在的言表」と区別した。そして，その「現場内行為としての言表」に主題的無助詞が現れるとしている。つまり，主題的無助詞が発話行為の問題ではなく，むしろ主題として現れる指示部の現場依存性に関係していることを尾上は指摘している。

では，5.2 節で主題的無助詞のある題述文とは区別した出来事文(無題文)も現場の状況を描写することから，現場依存性との関わりがあると思われる。逆に主題的無助詞のある現場依存的発話も出来事文的な側面がある。これらの違いについてもう少し考えよう。

(5-17) a. 雨降ってる[11]。

b. 雨が降ってる。

(5-17)における助詞の有無による違いは発話スタイルの違いに起因することが言える。

---

[9] 聞き手に聞えるような独り言(cf. 森山 1989, 定延 2005)は働きかけの意図のある発話であると考えられる。

[10] 形は無くても音やにおいのように五感に関係するものや，空気のように体験的(触覚的)に感じられるもの，あるいは神や妖怪のように存在を証明できないが話者にとって「見える」ものなどもここに含まれる。(例　座敷童そこにいるよ。)

[11] この「雨」は述語直前の位置に現れる無助詞名詞句とも見ることができるため，題目の要件を満たしていないのかも知れない。しかし，後で述べるように「雨が降ってる」とは違う点，「雨降ってる？」のような疑問の発話では「雨」は題目になっている点，このような無助詞名詞句を丹羽(2004, 2006)が「存否の題目語」として認めている点より，単に助詞が省略したように見える述語直前の無助詞とは言えないことから，本稿では主題的無助詞として扱う。

(5-16)での「は」の有無による違いと同様，感動としての発話であるか否かである。屋内から窓の外に目を遣ったとき雨が降っているのに気づいた場合の発話としては(5-17a)がより自然であるが，これは「あ，雨(だ)」あるいは「あ，降ってる」のような一語文と近く，降雨に気づいたときの発見あるいは軽い驚きのような感動を伴う発話であるからである。これに対して(5-17b)は主題の無い出来事文であり，例えば屋内にいる別の人に降雨を知らせるような報告文として働くため，降雨に気がついたときの発話としては若干不自然である。報告文であるからには現場を叙述している発話でもあるので，その叙述性の高さによって(5-17a)のような喚体的な印象が薄れるとも言える[12]。

また，(5-17)の助詞の有無は降雨に対する認知の違いも関係している。(5-17b)が(5-17a)のような感動としての発話として現れる場合は，例えば雪が降るはずだという思い込みが話し手にあって，「あれ，雨が降ってる」のように「予想外」の気持ちが強く現れる場合である。これは思い込みと現実とのずれが「が」の出現の契機になっていると考えられる。しかし(5-17a)の発話は思い込みがどうであれ，あくまでも現実世界での知覚をそのまま言語化しただけであり，感動を伴った発話としての効果はその発話の現場的緊急性から生まれる。その意味では，雪が降るという思い込みのある状況での(5-17b)の発話は，思い込みと現実の齟齬に気づいたことが現場的緊急性を持つことによって，「予想外」という態度であると受け手が推論できるような発話になったと考えられる。

このことから，主題的無助詞は発見や驚きがあるから発話に現れるのではなく，現場にある感動の対象となる指示物を知覚だけによって取り出して言語化する場合に現れると考えられる。「いま・ここにある」という感覚を「現場性」と呼ぶならば，現場性こそが受け手に感動・体感の印象を呼び起こす。

5.3.2 現場性と想起しやすさ—情報構造

現場内行為の拡大として，現場に存在することが前提にならなくても状況的に関係する指示物を主題的無助詞で提示する発話がある。筒井(1984)は，発話状況から相手に関係があると思われる事物について主題的無助詞が現れることを指摘している。

(5-18) 【ペンを探している人に】

ペン，ここです。 (筒井 1984 より)

談話上では「ペン」は初出であるが，聞き手がペンを探している状況からペンが問題にな

[12] このような発話は喚体に対して述体と呼ばれる。

っていることを話し手が推論することによって，主題として現れることが出来る。

Masunaga(1988)や甲斐(1992)では, 話者間で共有している情報や状況から話題に上る可能性，いわば想起しやすさがあれば，その指示物は主題的無助詞でも現れることが指摘されている。

(5-19) 【会社で】

今度のプロジェクト，うまくいきそう？　(Masunaga1988 より)

これは，会社での発話であり話し手・聞き手ともそこに関わっていると言う状況的前提がある。このような状況では他の社員や得意先，仕事の内容といった会社に関係する事物は常に話題に上りやすく，文脈上で話題になっていなくても新規の主題として現れて主題的無助詞が現れる。

想起しやすさは前節で見た現場性との共通点がある。それは意識の置き方である。現場にある指示物は，知覚すればすぐに意識の中に置くことができる。また想起しやすい指示物は，発話状況から連想が容易であるものと考えることができる。意識と主題に関係するものとして Chafe(1994)の“activation state”(活性化状態)がよく知られているが，これを援用すれば現場性・想起しやすさの高い指示物は，“accessible”(アクセス可能)の状態にあると言える[13]。実際に主題的無助詞の現れる例を見てみると，このような状況に指示物があることを確認できる。

(5-20) 雨降ってる。＝(5-17)

(5-21) 今度のプロジェクト，うまくいきそう？　＝(5-19)

(5-22) 田中君から聞いたんだけど，奥さん入院してるんだって。

(丹羽 2006 より)

(5-23) こないだ奈良行ってきたけど，法隆寺よかったよ。

上の「今度のプロジェクト」「奥さん」「法隆寺」のような指示物はアクセス可能に当たる名詞句である。すなわち，発話前は意識の中心にはないが，発話の時点で聞き手が直ちにその指示物を意識の中心に移す(活性化する)ことが出来る状態にあるという意味であるが，言語的には，現在は主題として提示されていないが，主題提示できるような状態に指示物があることを表す。具体的にアクセス可能になる指示物としては，眼前のもの，談話の参与者(話し手・聞き手を含む)といった現場に存在するもの，「今度のプロジェクト」のよう

[13] Prince(1981)の“familiarity scale”(親和性の階層)では inferable”(推論可能)や“situationally evoked”(状況的既出)に当たる(cf.庵 1998)。

に発話状況を前提に共有されている関心事，参与者の所有物，家族，共通する知人・同僚などのよう想起しやすいもの，あるいは話題になっている事項に関係するもの(「奈良」に対する「法隆寺」)が挙げられる(cf.　Lee 2002, 金田 2005a)。また，(5-18)の「ペン」のように聞き手が意識していると思われるものを話し手が推論することによって，それが意識に上るというケースもある。これらの指示物は発話の直前において潜在的にアクセス可能の状態にあるということになり，新規主題導入で現れる名詞句の指示物はアクセス可能の状態であると言える。これに対して，現在話題となっている名詞句の状態は“active”(活性化)であるが，日本語では活性状態にある指示物は基本的にゼロ形式になるか「は」でマークされる(無助詞でも現れうる)。つまり活性化なら「は」は現れることが出来るが，アクセス可能では現れにくく，主題的無助詞や「って」が現れるという対応関係がここから説明される。

従って，談話と情報について，主題的無助詞や「は」「って」の出現に関して関わってくることは，問題となる指示物が発話の現場，話し手の意識，そして談話上にあるかどうかの三つである。

5.4 主題的無助詞の現れにくい発話—自在的言表

これまでは主題的無助詞の現れる発話を見てきたが，ここではネガティブな事例を見ることにする。現場との関わりの無い一般的な事項について主題的無助詞は現れにくいと言われている(cf. 筒井 1984，丹羽 2000)。

(5-24) アインシュタイン{?∅／は／って}, 一体なんでそんなに偉いんですか。(筒井 1984 より，「って」の適格性については筆者が追加)

(5-25) 鯨{?∅／は／って}哺乳類だよ。　(丹羽 2000 より，同上)

これらの発話は「アインシュタイン」といった歴史上の人物や，種としての「鯨」は，一般的な知識 (真理・事実)が関係する発話である。このような名詞句を主題にする場合，主題的無助詞は不自然であり，「は」や「って」を必要とする。

ここで見た主題的無助詞のネガティブケースはいずれも尾上(1996)のいう「自在的言表」であり，「現場内行為としての言表」と対置されるものであることが確認できる。説明的な発話は叙述的であり，現場依存的な喚体とは結びつかないので，これが主題的無助詞の出現を妨げる要因であるとは考えられるが，一般的な事柄についての発話が主題的無助詞と馴染まない理由は他にもありそうだ。

5.4.1 一般性・総称性・知識

丹羽(2006)は主題的無助詞が一般的事項に関する発話について現れにくいことに関係する要素として，(i)総称名詞句と固有名詞の属性についての発話であること，(ii)一般的な知識を問題にしていることを挙げている。この二つの見方に関係する言語事実を見ていこう。

(5-26) a. 京都{?∅／は／って}古い町だね。

b. 京都{∅／は／って}よかったね。

(丹羽 2006 より，「って」の適格性については筆者が追加)

(5-26a)は固有名詞「京都」の属性という一般的知識を問題にしているが，(5-26b)は旅行などの経験に基づいた発話になるので，無助詞が現れると説明している。つまり，一般的知識と経験に基づく発話では主題的無助詞の現れやすさに差が現れることが分かる。

また，固有名詞は別にして普通名詞について見ると，種としての「鯨」(5-27a)と個体としての「この鯨」(5-27b)，個体の集合あるいは物質(i.e.鯨肉)としての「鯨」(5-27c)では主題的無助詞の現れ方に差が見られる。

(5-27) a. 鯨{?∅／は／って}哺乳類だよ。

b. この鯨{∅／は／って}とってもかわいい。

c. 鯨{∅／は／って}とっても好きなんです！

属性叙述的なケースで主題的無助詞が許されるのは，個体と集合・物質の読みである。つまり具体性のある対象については主題的無助詞が認められ，抽象概念である「種としての鯨」には認められないということが言える。

知識と総称という二つの観点は密接に関わっている。総称名詞句の指示物はより概念的であり知識的であると言える。また，知識の対立概念としての体験(cf. 定延 2003)を考えると，出来事的な認知は具体的な指示物である個体(およびその集合)でなければ知覚の対象にならないことから，個体と体験という線でもつながっていることも分かる。しかし《知識—体験》《個別(具体)—総称(抽象)》の二分法はその境界線がぴったりと重なるわけではないので，それぞれについて主題的無助詞の出現を検証しなければならない。

5.4.2 個別具体性

前節では，主題的無助詞の出現が名詞句に総称性があるかどうかに問題があることをみたが，ここで，次のような仮説を立てる。

(5-28) 主題的無助詞は個体あるいはその集合を現すような具体を表す名詞句については現れるが，総称としての名詞句には現れない。

つまり，名詞句の意味的特徴が文の形態統語的特徴に対応しているのではないかという視点である。まず, 個別の指示物について主題形式と述語の組み合わせについて確認しよう。

(5-29) a. あ，あの鯨{∅／??は／??って}潮吹いた

b. ほら，あの鯨{∅／?は／って}潮吹いてるよ！

c. あの鯨{∅／は／って}メスだよ！

(5-29a)は出来事を表す述語を取るが，鯨が潮を吹く瞬間を目の当たりにしたときの現場的発話である。また(5-29b)のようにテイル形を使って鯨の一時的属性を述語に取ると属性叙述を表すと言われる「って」は可能になるが，これも眼前描写に基づく新規主題導入であるので「は」は現れにくい。しかし(5-29c)のように恒常的属性である性別についての発話であれば「は」も可能になる。このことから個別の指示物についての事象を表す場合は主題的無助詞のみ，属性を表すなら「って」「は」が可能になっていくと考えられる。

金田(2005a)では，3.2 節で見たように主題的無助詞が現れやすい名詞句を次のように挙げた。

(5-30) ・直示的表現：一・二人称，指示詞，現場に存在する指示物

・文脈または発話状況から推論できる指示物

これらは，基本的に同定可能であると考えられる。例えば,「私の性格」は具体的ではないが，話し手の分離不可能所有であることから個別具体の対象として考えられる。このことから考えると, 主題的無助詞が個別具体的な事物に対して現れることがまず言えるだろう。しかし，総称名詞句については，次の例が反例となる。

(5-31) ―シロナガスクジラって一番おっきい魚だよね？

何言ってるの，鯨 {∅／は／って}，哺乳類だよ。

これは，前の発話内容に誤りがあるのを訂正の発話であるが，ここでの「鯨」は話し手や現場に関係のある個別的な鯨ではなく鯨一般を指し総称的であると考えられる。しかし，総称であるにもかかわらず無助詞が可能になる場合がある。では，主題的無助詞でも自然な(5-31)と，主題的無助詞が不自然な(5-32)の違いは何であろうか。

(5-32) 鯨{?∅／は／って}哺乳類だよ。＝(5-25)

これまでの無助詞名詞句の研究は，単文を中心に行われてきた側面がある。話し言葉である以上，文脈や発話状況などの影響を存分に受けるのは当然のことである。(5-31)は文脈

依存的な発話であるが，これは(5-31)の「鯨が魚類だ」という誤りの発話の直後であることが，例文から再現できるからである。(5-32)の発話は「自在的言表」の典型であり文脈が無くても真理や事実に関する内容であるため現れることが出来るが，逆に「自在的言表」であることが観察者にとってこの発話がなされる文脈や状況の再現・想起を妨げているのかもしれない。また，本来個別具体的な指示物であるはずの「アインシュタイン」や「京都」が主題的無助詞として現れにくかったことも，文脈に影響されずに現れうる一般的内容の文(発話)であったことが，主題的無助詞の出現を阻む原因であっただけである。

また，個別具体でなければ主題的無助詞が現れ得ないことを否定するものとして，存否の題目語(cf. 丹羽 2004)の現れる発話もある。

(5-33) a. はさみ｛∅／は／?って｝あるよ。

b. はさみ｛∅／は／って｝ある？

c. はさみ｛?∅／は／??って｝ない。

(5-33ab)では「はさみ」の個別具体・特定の解釈も可能であるが，むしろ不定の解釈のほうが自然である。しかし，主題的無助詞はいずれの場合も可能である[14]。また(5-33c)ははさみが存在しないことを話者が認めているため当然同定不可能である。この意味からも，主題的無助詞の出現に名詞句の個別具体性・総称性が関わっているというのは正しくないことがわかる。

5.4.3 知識と体験

主題的無助詞が不自然となる(5-34)(5-35)の発話が，話者内あるいは話者間で　知識についてのやりとりをしているという点に注目すると，知識を問題にする発話では主題的無助詞が現れにくいという仮説が浮かび上がる。

(5-34) アインシュタイン{?∅／は／って}一体なんでそんなに偉いんですか。

(＝(5-24))

(5-35) 鯨{?∅／は／って}哺乳類だよ。　(＝(5-25)(5-32))

主題的無助詞が現れやすい発話に，教え・同意要求・質問あるいは感情表出などの「現場

[14] このケースは述語「ある」の直前にあるものとしても考えられるので，題目的でない解釈も可能である。しかし，格助詞「が」を補うと無助詞とは同じ状況の発話にはならず，例えば(39a)では所有の意味よりも現象を表すような発話になる。また，発話が「はさみ」について「ある」かどうかが問題になっているという状況を考えると，この無助詞名詞句の「はさみ」は題目的であると考えるほうが妥当である。

内行為としての言表」があることは既に述べたが，これらが知識に関係する発話ではないことは明白である。

(5-36) メガネあった。

(5-37) この子猫かわいい！

定延(2003)は認知と発話について，知識とこれに対立する概念である体験を考えることの有効性を主張しているが，これを援用するならば (5-36)は発見，(5-37)は感嘆の発話であることから，体験の側に属す発話であると考えることができる。また，その体験側に属す発話は主題的無助詞が現れやすいことを考えると，《主題的無助詞—体験》・《*主題的無助詞—知識》という二分法が可能になるとも考えられる。なお，質問(自問を含む)も聞き手への働きかけがある発話行為だが，(5-34)が知識を問題にした質問であると考えれば，主題的無助詞が現れにくい理由として妥当であるように見える。

前節では普通名詞の個別性・総称性と主題的無助詞の出現要件について検討したが，個別具体的であるはずの固有名詞についての説明ができないなどの不備があった。(5-34)の「アインシュタイン」は名詞句としては個別具体的であるのに，主題的無助詞の出現を認めにくい。アインシュタインは歴史上の人物であるため，アインシュタインに関する属性やエピソードは基本的には知識に属すると考えられる。しかし，生前のアインシュタインと付き合いのあった人や，例えば博物館やゲーム，夢の中で仮想的に接した人は，その体験を通じてアインシュタインを知覚することが出来るのではないだろうか。そして実際にその差は言語にも現れる。

(5-38) アインシュタイン{(?)∅／は／って}暇さえあったらいつも考え事してたのよ。

(5-38)はアインシュタインを直接知らない人の発話なら主題的無助詞は不自然だが，実際または仮想的にアインシュタインと接した人なら不自然ではなくなる。また，先ほど見た「京都」についても体験に基づくような発話である場合には主題的無助詞が現れやすくなることを考えても，主題的無助詞の出現に関しては体験が関わっていて，知識の発話では現れないという考え方は妥当であると思われる。

(5-39) a. 京都{?∅／は／って}古い町だね。

(5-40) b. 京都{∅／は／って}よかったね。(＝(5-27))

また，体験の発話として体験談がある。体験談は過去に起こった話者に関係する一連の出来事についての発話であるが，物語と同様いずれも発話の場との関わりのない語りであ

る。物語との違いは概して客観的に捉えているか, 話者の主観で捉えられているかである。

(5-41) a.　家に帰るといつもなら来るはずの猫がやって来ない。で，おかしいと思った岸田はベッドの下を覗いたら，猫{∅／は／?って}いびきをかいて寝てたの。何事も無くてよかったぁって岸田はホッとしたの。

b.　家に帰ったら猫いつも来るはずなのに来ないから，こりゃおかしいなと。で，ベッドの下覗いてみたら，猫{∅／?は／??って}，いびきかいて寝てたんだ。ほんと何事も無かってホッとしたよ。

(5-41a)は物語として岸田に降りかかった出来事を描写的に語ったもの，(5-41b)は岸田自身の体験談であるが，(5-41b)の「猫」に「は」を付けると不自然になる。これは，過去において起こった《猫が無事で単に寝ているだけだったということが分かった》という発見(とそれによる安堵)を伴う(5-42)のような発話を現在に呼び起こしている。

(5-42) なんだぁ，こいつ{∅／?は／?って}いびきかいて寝てたのか。

このときのそれぞれの主題提示の適格性が(5-41b)でも継続して現れている。そういう意味でも，過去の出来事に伴う発話とその状況を語りの中で再現していると考えられる。

定延(2003)は本来知識に属する内容も，体験を再現するように語ることが出来ることを指摘しているが，体験的に語ることにより臨場感を演出することができる。

(5-43) …岸田がベッドの下覗いたら, 猫{∅／は／?って}いびきをかいて寝てるの。

(5-43)は物語である(5-41a)の一部であるが，「猫」を主題的無助詞でマークし，動詞を現在形にすることによって，さらに適切な韻律特徴で発話することによって，物語であるにも関わらずそのときの状況がリアルに感じられる。つまり体験談ではない物語は知識であるのに，それを臨時的に体験談のように語ることでそのときの臨場感を再現することができる。

また，属性に関する発話でも知識と体験が関係するケースがある。

(5-44) a.　横山やすし昔めちゃくちゃ面白かったんだよ。

b.　横山やすしって昔めちゃくちゃ面白かったんだよ。

話し手が生前の横山やすしが活躍していたのを鮮明に覚えている感じが強く伝わるのは(5-44a)である。逆に「って」が付くだけでこの発話内容が話し手の体験に拠らず伝聞の知識に基づいているという印象がより強くなる。

以上から，主題的無助詞の出現の可否は体験・知識という認知領域の違いによる区別に対応していることが推定されるのであるが，名詞句の個別性・総称性と同様にこの説も反

例がすぐに見つかる。

(5-45) うちの先祖{∅／は／って}義賊だったんだよ。

話し手にとって先祖は親族であっても会ったことの無い人物のはずであり，この発話自体も体験に基づいているとは言えず，知識の発話である。それにもかかわらず，主題的無助詞が不自然ではない。また前節で，共起しないはずの総称名詞句と主題的無助詞の共起の例を見たが，これは同時に知識の発話に主題的無助詞が共起している例そのものでもある。

(5-46) ―シロナガスクジラって一番おっきい魚だよね？

何言ってるの，鯨 {∅／は／って}，哺乳類だよ。(＝(5-31))

しかし，この発話は相手の発言の内容の誤りを訂正するものであり，文脈および発話現場に依存した発話である。そう考えると，(5-45)もまた，「うち」という話し手を表す直示的表現が入っていることに注意すると，この発話は「話し手の先祖」というよりも「話し手」に関わる発話であり，その意味で現場性が問題になっていると言える。

5.5 現場性再考

主題的無助詞の出現について個別具体性・総称性および知識と体験に基づいた説明を試みたが反例はすぐに見つかった。しかし，その過程において現場性こそが主題的無助詞の出現に大きく関わっていることを再確認することができた。本節では，現場性についてもう一度考え直し，主題的無助詞とは一体どういう認知的特徴を持つものなのかを追及することにする。

無助詞や「って」が登場する環境として問題になるのものとして，現場・話し手の意識・談話上に存在する指示物であることを 5.4.3 節で述べた。現場性の拡張としては談話・意識における現場を考えることができるが，同節の最後で触れた談話空間を援用して統一的な説明を試みよう。

まず，談話に関係する意識を知覚空間・談話空間・心的空間の三つに分けて考えることができる。現場での存在が知覚可能である指示物は知覚空間に属し，すべての指示物はアクセス可能である。談話空間とは話者の間で言語的なやり取りをする場であるが，また文脈も問題になるため，談話の場に出された発話内容は談話空間に留まると考え，しばらくはアクセス可能の状態にある。心的空間は，知覚空間・談話空間に現れていないものが言語化する以前に留まる空間であり，内部の指示物は話し手自身しかアクセスできない。心的空間の指示物全体はアクセス可能ではないが，会社での発話における「プロジェクト」

のように発話状況に関係のある指示物はアクセス可能になる。また,「奈良」が話題になっている場合の「法隆寺」「鹿」「大仏」のようにイメージの連鎖による別の指示物は，談話空間にある既存の指示物に関係する別の指示物であるとして，同時にアクセス可能になるのである。つまり心的空間にある指示物はそれだけではアクセス不可能であり，発話現場(知覚空間)と文脈(談話空間)との結びつきがあって初めてアクセス可能になる。

このような状況において，主題的無助詞や「って」が果たすものは，知覚・談話・心的の各空間に存在するアクセス可能な指示物に対して名前によるリンクを貼って談話空間にそのまま主題として提示することにある。知覚空間や談話空間では他にも確実なリンクを貼る場合には「この」「あの」といった指示詞が冠せられ，文脈や状況といった抽象的な指示物は「それ」のように代名詞が使用される。新規主題導入・小話題転換はリンクを貼るということに起因する談話的特徴であり，それが既に主題提示されていれば,「は」の役割とも一部共通することになる。

談話空間と心的空間，知覚空間とリンクの模式図を図 5-1 に示す。

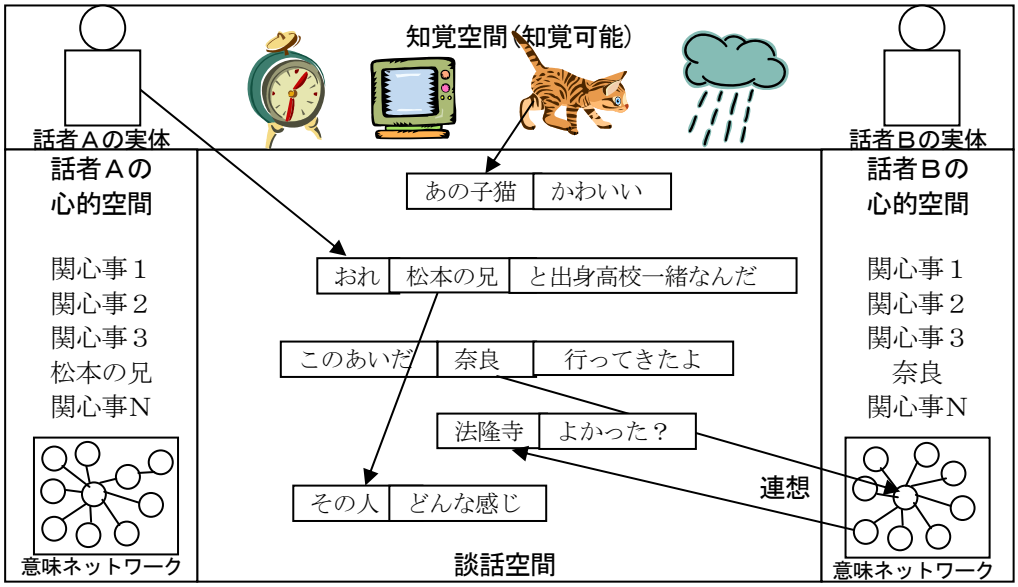


図 5-1：意識の空間模式図

尾上(1996)の挙げる「現場内行為としての言表」は先述の意識の空間モデルを用いると，知覚空間の指示物を談話空間にリンクして提示し，後続の部分に評言や手続き(命令や勧誘などの場合)を置くということになる。具体例を挙げれば，知覚空間にいる子猫にリンクして主題化し「かわいい」という情意形容詞の評言を置くことで，その「子猫」に対する情意を表出する発話「この子猫かわいい」が達成するという具合である。

では，現場内行為を拡張して他の空間でのリンクを考えてみよう。心的空間とのリンクであれば，文脈が無い，すなわち知覚空間や談話空間で結び付けられていない指示物についての発話は基本的に無助詞では現れない。

(5-47) ねえ，ラーメン屋{?∅／?は／って}どこがうまいかなあ。

(5-47)の発話は，文脈に関係なく「ラーメン屋」を提示したものであるが，この場合は無助詞よりも「って」が自然である。しかし，複数のラーメン屋がある場合(知覚空間との結びつき)やラーメン屋の品評の最中(談話空間との結びつき)であれば無助詞や「は」でも不自然ではない。従って心的空間の指示物でも，発話現場に関連付けられない場合は主題的無助詞を用いた発話が不自然になり，この場合はむしろ自在的言表となる。

次に談話空間での現場内行為であるが，自在的言表であるはずの「?鯨哺乳類だよ」が，誤りを訂正する発話であるならば無助詞でも不自然でなくなることを 5.4.2 節で確認した。誤りを訂正する発話であることは現場依存であり，これは談話空間に現れた名詞句について引用するような形でその場で主題化している。その意味では，談話空間に関する場合はメタ的現場内行為として主題的無助詞が成立しやすくなる。

談話空間には語りの発話が現れると，現実の知覚空間と談話空間とは別の語りの空間が臨時的に生まれる。語りの発話に現れる主題的無助詞には，補足説明(5.2 節)と再現的発話(5.4.3 節)が見られる。補足説明は語りの空間から一旦談話空間に離脱し，語りに対する説明や解説を加えるメタ的現場内行為であると言える。これに対して再現的発話は，語りの空間を臨時的に知覚空間と談話空間に投影し，語りの空間を現実に置き換えた現場内行為の再現として成立する。その意味では擬似的現場内行為の発話であり，発見以外の発話でも過去形が現れることが出来る点からもあくまで擬似のものである。

(5-48) a. 塀の上に子猫が寝てたんやけど，その子猫{∅／??は／?って}めっちゃかわいいねん。

b. 塀の上に子猫が寝てたんやけど，その子猫{∅／??は／?って}めっちゃかわいかってん。

ただし，先行文脈で登場している指示物でも現実とは直接関係のない知識に関する発話や語りの発話では主題的無助詞は認可されにくい。

(5-49) アインシュタイン{??∅／は／って}大学出た後も研究職がなかったの。それでアインシュタイン{??∅／は／?って}仕事が楽な特許局で働いて，後の時間を研究に使ったの。

二番目の「アインシュタイン」は文脈上既出であるが主題的無助詞は使いづらい。しかし，挿入的な説明になれば主題的無助詞が現れることが出来る。

(5-50) ほら，さっきアインシュタイン{∅／は／って}特許局で働いてるって言ったでしょ。

(5-50)は語りから現場への一時的な離脱であり，(5-49)のような語りの内部，すなわち話題が進行する場での発話ではない。つまり，文脈に上っていても，語りの内部は現実と切り離されているので，指示物は現場性を持ち得ない。その意味では談話空間上の指示物である文脈上既出の指示物も心的空間の指示物と同様，発話現場との関連がなければアクセス不可能なのである。

以上見てきたように，主題的無助詞が現れる発話は現場内行為としての言表の延長として説明することができる。つまり，現場性とは知覚空間にある具体物，現場と文脈に関係する意識空間に存在する指示物，談話空間に現れた語・概念へのリンク可能性であることがわかる。では，なぜそのような発話では主題的無助詞が現れやすいのか。無助詞と有助詞の違いを考える必要がある。

5.6 主題提示に助詞が現れること

主題的無助詞の特徴を切り出すために，無助詞・「って」・「は」の三つの主題形式が，ある部分ではその機能が重なり，ある部分では棲み分けがなされていることについて少し考えてみたい。

主題的無助詞の特徴としてよく取りざたされているものに，非対比性がある。「は」主題が現れると対比の意味が現れる場合に，主題的無助詞が現れるということである。

(5-51) a. ぼく行きます。

b. ぼくは行きます。

(5-51a)は何かに参加する志願者を募っている状況で，話し手が行くという意思を表明する発話であるのに対し，(5-51b)は「ぼく」が主題になっているか，《誰が何と言おうと》《X君は行かないが》という発話の前提が浮かび上がるような発話である。「ぼく」を主題にすることは，他者のいる中での自己についての言表であり対比的になる。つまり，複数の事態・事項を対比する言表を行う動機がある場合，その対象が「は」でマークされる。その背後にある認知的行動としては対立する事態・事項からの判断が考えられる。「は」は5.2節で見たように，同じ話題の中心について同じ問題を考える場合に現れ，無助詞や「って」

の出現を阻む。また，語りの発話において「は」は話題の展開に関わっているが，語りでは判断の入り込む余地はない。そういった意味から「は」が判断を表すということでは説明として不十分である。そこで,「は」は主題について何らかの認知的処理を行うものとして考えるのはどうであろうか。判断然り，新しい展開の呼び出し然り，知識としての属性の読み出し然り，これらを認知的処理であると認めれば「は」の指示内容との整合性は保つことが出来る。

また,「って」は疑問文に現れやすく，本来現れないとされる(5-52)のような事象叙述にも現れうる。

(5-52) 太郎って花子とデートしたの？

また，話題の導入にも「って」を使った表現が見られる。

(5-53) ところで,「空飛ぶモンティパイソン」って見たことある？

「って」は「再定義」(田窪 1989)や「捉えなおし」(丹羽 1994)の機能があると考えられているが,「って」が疑問文や終助詞「よ」・「よね」の現れる文と共起しやすいことからも，これを話し手と聞き手の情報の不均衡として見ることが出来る。そういった意味では「って」は情報の調整に関係する認知的処理に基づくものであり，現場性とは別の次元で働いていると言える。

「は」や「って」はいずれも心内で何らかの認知的処理を行っている状況に対応して出現していることが考えられる。これに対し主題的無助詞は，新規主題導入や現場性以外の文法的･談話的特徴を見出せない。無助詞名詞句という形態に最低限保障されているのは，シニフィエに対する名前付けと指示である[15]。換言すれば指示物に対して言語のラベルを貼り付けることに他ならない。つまり，現場性の認められる指示物についてリンクを貼ることは，指示物がそこにあるために特別の助詞を使用することなく無助詞でも十分成し遂げられるのである。逆に現場性が認められても，判断などの認知処理が入るとそれに応じた助詞が要求される。

(5-54) a. 何じゃこりゃ!!?

b. 何じゃこれ!!?

(5-54a)はあるドラマで刑事が殉職するシーンでの有名な台詞であるが，ここでは(5-54b)のように無助詞ではなく「は」と融音した「こりゃ」が現れている。この発話は，銃撃戦

[15] その意味では無助詞名詞句が本来の定義における nominativus(＜nominare「名づける・呼ぶ・言及する」＜nomen「名前」)であると言える。

の中で犯人に撃ち勝ったものの，自分の吹き出る血を見てどういう事態であるかを自問する発話であり聞き手(ここでは話し手本人)に判断を求めていると考えられる。しかし(5-54b)のように無助詞にすると，「何じゃこれ？あ，血か」のように得体の知れないモノを同定しようとする発話にしかならない。つまり，主題的無助詞のある発話では主題化された指示物に対する単純に属性を述べる評言が現れやすく，このことは判断等の認知処理が行われていないという考えを補強するものである。

5.7 これまでのまとめ

本稿は主題的無助詞の出現に関して，現場性のみが関わっていることを主張した。またその現場性に基づいて次のような主題的無助詞が現れる条件を提案できる。

(5-55) ・発話の現場に関係がある。
・リンク付けを除く認知的処理の介在を言及しない。

このような発話は, 現場に関連付けられた指示物に対して独立的に評言を行うものであり，判断などの認知的な操作を伴わない。これに対して「って」は「は」と同様に，発話に際して話し手の認知的処理がかかわっており，情報の調整を行っている。主題的無助詞自体の役割は話し手の意識が当該の指示物に移ることを表すことと，それによって聞き手の意識をその指示物に向けさせることである。その意味では同じく無助詞で現れる呼びかけにも似ている。

ところで現場と関わりを持たない自在的言表では無助詞が現れにくいという従来の説は, 単文レベルが持つ文脈独立性から生じているからであり，同じ形式・内容の発話でも現場依存の発話になれば主題的無助詞が認められることも指摘した。無助詞の出現は個別具体性や体験的な発話に関係があるとも考えられるが，発話が現場依存的であればその対象は個別具体的な指示物であることが多く，また，知識についての発話が文脈に依存しない(自在的言表である)ということを考えるとこれらは現場性に基づいている。その意味で，《個別具体性—総称性》や《知識—体験》の区分は無助詞の出現に対する直接の原因ではないと言える。

主題的無助詞は従来，「は」の省略と考えられていたように，「は」と無助詞を入れ替えても違いがないケースは多い。文脈依存もまたメタ的な現場依存であるため，題目を継承する「は」に成り代わって主題的無助詞も使用できると考えることが出来る。逆に，主題的無助詞のみが認可される発話は，現場依存的でかつ「は」・「って」の背後にある認知活

動と発話状況および内容と齟齬を起こしているために主題的無助詞のみが適格であると考えることが出来よう。

5.8 主題的無助詞に関する対照

5.8.1 主題的無助詞の方言差

日本語の文法をさらに明らかにするために，方言文法との対照による研究が最近隆盛を帯びているが，無助詞名詞句の文法への組み込まれ方にも違いがある。たとえば，述語の項としての用法では，出雲方言や奄美・沖縄方言では目的語が，東北・北関東方言では主語および無生物目的語が無助詞で現れる（cf. 秋田県教育委員会(編) 2000，佐々木 2004，内間 1994）。逆に八丈方言のように無助詞をほとんど認めないものもある（cf. 金田章博 1993）。

岡山県の方言でも無助詞はあまり認められないことが知られている。ここでは，助詞「は」「を」「へ」が直前の母音と融音することが知られており，たとえば「うちを」は「うちゅー」,「大阪へ」は「おおさけー」のように発音される（友定 1977, 飯豊 毅一ほか(編)1982）。無助詞形式はしばしば助詞の省略とみなされるが，そのなかでも復元されそうな助詞は「は」「が」「を」が中心であり，このうち二つは融音する助詞である。その意味では無助詞が現れにくい原因であるとも考えられる。

主題的無助詞について見ても，岡山県備中地方の方言では，主題的無助詞の使用される範囲が共通語や大阪方言と違っているという指摘がある（友定賢治氏による私信）。たとえば，共通語や大阪方言では話し手自身の心情を吐露するような発話では主題的無助詞で一人称の人称名詞が現れる。

(5-56) a. わたし，さみしいの。

b. わたしはさみしいの。

(5-56a)は発話時点での心情を表明する発話であり，これも一語文「さみしいの」に近い喚体的発話である。しかしこれに「は」が付いた(5-56b)は(5-56a)よりも叙述的であり，一時的属性(発話時点の心情)あるいは恒常的属性(性格，境遇の説明など)を表明するような説明・主張の発話になり，主張や開き直りの印象のある発話に聞こえる(cf. Shibatani 1990; 樋口 1998)。逆に言えば，自分の心情を説明的に語る発話には主題的無助詞は適さない。

しかし，岡山県備中地方の方言では，(5-56a)に対応する形式である(5-57)のような発話はいずれも子供が使うような表現であり，大人はむしろ「は」と融音した「わしゃー」「うち

ゃー」を使うのが自然である，というのが友定氏の指摘である。

(5-57) a.　わし，さみしい。

b.　うち，さみしい。

しかし(5-56a)および(5-57)は共通語でも大阪方言でも大人が発話してもそれほど不思議ではない（(5-57a)を女性が，(5-57b)を男性が発話すると不自然かもしれないが）。もっとも，話し手が寂寥感を聞き手に伝える形で吐露するような発話は，何がしかの「甘え」があるのは否めないが，それを差し引いた言語事実から見ても無助詞が大人の言語では不自然であるという点で，備中方言と共通語・大阪方言の間に言語態の違いがあることに気づかなければいけない。

また，友定氏によると親から子供への発話を想定した場合，次の例はいずれも不自然ではない。

(5-58) a.　お母ちゃん　さみしー。

b.　お父ちゃん　さみしー。

(5-57)との違いは何であろうか。ここでは，次の二つの要因が考えられる。第一には，これが親による子供に向けられた発話であり，また，自称を聞き手である子供から見た親族名称である「お母ちゃん」「お父ちゃん」となっている。このことから，話し手である親が，むしろ子供と同じ目線で話しかけるような発話になっているという見方ができる。つまり大人同士の会話とは違った，子供に向けた会話あるいは自ら子供になったような会話のスタイルをとっているものと思われる。大人同士の会話では，無助詞という形態がスタイルに合わず，(5-57)が不自然になることが想像できる。

第二の要因としては，主題的な名詞句「お母ちゃん」「お父ちゃん」が撥音「ん」で終わっていることから，この音韻環境によって融音規則の適用が妨げられているという考え方ができる。無助詞と音韻についての関係は共通語と大阪方言の違いにも見られる。たとえば，共通語では「目」「歯」「手」などの一モーラ語が無助詞にはなりにくく，大阪方言ではこれらが二モーラ相当の長さで発音されることから無助詞になりやすいという考え方がある。つまりフットに納められるかどうかが助詞の有無に関わっているという問題であるが，これらの無助詞形式とは，主題性の有無に関わらず，音韻論的に考察が必要であることを示唆している。金田(2007)の調査では，備中方言において，「を」相当の無助詞の出現は融音形式とほぼ同程度出現したが，主題的な無助詞の出現は，「は」との融音のものと比べると少なく，また撥音や長音のような特殊モーラのあとに現われる点で融音規則に従っ

た，音声形式を失った「は」ではないかとも考えられる。主題的無助詞については，他の方言についても調査する必要があり，無助詞であるからこそさまざまな様態が見られる可能性がある。いわゆる主題的無助詞は共通語（東京方言）や大阪方言などにおいては，一つの確立した形式であると言えるが，通方言的にはそうとはまだ結論付けられないであろう。

5.8.2　主題的無助詞とフランス語の構文

日本語の共通語・大阪方言の主題的無助詞は，たとえばフランス語ではどのように実現されるであろうか。まず，主題的であることからも，左方転移構文がこれに当たると思われる。しかし，品定め文（属性叙述）ではなかなかうまくいかないケースもある。

(5-59)　「フランス語難しいなあ」

a.　Le français est difficile.
“French is difficult.”

b.　Le français, c’est difficile.
“French, it’s difficult.”

c.　C’est difficile, le français.
“It’s difficult, French.”

(5-59a)は無標な語順であり，単に属性を知識として語る内容である。日本語で言えば「フランス語は難しい」となり，知識としての発話には現われにくい無助詞とは対応しにくい。また(5-59b)のように左方転移で現われると，今度は「フランス語」についての判断が関わってくるような読みになり，「フランス語というものは難しい」，あるいはもっと口語的には「フランス語って難しいなあ」のような，「って」のほうがふさわしい。もっとも日本語の「フランス語難しいなあ」に対応するのは(5-59c)の右方転移であろう。日本語で「フランス語難しいなあ」という場合には，たとえば大学のフランス語の試験前の勉強をしているときにぼやく様な状況があり，発話現場に「フランス語」が関わっている必要がある。その場合は日本語では半ば主題的に現われているのであるが，フランス語では左方転移にすると先ほど述べたように「フランス語」についての品定めをするような内容になり，無助詞にはそぐわない。そういった意味では話者にとっては当然既知である指示物として，右周辺に転移されるということに繋がっている。

もうひとつは，広域焦点分裂文である。主題的無助詞は始めて話題に導入する指示物に

対して現われやすいことは上で見たとおりであるが，このケースにおいてフランス語では avoir 分裂文ないし presentative cleft が現われる(Lambrecht 1981, 1994)。

(5-60) Q: Qu'est ce qui t'arrive?
"What happened to you."
何かあった？
A: J'ai une voiture qui est en panne.
"I have a car that is broken."
車故障したのよ。

Lambrecht(1994)によると，j'ai X that Y 構文の X に現われる指示物が，Prince(1981)で言う situationally evoked （状況的既出）や Inferable（推論可能）など，半活性 semiactive の状態にあるもの，たとえば話者や現場などから推論しやすいもの（自動車のような話者の所有物）であることを指摘しているが，この点では日本語の無助詞にも対応している。(5-60)のような avoir 分裂文のほか広域焦点を取る分裂文 c'est X que Y の X は，卓立があってはいけないような新規導入の指示物を提示する場合に用いられるが，この非卓立性と新規導入の二つの要件は，日本語の主題的無助詞の要件にも共通している。日本語では主題的無助詞となるものも，(5-59)のような属性叙述寄りのものと(5-60)の事象叙述では，フランス語ではまったく別の構文を取ることから，日本語の主題卓立性がそこからも認められる。

5.9 本節のまとめ

本節では，日本語の話し言葉に特有な提題形式である主題的無助詞と「って」について，その文法的特徴および談話的特徴をもとに，提示される名詞句についての認知的な態度が関わっていることを考察した。無助詞については，話者や話者のいる現場に関係づけられるような近接的な支持物について現れる形式であることから現場性がその要件であることを述べた。そして，無標な形式であらわれることから，認知的には，事物をそのまま支持することしか保障されていない。これに対し「って」は知識修正にかかわる関連付けに対して現れるものであり，無助詞とは全く違う要請によって現れる。また，日本語の主題的無助詞で表現される内容が，フランス語では事象と属性によって違う構文として現れることを確認した。このことは，主題的無助詞の事象と属性の壁を越えるような形式として，主題的に現れる点において，益岡(1987)の言うような，日本語は構造のなかに主題が組み込まれていることの妥当性を裏付ける根拠となりえる。しかし，これには別の見方もある。

現場や話者に関わる点では，事象も属性もより体験のゾーンに引き込まれる形で近似するようになり，ある面では提題の「は」，ある面では出来事文に現われる格助詞「が」「を」としての両側面を見せている。事象（出来事）と属性（状態）のぶつかり合う，あるいはそのどちらでもないニュートラルゾーンがあり，そこに現われる形式が無助詞であるという考え方も可能である。いずれにしても主題的無助詞は，日本語の構造に主題が大きく携わっていることの証拠のひとつであると言える。

第6章 「題目」（文頭詞）の拡張—接続詞・感動詞・呼びかけなど—

6.1 「題目」（文頭詞）の拡張

文頭に現われやすいとされるものには，第 2 章から第 5 章まで見てきた主題（本来の意味で用いる狭義の題目）に限らず，接続詞や「やっぱり」「幸運にも」といった文副詞も，典型的には文頭ないしその近傍に現われる。このような表現は Halliday (1994)においては機能的な見地からも主題であるとされている。

また，話し言葉においては，接続詞や文副詞に限らず，呼びかけや感動詞，前置き表現，さらにはオノマトペ類といったものが発話の最初に現われる。呼びかけについては，働きかけの対象を指定するという面から山田(1936)，Bally (1932, 1965)でも主題との関連が指摘されており，また，感動詞についても，友定(2005)は，それが発話の最初に現われ，それがひとつの会話を規定し成立させる「立ち上げ詞」と呼ぶべきものであると提案している。感動詞は主題とは異なるものの，文ないし発話の最初に現われることによって枠組みを規定し，その後に，より言語的に内容を語ると言う点では，《主題－説明》構造ないし，「は」による《二分－結合》(cf. 尾上 1979)といったものとはあながち遠いものではないだろう。このほか「失礼ですが」「ここだけの話だけど」といった前置き表現や，「ボチャーンねこ池落ちよってん」（尾上 1985, 1999）における「ボチャーン」といったオノマトペの独立用法（田守・スコウラップ 1999）が発話の最初や文頭に現われることについても，これらが主題や接続詞などとの類似性があることが予想される。

本章では，最も主題に近いと思われる呼びかけに始まり，接続詞，文副詞，感動詞，そして前置き表現，オノマトペ類について，主題との構造的・機能的類似性を挙げ，「題目」（文頭詞）として主題と同等に扱うべきものであることを主張する。そのためのテストとしては，下記の 3 章の終わりで再定義した「題目」（文頭詞）の枠組みを用いる。

(6-1) 文ないし発話の最初またその近傍に現われる句で，音声的卓立を持たず，命題に対してやや独立的なイントネーションパターンで発話される場，その句を「題目」（文頭詞）と呼ぶ。

6.2 呼びかけ

呼びかけ表現はきわめて主題に近いものである。すなわち，働きかけを行う相手に対してその相手を言語的にマークするという点で，叙述ないし言及の対象としての主題，働き

かけの対象としての呼びかけ，という位置づけが可能であると思われる。

6.2.1 主題と呼びかけ

まず，主題と呼びかけの接点について考えてみよう。呼びかけは命令・依頼や教示といった聞き手への働きかけのあるような発話と現われることが多い。

(6-2)　アキラ，行け。

(6-2)は，その場にいる「アキラ」と呼ばれている人物に対して，行くように命ずる発話である。また，呼びかけは詩的ではあるがモノに向けて「机よ」「大地よ」と呼びかけるものがある。

(6-3)　a.　机よ，そこをどけ。

b.　大地よ，なんと暖かく優しいのか。

その場合の話者の意識の中心は「机」や「大地」であり，その意味において主題であるともいえる。

主題的無助詞は，聞き手に働きかけをするような発話で現れやすいことは，尾上(1996)などでも指摘されているが，この場合の無助詞も左側に現れる呼びかけに似て，注意引きの面を持っている。

(6-4)　あの時計止まってるよ。

この発話は，もちろん「あの時計」についての言及をするという意味では主題であるといえるが，それ以前に，初めて「あの時計」に対して言及するという点に注目したい。話し手がふと時計に目をやると動いていないことに気づいた，そしてそのことを現場にいる誰かに言おうとするのであるが，そのときの聞き手の意識を「あの時計」に向けさせるという点で，呼びかけにも似ていると言える。

また，他動詞の命令文では(6-5)のように目的語が無助詞で現われることがあるが，「あの時計」は単に動詞「直す」の目的語であるが，この発話においては単にそれだけではなく，「直す」という行動の対象の指定という側面がある。

(6-5)　あの時計直して。

つまり，命令の言及範囲の指定があるという点ではむしろ主題に近い。状況によっては(6-4)の発話が「あの時計を修理しろ」ということを含意する場合を考えると，(6-5)における「あの時計」と機能的にはほとんど同じであると言える。相手への呼びかけとの違いは，聞き手目当てのものが，話し手に注意を向けさせる点である。ここには一・二人称と三人称の

断絶と，一・二人称の対称性がある。

さらに，主題と呼びかけは，たとえば二人称の呼称が無助詞で現れる場合にはどちらであるかは一見したところわからない。

(6-6)　君，なかなか強いねえ。

ここでの「君」は発話時点で聞き手が話し手の方に注意を向けていなればそれは注意を引いているため呼びかけ，向けていれば注意を引くものではないことから主題であるという考え方もできるが，話し手がどのような意図や態度でこの発話を行ったかを考えると，呼びかけと主題とをそう単純に区別することはできない。それは，(6-4)と(6-5)の「あの時計」が主題であるかどうかという問題とも関わってくる。これらに共通するものとしては，音声的な卓立を持ち得ないという点にある。後部要素に対して高いピッチで「あの時計」や「君」を発話することは不自然であり，また発話の最初に現われる点で左周辺にある「題目」（文頭詞）としてのステータスが認められる。そういった意味で，呼びかけと主題は，語用論的に同一であるかどうかの明言はここではできないが，少なくとも対象を言語で指示する点と，発話上における構造（位置およびイントネーションユニットの帰属先）としては共通しているものといえる。

6.2.2 呼びかけの位置

また，　呼びかけ表現は左側と，それ以外の場所では使われ方に大きな違いがある。

(6-7)　a.　山田君，座布団全部持って行きなさい。

b.　座布団全部持っていきなさい，山田君。

c.　座布団全部，山田君，持っていきなさい。

(6-7a)の発話頭に現れる場合は，呼びかけの対象[1]に何かの働きかけ（ここでは「座布団を持っていく」依頼）をするための，注意引きが見られるが，(6-7b)や(6-7c)のように末尾や途中に挿入的に現れる場合は，呼びかけの対象である「山田君」がすでに顕在の聞き手になっていることが前提となっている。もちろん，顕在の聞き手であるといってもそれは話し手がそう判断しているだけに過ぎず，聞き手は実際には聞いていない可能性もある。また，「座布団」は，命令・依頼の内容における行動の対象でもあり，前節で見た「あの時計」と同じく主題的であると考えれば，注意引きとして現われるような呼びかけの「山田君」

[1] 向けた相手が聞いているかどうか，応えるかどうかはこの発話の時点ではわからないことから，「聞き手」よりも「呼びかけの対象」のほうがより相応しい。

は(6-7a)のように主題あるいはそれに類するものよりも前，最も前になければならない。また，音声的な面では，右周辺に置かれた倒置の無助詞題目と，呼びかけには差が見られないことも，呼びかけが左周辺における題目（文頭語）である間接的な裏づけとして挙げられる。

(6-8) a. また子供が生まれたらしいよ，山田君。（主題的無助詞）

b. 木久扇さん座布団の全部持っていきなさい，山田君。（呼びかけ）

ギリシャ語には格の曲用として呼格が存在する。呼格が主格と区別されるのは単数形の男性名詞と一部の女性名詞に限られる。たとえば filos「友達（男）」は file という呼格形を持っているが，単に「友よ」と呼びかける場合だけに使われるのではなく，むしろ日本語で言えば「なあ」に相当するものであるといえる。多くの場合は mu ”my”を伴う。

(6-9) File mu, ela mazi mu.

Friend.Voc my come.Imper with me

“Friend, come with me.”

なあ，こっち来いよ。

左周辺にある呼格は，呼びかけとして名前を出す場合もあるが，一般名詞+ mu として現われると，むしろ，文法化して呼びかけというよりも聞き手の注目を誘うだけの働きしかなくなっていると思われる。また，呼格が右周辺に現われると，注目を誘う働きも失い，せいぜい対人的モダリティのみを担うような成分になっている。

(6-10) Endaksi, file?

“O.K., friend?”

もういいか？

左周辺では，聞き手の注目を誘うという点で聞き手を指定する側面があり，その意味では主題などにも近くなっていく。しかし右周辺ではもはやそのような力もなく，日本語でいうところの間投助詞や終助詞（文末詞，cf. 藤原 1990）のように，話者の気持ちや態度の言語的反映であろう。それは終助詞の「わ」（あるいは「わい」「ばい」）が一人称代名詞に由来しているというという点で十分に考えられることであり，呼びかけ以外のものでも右周辺が認識ないし対人的モダリティの担い手となって文末詞的になるのではないか。

6.3 接続詞

接続詞を「題目」（文頭詞）に位置づけることとはどういうことであろうか。接続詞や

副詞が主題に連続しているものであることは，(6-11)～(6-15)のような「それは」あるいは融音化した「そりゃ」からも観察できる。

(6-11)　それは彼の本心じゃなかったんだよ。

(6-12)　それは残念だったね。

(6-13)　そりゃ，ワイはアホや。　（都はるみ・岡千秋『浪花恋しぐれ』）

(6-14)　それはそれは，大変美しいお姫様でした。

(6-15)　それはともかく，ホノルルで三泊。久しぶりにゴルフをして夜はフレンチとイタリアンとステーキ。そしてアルコール。

（「渡辺淳一オフィシャルブログ」http://watanabe-junichi.net　2006 年 2 月 22 日の記事より）

(6-11)の「それは」は先行文脈に現れた「彼」の行動・言動を指した主題成分であるが，(6-13)の「そりゃ」はもはや主題としてではなく，「ワイはアホや」という発話に対するモダリティ修飾を行う文法化した副詞的なものとして働いているように解釈できる。また(6-14)では「それは」が繰り返されて現れていることからも，ほぼ副詞であるといってよい。(6-12)は(6-11)の主題的とも言えるもの，(6-13)のような副詞的なものの中間段階のようなもので，先行文脈に現れる聞き手に起こった残念な事象を指して主題化しているようにも，「残念だった」という発話に対するモダリティ修飾のようにも見える。(6-15)の「それはともかく」も全体で接続詞的にはたらく，文法化した表現として現れているものの，先行する内容を「それ」で照応する主題としての「それは」の役割も完全に失っているものではない。これらのことから，主題と発話頭の接続詞・副詞などとは連続しているという見方が出来る。ただ，(6-11)～(6-15)で見たことは指示詞である「それ」の特殊性に裏打ちされているからだという意見もあるが，逆に，主題も先行の発話に現れる指示物を受け継いで談話を展開するものとして見れば，接続詞的であるとも考えられる。以上から鑑みても，特に談話において主題と接続詞・感動詞などとを区別せずに発話の最初に現れる要素としてひとくくりに考えることは，それほど妥当性に欠ける考え方ではない。

6.3.1　文末以外の接続詞

日本語の接続詞は，基本的には文および発話の始めに現れる。接続詞は前の発話あるいは節に対する，論理的または心理的な関係付けを行うものであることから，節の始めに現れることが当然のように思われる。

しかし実際には，例えば英語の”however”や”though”，フランス語の”donc”（だから）や”cependant”（ところが）のように，節の始めに現れるだけでなく文中や文末に現れることがある。しかし，日本語でも節の途中に接続詞が現れることは案外珍しいことではない。

(6-16) a. でも，ジュネちゃんは明日忙しいでしょ？

b. ジュネちゃんはでも明日忙しいでしょ？

(6-17) a. だから，私って，よく風邪引くでしょ，で，いつも薬飲んでるの。

b. 私って，だから，よく風邪引くでしょ，で，いつも薬飲んでるの。

(6-16a)・(6-17a)はいずれも，文頭に接続詞が現われているものであり，この前の談話を受けての譲歩や推論の過程を導き出すような発話になっていることがすぐに理解される。このような接続詞は(6-16b)・(6-17b)のように文頭以外にも現われることがある。これらはいずれもこれらは話し言葉によく見られる現象ではある。(6-16b)は(6-16a)と比較してもそれほど大きな違いを見出せず，主題の名詞句「ジュネちゃんは」に後に「でも」が現われても，接続詞としての「でも」の職能を果たしているといえるが，(6-17b)は(6-17a)のように何らかの推論の帰結として述べているというよりは，話者の態度が言語に反映されたモダリティ修飾詞として「だから」が現われているような印象がある。そういった意味で，接続詞と分類されるものが常に文と文，節と節を接続する機能を有しているかは疑問視できる。なお，「だから」の用法の違いはメイナード(2004)でも指摘されており，この問題については後ほど取り上げることにする。

書き言葉的であるはずのスピーチにも，文や節の始め以外の場所に接続詞が現れることがある。

(6-18) 新しく就任した大臣はみんなそう言うだろうなんて思うかもしれませんが，私はしかし，科学技術こそはこれから日本が生きていく一番の要諦だと思う者の１人ですので，ちょうどいい立場をいただきました。

（2005 年 10 月 31 日，松田岩夫内閣府特命担当大臣記者会見要旨より http://www5.cao.go.jp/minister/matsuda/2005/1031kaiken.html）

確かにこれは，(6-16b)・(6-17b)のような話し言葉的な接続詞の用法が，書き言葉的領域である政府のスピーチにも侵食したものとして捉えることが出来るのかもしれない。しかしよく見てみると，「私はしかし」の前に接続助詞「が」で終わる譲歩の節が現れている。そうなると，「が」で十分な逆接を果たしている点で，ここでの「しかし」が接続詞としては

冗長であるとも言える[2]。したがって「しかし」自体が本当に，いわゆる逆接の接続詞として機能するものであるということも疑わしくなる。

さらに，「しかし」は，発話末にも現れることを考えると，これが本来的に接続詞としての職能を果たしておらず，むしろ副詞のような印象がある。

(6-19)　暑いなあ，しかし。

(6-20)　怒るで，しかし。

これらの「しかし」は接続詞であるというよりも，むしろ(6-19)では命題「(気候が) 寒い」に対するモダリティ，(6-20)では，怒りたくなるような気持ちの表出の発言「怒るで」に伴う態度に結びつくモダリティの表れとして考えることができる。

6.3.2 文連結性向の低い接続詞

(6-19)・(6-20)のような接続詞とはいえないような「しかし」は文末だけではなく，先行する文脈が特になく，逆接として機能が希薄になっているようなものもある。

(6-21)　しかし，暑いなあ。

(6-21)は，もし 10 月半ばや，夏でも夜にこれが発話されたとすると「もう 10 月／夜になったにもかかわらずまだ暑いなあ」という意味から，強いて言えば気候そのものを文脈とする逆接の接続詞としての解釈も可能であろう。しかし，8 月の夏真っ盛りの真昼にもこの発話が見られることを考えると，これはむしろ述語「暑い」または発話「暑いなあ」そのものを修飾しようとする副詞相当の働きをしているようにも見え，また，「しかし」自体が逆接の機能を有している必然性があるとは言えない。だからといって，逆接の接続詞「しかし[1]」と，モダリティの「しかし[2]」というように用法として全く別のものであるとするのも考えものである。

加藤(2001)は，「しかし」のこのような用法の違いに対して，「《前件を受容》したうえで，《後件を追加提示》する」(2001:77)という基本機能を認めている。そして，多くの場合，前件と後件の対比となり逆接の接続表現や話題転換の談話標識として現われ，(6-21)のよう

---

[2] 「が，しかし」という逆接が連続する形式もよく見られ，二語で一語のように(hendyadis)成っていると思われる。同様のことはフランス語の mais cependant, mais au contraire やギリシャ語の alla omos にも見られる。このような表現について Meillet (1982)は，現代フランス語の対比を表す接続詞 mais は意味が弱くなっているからと述べているが，その意味では，接続詞としての力を奪われ，発話におけるモダリティに関わる「しかし」にも共通するものと思われる。

に前件が談話上に存在しない場合には,「わかりきったことだが，それでも言うぞ」といったニュアンスが含まれる，と説明している。

「しかし」の接続詞的用法と非接続詞的用法について，加藤(2001)の考え方は「しかし」を機能の観点から捉えたものであるが，発話における話者の態度の反映と言った観点からも見ることができる。(6-20)・(6-21)の非接続詞的な「しかし」は，次のようにたとえば「ほんと（に)」「ほんま（に)」といった副詞に置き換えてもほぼ近い意味を持っている。

(6-22)　ほんと，暑いなあ。

(6-23)　怒るで，ほんまに。

このことから考えると,「しかし」の本質は，話者の本心，本音を表出しようとする態度ないしその行動に結びついていると言えないだろうか。そうすれば，接続詞的な逆接の「しかし」も,「確かにそうかもしれないが，（私としては）〇〇だと思う」という，ある種の本音の提示としての譲歩・反論の発話行動に現われているのではないかと考えることができる。発話現場に依存する感情や態度がダイレクトに表れる話し言葉に対して，これらがない書き言葉では，テクストの連続における先行内容への対命題モダリティあるいは何らかの認知的態度―疑念と反論，自説の優越性の主張など―が文連結において逆接として実現されているだけではないだろうか。そういった意味で,「しかし」自体はむしろ「本当に」や「まさに」などの陳述の副詞に類するものであり（cf. 石神 1979)，本来的には副詞として，派生用法としての接続詞があると見るべきである。前の内容と話題上の連続がある場合に逆接の接続として働いているように見えることから，書き言葉の文法では「しかし」が接続詞として分類されていて，話し言葉を視野に入れればむしろ副詞であるという結論に繋がる。

6.3.3 接続詞と「題目」（文頭詞）

「しかし」が文頭に現われればそれは接続詞として考えられることは多いが，命題の外側にあるメタ認知的な標識であることから，左周辺のものであると考えられる。また，Halliday(1994)における接続詞を主題として認める考え方は,「は」などによる話題の受け取りと引継ぎを考えると，接続詞と主題との距離は非常に近いものでもある点でも有用である。また，(6-19)「暑いなあ，しかし」のような文末に現われる接続詞は，右周辺にあるものと考えられる。このような位置では「*暑いなあ，**しかし**」のように，命題を含む「暑いなあ」に対して「しかし」にイントネーション上での卓立を置いて，相対的に強くする

ことは不自然である。したがって，左周辺においても，接続詞的な「しかし」と，(6-16)「しかし，暑いなあ」に代表される非接続詞的な「しかし」にも，イントネーション上の違いが見られることが予想される。直後の要素よりも高いピッチで発音できるならば，位置としては前置焦点のものであると考えられ，そうでなければ，ピッチレンジのリセットを伴うことからイントネーションユニットの境界があり，主題や場所・時間表現などと同一の「題目」（文頭詞）のステータスにあると言えよう。まず，「しかし」の接続詞的用法の例を見てみよう。

(6-24)　（太郎が煮えたぎる液体に手を突っ込んだ。）しかし熱くなかった。

(6-24)は発話としては書き言葉的である語り口調ではあるが，「しかし」の後でポーズを置いたり，「熱くなかった」のピッチレンジを相対的に高く読んだりすることによって，別々のイントネーションユニットに所属されるようにすれば，左周辺としての「題目」（文頭詞）の位置にあると言える。しかし，「しかし」を「熱くなかった」と連続させて，一つのイントネーションユニットとして「しかし」を高く発音すれば，この場合の「しかし」は命題を中心とする発話の核の内部に取り込まれたもの，もしくは「しかし」を前置焦点とする核を構成していると言える。どちらのパターンが一般的であるかといえば，「しかし」を相対的に低く発音した「題目」（文頭詞）的なものであろう。「しかし」の後には，(6-24)がそうであるように，「しかし，その液体は熱くなかった」のような主題が顕在または陰在する品定め文（属性叙述）が現われやすいことからも，左周辺に置かれる主題よりも前にある点で「題目」（文頭詞）でなければならないはずである。また，次のように主題のあとに現れた場合を考えても，「しかし」を「熱くなかった」よりも高く発音するのは不自然であり，主題の「液体は」に連続して同一のイントネーションに含まれるか，「しかし」自体で独立したイントネーションユニットが構成されている必要がある。

(6-25)　a.　液体はしかし｜熱くなかった。

b.　液体は｜しかし｜熱くなかった。

c.　?液体は｜しかし熱くなかった。

（縦線はイントネーションユニットの境界を表す）

以上のことから，主題の「液体は」と同じ逆接としての「しかし」が「題目」（文頭詞）に含まれることが確認できる。

では，逆接ではない非接続詞的な「しかし」はどうであろうか。

(6-26)　しかし暑いなあ。

このケースでの「しかし」は，先行発話を受けるのではなく，副詞的なものであることは前節でも見たとおりであるが，このような「しかし」は息んだりするような特別な声質 voice quality で発音せずに通常の modal 発音で発話することを想定した場合，命題を含む核となる「暑いなあ」に対して相対的に高く「しかし」を発音するのは，独り言として気候が暑いことをぼやくような発話である。このケースにおける「しかし」は，むしろ，「ほんとに」「ほんま」にも似た，「暑い」を修飾するような副詞であるといえる。一方で，「しかし」を「暑い」よりも高く発音すると，「暑い」を修飾しているというよりは，「それにしても」といった話題転換の談話標識としての用法であると言える。つまり，独り言のケースのように前置焦点として後続の内容と同一のイントネーションユニットに含まれる場合は，述語を修飾する副詞もしくは対命題モダリティに関わる陳述の副詞でなければならない。逆に，話題転換の「しかし」は，対命題モダリティというよりも，発話そのもののに関係する談話標識であり，この場合，命題を含んだ「暑いなあ」に対して同一のイントネーションユニットに置かれず，両者の間でピッチレンジのリセットが行われる。つまり，この場合は左周辺におかれた「題目」（文頭詞）であると言える。以上見てきたことを「しかし」の用法別にまとめると次のようになる。

(6-27)
- 逆接の「しかし」（接続詞）　…左周辺の「題目」（文頭詞）
- 話題転換の「しかし」（談話標識）…左周辺の「題目」（文頭詞）
- 述語を修飾する「しかし」（副詞）…前置焦点

このうち，焦点にならない場合の，接続詞用法と談話標識用法のものは，述語を修飾するというよりは文ないし発話全体に懸かる点で共通している。また，右周辺に現われた「しかし」もまた，独り言としてぼやくような発話よりも，相手のいる場合のほうがより自然である。このことは，逆接としての接続詞として働かないこと，焦点になりえないため副詞用法にはならないことから，話題転換の解釈以外を認めにくいこととも対応している。このように，焦点にならず左右の周辺部に置かれる「しかし」は，語彙的意味を持たないものとして，むしろ発話全体に対する「色づけ」を行う。接続詞用法も，結局は左周辺に置かれて初めて接続詞としてのステータスを確保しているに過ぎない。

これまで，「しかし」の用法の違いが文や発話における位置や卓立強調の可否に関わっていることを見たが，同じことは「だから」についても言える。「だから」は前述の内容を受けての帰結を導くような発話（文）に現れるが，これとは別の，主張や聞き手への働きかけなどの「だから」の用法が指摘されている(cf. メイナード 2004)。

(6-28)　a.　だからナマコが健康にいいんです。

b.　だからやめろと言ったのに。

c.　だから「ナマコ」って言ってるじゃないか。

(6-28a)は帰結を導く「だから」であり，(6-28b)・(6-28c)は話者の主張や訴え，聞き手への働きかけを表しているものである。(6-28b)は，「ほらみろ，言わんこっちゃない」といった相手の誤りを非難し戒告するような発話に現われ，(6-28c)は「ちゃんと聞けよ」「何度も言わせるな」という態度が背後にあることが読み取られる。これらの用法上の違いは，「しかし」の接続詞用法と談話標識用法の違いにも平行的であると思われる。イントネーションについて考えると，「だから」は焦点的な卓立をおいて発話されることもあるが，主題のように卓立を置かずに発話することもできる。卓立を置いて次と連続し同一のイントネーションユニットに含まれる場合は(6-28a)・(6-28b)は自然であるが，(6-28c)は不自然である。逆に卓立を置かずに，後部要素と別々のイントネーションユニットとして発話した場合，(6-28c)が最も自然であり，(6-28a)や(6-28b)は若干不自然である。つまり，焦点になる「だから」は帰結用法か戒告の発話に現われ，主題と同じような左周辺の「題目」（文頭詞）の位置にあるものは「ちゃんと聞いてよ」といった態度に結びつく談話標識として，発話全体に懸かっていると言える。(6-28b)の「だから」も談話標識であると言えるが，相手（または対象）の失敗という結果を踏まえての発話であることを考えると，(6-28a)の帰結の接続詞用法から派生したものであることが想像される。(6-28c)の「ちゃんと聞いてよ」の「だから」は帰結を導こうとするものではなく，(6-28b)の戒告の「だから」にも見られるような発話態度の言語チャンネルへの漏れという面だけを残している。

また右周辺は，左周辺の「題目」（文頭詞）と同様に，音声上の卓立（高ピッチ，直前のポーズ）が現われにくいことを考えると，右周辺に置かれた「だから」は接続詞としての力を失い，(6-28c)と同様に，むしろ談話標識の極へ引き寄せられる。(6-29a)は(6-28a)において見られる帰結の接続詞としてのステータスはほとんどなく，むしろ(6-28c)に見られる，「何度も言わせるな」といった発話態度が滲み出たような談話標識としての側面が色濃く現われている。

(6-29)　a.　#ナマコが健康にいいんです，だから。

b.　??やめろと言ったのに，だから。

c.　「ナマコ」って言ってるじゃないか，だから。

また，(6-29b)のように戒告の「だから」が右周辺に置かれたものは，このケースでは発話

として不自然であり，述語を修飾する「しかし」と同様に前置焦点でなければならないことがわかる。卓立が置かれるものは決して右周辺すなわち述語より後には来ることができないという情報構造に根ざした言語構造を使って，これらの表現の特徴を捉えることができる。

6.3.4 文法カテゴリとしての接続詞の再検討

しかし，接続詞としての用法を見た場合，逆接の「しかし」は「題目」（文頭詞）として非卓立的な左周辺にあるのに対し，帰結を導く「だから」は卓立のある前置焦点になっている。このような違いを生んでいるものは「だから」自体の役割にある。談話の展開を考えれば，「だから」の後に現れる帰結の内容は，すでに問題になっている旧情報であり，それに対して前の発話で述べたい内容を原因・理由として，その旧情報である帰結に結びつけるものが「だから」である。「だから」は，西日本の諸方言の「せやさかい」「そやけん」に対応し，ソ系の代用形式をもともと伴った「そうだから」が変化したものである。「そう」を失っても「だから」自体で前の内容を受けることができ，起点を表す格助詞から派生した理由を表す接続助詞「から」が，付加語 adjunct として述語を修飾するという二つの要素を持っている。また「だから」が現われる背景には理由を尋ねる課題があり，これが前提にならなければならない。そして，「だから」の直前に述べた内容が前提に対する焦点となっているのであり，これ全体をソ系の代用表現を兼ねた「だから」で受けて，「だから」自体が帰結文の述語に対して，いわばカラ格で現われる焦点となっていると考えられる。そういう事情から，接続詞としての「だから」は，それが使用される背景上，焦点になることが内在の特徴である。(6-28b)の訓告の「だから」も相手の失敗に関連付けて焦点としていると言える。

上で見てきた接続詞としての「だから」と「しかし」の現われる構造の違いは，接続詞というカテゴリが談話の連続を基盤として，文や発話の最初に現われるという点で特徴付けられているに過ぎないことを示している。また，話題転換の「しかし」や「さて」「ところで」といったものも接続詞として扱われているが，少なくとも話し言葉においてこれら自体が話題転換を行う機能を持っているとは考えにくく，むしろ話し手の発話時の態度―「なんとなく思うんだけど」，「考えを変えて」，「突然思い出したんだけど」―に対応した表現である。もちろん，接続詞には文間・発話間の論理的関係に言及するものもある。先ほど見た帰結の「だから」が，前の内容を照応しつつ命題を構成する要素となっている点

を考えると，むしろ関係代名詞のようにも考えられ，格助詞と同様に文や発話の論理的関係付けを行う。しかし，「だから」の談話標識としての用法があることを考えると，「だから」自体が論理的関係付けを行うために存在しているは言えない。むしろ，帰結を述べようとする行動と「だから」が関わっているという見方も必要になってくるのではないか。佐久間(2002)では，接続詞と代名詞について「接続詞が送り手の主題的な情報伝達のあり方を決定するのに対して，指示詞は情報伝達の実質的な内容を表現する」（2002:189）と述べているが，帰結の「だから」のような関係代名詞的なものはその両方を持つものとして位置づけられる。

現代日本語では接続詞はむしろどのような文体や場面で使用されるかが問題であるという田中(1984)の考え方を踏襲すれば，話し言葉における接続詞は，単に事柄の関係を述べるものであるというより，場面のあらゆる局面で変化する話者の態度や発話の意図，相手との位相あるいは親疎，さらには親密さ（馴れ馴れしさ）とよそよそしさの表出の意図にも関わってくるもの考えられる。むしろ話者の態度・意図が大きく関わるような表現として，カテゴリを越えた考え方が必要なのではないだろうか。

6.3.5 「題目」（文頭詞）としての接続詞の通言語的価値

「しかし」が逆接や譲歩を表し，文頭や右周辺に現われることは，英語の though にも共通している。これが節の最初に現われれば接続詞として，文末に独立的に現われれば副詞として分類されうるが，though は発話内容に対する態度の反映としての副詞が基本にあり，これが節の最初に現われることで従位接続詞らしくなっていると考えられる。そのことは，共通の語源であるドイツ語の doch が様々な用法を持つ点にも関係している。たとえば，節の最初に現われれば though と同じく譲歩の接続詞として，節の途中や最後に現われれば「でも」「にもかかわらず」といった意味をもつ副詞（接続副詞）として働く。これらの違いは文頭であるかどうかの違いであり，強勢をもって発音されるが，文中に現われる挿入的な非強勢の doch は心態詞 modalpartikel と呼ばれ，（cf. Weydt 1969）語彙的な意味を表す「詞」というよりは，話者の様々な態度や発話意図を反映する「辞」的なものである。非強勢の「辞」的なものという点では，日本語の「しかし」の談話標識用法にも（使用される状況は全く違うものの）共通する特徴を持っていると思われる。Doch には，否定疑問に対する「いいえ」（フランス語の si に当たる）といった応答詞としての用法もあり，その意味では doch の基本は，「しかし」と同じく話者の態度や発話意図が言語に反映したも

のであり，それが独立的に現われると，否定疑問に対して，否定の否定，即ち《むしろ肯定的である》ことの意思表示を行う応答詞として，文頭に現われると前の内容との対比関係を積極的に示す接続詞として，挿入的に現われると話者の態度が言語に漏れた心態詞といった用法に分類されている。このうち心態詞の doch については藤原(1990)が日本語の文末詞相当のものであることを触れているが，その意味では，一般に接続詞と分類されているものが周辺的に現われると，話者の微妙な態度の違いを醸し出すような表現になるという点で，接続詞らしくないものを，挿入句や右周辺では文末詞，左周辺ではその逆とも言える「立ち上げ詞」として感動詞や副詞などと同一に扱おうとする考え方は通言語的に特殊なものではないと言える。

6.4 文副詞

「幸運にも」「残念なことに」といった表現は文頭に現われやすい。このような文副詞は，出来事や体験を表す文全体に対して，話者の主観的評価をコーティングするような形で述べる形式であると言える。文副詞は，直後にコンマポーズが置かれることが多く，「題目」（文頭詞）の特徴である左周辺，非卓立，およびイントネーション上の独立の三つの要件を満たすものと考えられる（ただし，音声的卓立が置かれることもありうる）。

文副詞は，同じ表現を使って話者の主観的評価を品定め文の述語に置いたものと対応させることができる。

(6-30) a. うれしいことに，ポケットに 500 円玉が入っていた。

b. ポケットに 500 円玉が入っていたのはうれしい。

しかし，これらは文および発話としては全く違っている。文副詞を使った(6-30a)は，出来事「ポケットに 500 円玉が入っているのを見つけた」ことを前景 foreground にした出来事文を基本にしている。この文は，たとえばポケットをまさぐって何かを見つけ，そしてが 500 円玉だった場合に発せられるような「お，ポケットに 500 円玉入ってた」に対応させて，再現して描写する発話である。感動詞「お」が表すそのときのちょっとした感動（モノを発見したことと，それがお金であったことから来るうれしさ）は，「うれしいことに」に担わせて再体験されていると考えられる。これに対して，(6-30b)は出来事の感想を述べるような発話であり，文型としても出来事文が埋め込まれて主題になった品定め文の形を取っている。また，次のように出来事文と品定め文を節や文レベルで分けたものも，(6-30a)のような感動を出来事に結び付けた発話というよりは，「うれしい」気持ちになった理由と

「うれしい」気持ちであることの因果関係に則っていることからもやはり(6-30b)のように感想を述べるような発話になってしまっている。

(6-31)　a.　ポケットに 500 円玉が入っていて，うれしい。

b.　ポケットに 500 円玉が入っていた。うれしい。

ある感情を得る理由となる出来事と，その感情を述べる場合，感情を後で述べることは，因果律に従う点で（感情である点で主観的ではあるものの）分析的かつ反省的で，客観的な描写になりやすい。これに対して，(6-30a)のような文副詞を使ったものは，感動詞を使った「お，ポケットに 500 円玉入ってた」において出来事と感動の因果を逆順にすることによってかえって生じる，二つの事態の一体感を残すようにして再現された文（発話）であり，そのときの気持ちを表現しようとしている文型である。

もちろん出来事の再現でなくても，文副詞は，後の要素で事態を述べることを基本として，それに対する評価の枠組みを与えておくことで，(6-32b)のように客観的な評価というよりも，話者の主観が見えることで情的に訴えようとする表現方法であるとも言える。

(6-32)　a.　悲しいことに，汚職事件が後を絶ちません。

b.　汚職事件が後を絶たないのは悲しいことです。

文副詞には，前置焦点として卓立的に発音されず，直後でポーズやピッチレンジのリセットが行われる点で左周辺の「題目」（文頭詞）として位置づけられる。このことは，しばしば「更に悲しいことには」のように，述語に係らず主題を表していないのに「は」が現われることがある。そういった意味でも主題には近いことがわかる。

(6-33)　a.　さらに悲しいことには，世の中には悪い人がいます。

また，文副詞は右周辺にも現われることからも，これが発話において卓立的ならずに左周辺では「題目」（文頭詞）の一つであることを確認できるが，右周辺のものは(6-32b)のように動機とその結果の気持ちといった因果の順になることから，(6-33b)は(6-31)にも似て，財布に宝くじが入っていたこととそれに驚いたという感想を淡々と述べるような印象があり，いくらか客観的でもある。

(6-34)　a.　驚いたことに，財布に宝くじが入っててん。

b.　財布に宝くじが入っててん，驚いたことに。

その意味では左焦点に現われる(6-33a)は，因果関係に逆らう形で，カジュアルな会話としては作為のあるようにも見えるが，文・発話全体に係って感情に基づいた枠付けを行う表現として，その分，驚きの臨場感を引き立てようとする表現効果を生んでいる。

6.5 感動詞

感動詞は，接続詞や文副詞に比べて意図的な表現であるというよりは，反射的，非意図的に発せられるように思われる。感動詞は独立的に表れるとされるが，同時に文を従える場合もある。その場合の語順はどうなっているのであろうか。ここでは，発見や驚きのような瞬間的な反応のものの代表としての「あっ」と，感心・呆れ・嫌悪のように持続性のある心の動きに対応する「うわー」「へー」，応答詞の「はい」「いいえ」を中心に見ていく。

6.5.1 感動詞の位置

例えば発見したときに発せられるような「あっ」は，発話の最初になければかなり異常な発話に聞こえる。

(6-35) a. あっ，こんなとこにあった。

b. ??こんなとこに　あっ，あった。

c. ??こんなとこにあった，あっ。

発見の「あっ」は，話し手が環境に対して受け手となる場合の感動詞であり，(6-35a)のように最も前に現れるのが当たり前といえば当たり前である。逆に，発見したという内容を言語的に表した後に「あっ」と言う(6-35c)は，その場合の発見とは別の発見―たとえば，見つけた財布を見ると中身が抜き取られていることが分かった―であるならば問題ないが，同一の発見のセッションとして「あっ」と言うことは到底考えられない。(6-35b)のように途中に現われる「あっ」も非常に奇妙である。このことは，「あっ」や「おー」，「えー」が，話し手が受け手となって環境におけるある変化を受容したような，瞬間的な事態に根付いている点で，判断に基づいて発話される説明的な内容よりも前に発せられなければ不自然であると言える。

しかし，感心の「へー」やぞくぞくするような気持ち悪い感覚にともなう「うわー」「うえー」のようにある程度の期間持続するような感動がある場合には，発話の終わりに現われることもないとは言えない。

(6-36) a. へー，すごいんだ。

b. すごいんだ，へー。

(6-37) a. うわー，こりゃひどいなあ。

b. こりゃひどいなあ，うわー。

(6-36b)・(6-37b)の発話末に現われた感動詞は，これらが前の内容に対して同一の感動セ

ッションにあることを想定した場合,聞き手ないし外部に対する反応としてよりはむしろ,感想として「感心する」「気持ち悪い」に変わるものとしての表現になっているのではないだろうか。その意味では，真に感動詞であるとは言えず,《「へえ」ものだ》《「うわー」だ》のように言えるような形容詞相当のものになっていると言える。逆に言えば，発話の最初に表れる感動詞は，前節で見た文副詞と同じく，気持ちや態度による発話の枠組みを作っていると考えられる（cf. 友定 2005）が，感動詞自体でも発話が成立する点では，単に枠組みを作るだけのものではない点で文副詞とは異なっている。

音声的に見ると，感動詞を伴う発話を特別な声質で発話しないことを想定した場合，感動詞の部分を他の部分に対して高いピッチで発話することは不自然である。位置としては左周辺，ときに右周辺であり，先ほど見た，感動詞の発話における特徴を考えても，左周辺にある感動詞は，談話標識的な「しかし」や「だって」（6.3 節参照）や文副詞にも共通して「題目」（文頭詞）であると言える。

6.5.2 応答詞と立ち上げ詞

しばしば感動詞として分類される応答の「はい」も(6-38a)のように発話の最初に現われるのが典型的である。しかし，(6-38b)のように発話末に現れる「はい」もしばしば観察される。

(6-38) —すいません，Wii ありますか。

a. はい，こちらです。

b. 申し訳ありませんが売切れとなってしまいました，はい。

(6-38)は客と店員の会話を想定したものであるが，(6-38a)は典型的な応答の用法である。しかし(6-38b)は末尾に軽く添えるように発話されるもので，聞き手にとって不利益な事態がある場合のヘッジ表現として丁寧さ・誠心誠意さが表れている。また，二種類の「はい」は同じようで全く異なっているのは， (6-38)の「はい」の位置をそれぞれ逆にした例(6-39)から見てもはっきりしている。

(6-39) —すいません，Wii ありますか。

a. #こちらです，はい。

b. #はい，申し訳ありませんが売切れとなってしまいました[3]。

[3] 電話での応対であれば不自然ではないが，対面での応対としては不自然な印象がある。

(6-39b)のように，Wii はまだ残っているかという質問に対して，「いいえ」と言うところを「はい」と答えることから来る違和感が拭えない。また，(6-39a)のような場合は，尋ねてきた聞き手（客）にとって不利益になるようなケースではないことからなのか，慇懃無礼なのか，かえって客に対して失礼になる点で不適切である。これらから考えると，左周辺の「はい」は肯定的な応答であり，その意味で，前節で見た対事態的感動詞「あっ」「へー」と同じく，聞き手の質問ないし意図に対して肯定的な発話の枠組みを設定している。しかし，末に置かれた右周辺の「はい」は，肯定的な発話を形作るのではなく，丁寧さの表出といった対人モダリティに関わり，右周辺に置かれた「しかし」や「だから」のような談話標識として，あるいは終助詞などにも共通するものとなっている。

「はい」に対する否定の「いいえ」「いや」といった感動詞は，発話の最初に良く現れるが，右周辺に現われることは考えにくい。

(6-40) ―Wii はそちらで取り扱っていますか。

a. いいえ，うちでは取り扱ってないんですよ。

b. *うちでは取り扱ってないんですよ，いいえ。

応答としての「いいえ」が発話の最初以外に表れることは考えにくい。また「いいえ」「いや」などは，Yes/No 疑問文に対する答え以外にも頻繁に発話の最初に現われ，接続詞や文副詞などにも近い。その場合でも文頭以外に現われることは考えにくい。

(6-41) ―どうもありがとうございます。

a. いいえ，どういたしまして。

b. ??どういたしまして，いいえ。

(6-42) a. いやー，照れるなあ。

b. ??照れるなあ，いやー。

(6-43) ―お出かけですか。

a. いや，ちょっとそこまで。

b. ちょっと，いや，そこまで。

c. ??ちょっとそこまで，いや。

(6-43b)のように，数量詞ではない「ちょっと」は「いや」よりも前にあっても不自然ではないように思われる。この「ちょっと」も話題転換の「しかし」や「ちゃんと聞いてよ」の「だから」のような談話標識にも似ており，この場合は話者の態度の反映（Hayashi 2006

の Type-C: Modalité）である[4]。そういった意味では「ちょっと」も「いや」と同じようなステータスにあり，また「いや」が「ちょっと」よりも後に現われることを考えると，もはや「いや」は否定的応答としてのものではないことが分かる。

このような，応答以外の発話の最初に現われる「いいえ」や「あ，おはようございます」の「あ」のような感動詞（そして，(6-43)の「ちょっと」など）は，友定(2005)が「立ち上げ詞」と呼んでいる典型的なものである。「立ち上げ詞」は藤原(1990)の言う文末詞に対して，文頭に現われるものとして位置づけられるが，同じく発話全体にかかり，話者の態度や対人配慮・待遇といったモダリティに関わっている点で，それぞれ述語を中心とする命題よりも周辺にあるものと考えられる。そういった意味では，感動詞についてもHalliday(1994)のいう談話のスタートポイントとしての「題目」（文頭詞）という枠組みの中で考えられることは，感動詞が話し手の内部事情を大きく言語化したものであることに根ざしていることから，認知活動についての手がかりとしても非常に有用である。

6.5.3 してみせる感動詞

感動詞が「題目」（文頭詞）として発話の最初に表れることは，発話の枠組みを作ることに他ならないことは上で述べてきたとおりであるが，逆に考えるとある発話の枠組みを作り出す場合に感動詞を用いることも可能である。たとえば人の目を逸らそうとして虚偽の発見を発話の場に作り出すという行動に，聞き手の前で「あっ」と発話することがある。

(6-44) a. あっ。

b. あっ，UFO だ。

c. あっ，あれはなんだ？

これは，感動詞「あっ」が発見の感動を表しているのではなく，発見するという行動に結びついている（定延 2005b, c）ことから，「あっ」によって聞き手は話し手が何かを発見したという解釈の手がかりを―この場合は結果欺かれるのだが―得る。

同様のことは「あの」や「えー（と）」フィラーについても言える。フィラーは単語の探索や計算，適切な表現の選択などによって，発話が途切れる場合に埋め合わせるものとして考えられてきたが，これらは自然に現われるだけでなく，たとえば逆に丁寧さを示そう

[4] Hayashi(2006)では，相手への教示の発話「ちょっと電話鳴ってるよ」や呼び止める場合の単独で現れる「ちょっと」は，Type-D: hors de phrase（文外）として分類されているが，これは働きかけなどの対人モダリティに対応しているとも考えられる。

とするような場合にも積極的に使われる。

(6-45)　—2 の 16 乗は？

a.　65,536。

b.　えーと，65,536。

(6-46)　—すいません，Wii まだありますか。

a.　売り切れました。

b.　あのー，売り切れました。

(6-45)の問いはコンピュータの専門家のように 2 のべき乗を暗記していて即答することを想定したものであるが，(6-45a)のようにいきなり答えるのではなく(6-45b)のように「えーと」をわざと言うことで，計算したり思い出したりしているという行動を含んだ発話であることを作り出している。(6-46b)は，(6-46a)のように答えると聞き手（客）を切り捨てるような印象をあたえることから，「あのー」と言うことで丁寧さ，誠意のある発話として相手に見せているが，これも単語の検索を行うという行動，あるいは一層のこと，丁寧さを表出する行動であることを醸し出していると言える。

このような発話，さらには行動の枠組み作りとしての感動詞は左周辺に限られるが，ある行動に伴って感動詞が現われるという非意図的なものも，意図的に行動の枠組みを作り出すものも，声質が不完全であるなどの演技面での違いはあっても，言語表現上の構造的な違いはないといえる。

6.5.4　感動詞の対照—ギリシャ語 po po と re を例に—

感動詞の節の最後として，ギリシャ語の間投詞について少し触れておきたい。ギリシャ語で頻繁に使用される間投詞には po po と re (vre)がある。Po po は疑問詞と同じく p で始まる点で感嘆を表すことは想像に難くないが，これは発話の最初に現われる。

(6-47)　Po po, efaghes　poli!

alas,　you-ate　a lot

「まあ，たくさん食べたねえ」

この po po は，驚きや感心，呆れの発話に現われ，発話末には現われにくいことからも日本語の「おー」「なんとまあ」といった表現と同様に，驚き・感心の発話の枠組みを与えるものであると言える。

Re および vre は，古典ギリシャ語の moros[5] “dumb, fool”「バカな人」の呼格 more を由来とし，バルカン言語連合 Balkan Sprachbund に共通して見られる間投詞である (Joseph 1997)。この re (vre)は「バカ」から英語の guy や man に相当する親しい人への呼びかけに使われるようになり，現在では文法化してもっぱら間投詞として使用されている。これについても，発話の最初に現れる場合と最後に現れる場合とでは使用され方が違うようである。

(6-48) a. Re, afti ine kali bira!
Man, this is good beer.
「なあ，これいいビールだよ」

b. Pame ghia kamia bira, re
go.1pl for some beer, man
「ビールでも飲もうぜ」

発話の最初，すなわち左周辺の re は日本語に訳せば「ねえ」や「ほら」，「さあ」に対応する感動詞的なものになり，右周辺のものはせいぜい文末詞として「よ」や「ぜ」で表される。(6-48b)を(6-48a)に合わせて「ビールでも飲もうぜ，なあ」とすると，弱く軽く添えられた感じで発音される re と釣り合わず，余計な印象がある。また，聞き手への働きかけについて見れば，(6-48a)の左周辺の re はそれ自体で聞き手に対して注目を誘う働きかけを積極的に行うのに対して，(6-48b)の右周辺の re は，1 人称複数形の動詞 pame が発話状況に相俟って聞き手への働きかけを実現している点で re 自体が積極的に働きかけを行っているとは考え難い。このような左右周辺での違いがある点では日本語の感動詞や一部の接続詞にも共通する性質を持つと考えられる。

ギリシャ語（あるいは英語などを含めて）では同じ形式が文頭や，文末，あるいは挿入的に現われるが，日本語においても感動詞の「ねえ」が文末では終助詞や間投助詞の「ね」として述語に付属するように，本来同じと思われるものがステータスを変えて現われていることにも関係する。音声的に見ても左周辺の re は単独のイントネーションユニットを構成して上昇調などで発音されるのに対し，右周辺や挿入句の re はピッチレンジを低く，軽く添えられるような発音をするが，これは日本語の「ねえ」「なあ」などが単独でイントネーションユニットを構成させる点でも共通している。したがって，日本語の右周辺に現わ

[5] 現代語ではこれの中性形である moro が「赤ちゃん」の意味として使われている。

れる要素は,積極的に発話の枠組みや言及範囲を設定するといったことを行うことはなく,話者の発話における態度の機微を反映した終助詞的なものであるという考え方を補強する。

6.6 前置き表現

6.6.1 三種類の前置き

前置き表現は「が」や「けど」といった逆接や対比の接続助詞で終わる節の形で文や発話の最初に提示される。Yotsukura(2003)は前置き表現に関わる条件を三つ挙げているが,これに基づき例を以下に示す。

(6-49) a. 話題に関するもの

全方位ミラーってのがあるんだけど，カメラが一台で済むんだって。

b. 発話についてのもの

ここだけの話だけど，伊藤さん離婚したんだって。

c. 対人配慮に関するもの

失礼ですが，お名前頂戴してもよろしいでしょうか。

これらの例は順に，主題，発話の行動の枠組み設定，対人モダリティ（および発話の枠組み設定）に関わっており，これまで見てきた「題目」（文頭詞）に含まれるもの（主題，接続詞，感動詞）と共通する要素であるといえる。また，前置き表現に共通する特徴として，相手へのフェイス威嚇行為を回避しようとする点で丁寧さに関わっていることが言えるでは，いずれも対人モダリティが関わっているという考え方も可能である。

以下，(6-49)の個々のケースについて見ていくことにする。(6-49a)は，新規に話題を導入する場合に見られるが，第 5 章で見た話し言葉における無助詞または「って」に導かれる主題にもその機能は見られる。両者の近接性は次の例からも分かる。

(6-50) そうそう，全方位ミラー（って），カメラ一台で済むんっだって。

新規の話題を前置き表現で導入するのか，無助詞で導入するのかの違いは聞き手との関係や丁寧さなどが影響していると思われる。

次に，発話についてのものであるが，これは話し手がどういう意図で話そうとするのかを聞き手にあらかじめ言っておくという点で，行動としての発話の枠組みを作る感動詞にも共通している。たとえば(6-49b)の「ここだけの話だけど」は，今から秘密を言うことを積極的に示そうとするものであり，秘密の発話としての枠組みをつくることで，話し手は聞き手に口外しないようにと暗に命じている。

第三の，対人配慮の前置きは，たとえば「率直に言うと」や「あんまり言いたくないんだが」は，聞き手にとって不利益な内容を述べる場合に，「失礼ですが」「つかぬことをお伺いしますが」は聞き手にとって答えにくいと思われるような質問をする場合に，聞き手のフェイスへの威嚇の程度を下げようとするものである。しかし，これらは同時に，先ほど見た発話についての前置きという側面も強く，「率直に言うと」は今から本音を言うというという枠組みを，「失礼ですが」は名前や年齢と言ったプライバシーの領域に踏み込んだ質問をするという枠組みを与えているとも言える。

6.6.2 メタ言語行動としての前置き

第二の発話行為に関する前置き，第三の対人配慮の前置きもまた文法化して文副詞相当のものになっているものが見られる。たとえば「ぶっちゃけて（打ち明けて）言えば」は，大阪などでは「ぶっちゃけた話」というように体言止めの形で言うことがあり，最近では「ぶっちゃけ」までに略されて使われる。「正直に言うと」も「正直なところ」という形式名詞を伴うものや「正直」単独で使われることもある。

(6-51) a. 正直に言うと，しんどい

b. 正直，しんどい。

つまり，前置きとしての節の形から名詞的な単独の文副詞あるいは立ち上げ詞のように変化してきている。また名詞句単独で使われる点では主題的無助詞にも通じている。

前置き表現は，(6-49)で見たように，話題および情報に関わるものと，発話行為と対人モダリティに関わるものが見られたが，形式的には節の形を取ったり体言止めとして名詞の副詞的として使われたりする点で共通している。後者の発話行為・対人モダリティに関わるものはメタ言語行動であり，これは，杉戸(1996)の言葉を借りて言えば言語行動の「構え」を規定するものであり，それは前節で見た感動詞に共通する発話の枠組み作りを行うものである。しかし，機能面・形式面から見れば前者の新規話題の導入の前置きも，話題を設定するメタ言語行動であると言える。そうすると，「は」や無助詞の形式で主題を提示するということも，前置きとしての言及範囲の設定というメタ言語行動の一種として考えることができるのではないだろうか。

6.6.3 右周辺に現われた「後付け」

また，これらの前置き表現と同じものが右周辺に現われることもある。この場合は右周

辺にある以上，前置きとは呼べず「後付け」とでも呼ぶべきであるが，前置きの場合と様子が異なっている。(6-49)の各用法について見てみよう。

(6-52)　a. ??カメラが一台で済むんだって，全方位ミラーってのがあるんだけど。

b.　伊藤さん離婚したんだって，ここだけの話だけど。

c.　お名前頂戴してもよろしいでしょうか，失礼ですが。

まず，(6-52a)であるがこれは不自然である。右周辺に置かれる主題的なものは通常，既に話題になっているものでなければならず，新規の話題を導入することと右周辺に置くことは完全に対立し，発話として実現しえないと考えられる。しかし，(6-52b)のような発話行動の枠組み作りを行う場合は，右側に置かれても遡及的に「今のは内緒だぞ」という形で実現する。また(6-52c)のように対人配慮についても後で言い訳のように示すこともできるが，(6-52b)と共通して，左周辺におかれているものに比べると丁寧さに欠ける。つまり，左周辺にあらかじめ設定しておいた場合は，聞き手にとっては，発話の枠組みからどのような態度・意図または内容の発話が来るかを予期し準備することができるが，それを右周辺に置いて，後付のように発話することは，どちらかといえば話者の言い訳―それは左周辺にある場合にも多少言えるのではあるが―になっていて，丁寧さの表出とは程遠い。

6.7 オノマトペ

6.7.1 オノマトペの独立用法と語り

田守・スコウラップ(1999)では，擬音語・擬声語のオノマトペが独立的に現われることを指摘しており，「オノマトペ」の独立用法として認めている。この例としては，尾上(1985, 1999)が挙げている次の「ボチャーン」に相当する。

(6-53)　ボチャーンねこ池落ちよってん。　（尾上 1985）

これは大阪方言での例であるが，この発話の内容は，オノマトペが引用の「と」を伴って主文に埋め込まれた「猫がボチャンと池に落ちてん」とは同じであるものの，発話上の効果としては事態を描写的に述べただけの無味乾燥なものでしかない。では，独立用法の「ボチャーン」が現われることによって生じる発話の効果はどこにあるのであろうか。(6-53)は，構造上はオノマトペの「ボチャーン」と「ねこ池落ちよってん」に分かれ，「ボチャーン」という擬音語によって，何かが水溜りに落ちたということを聞き手は想起することができる。そして後半の「ねこ池落ちよってん」の「てん」が共通語で言う「たのだ」に相当することから説明的な発話である。前の要素「ボチャーン」が水溜りに何か落ちたこと

を聞き手に想起させるとするならば，これは，文副詞（6.4 節）や感動詞（6.5 節）にも共通する，発話の枠組みの設定に繋がっている。もっとも，(6-53)は語りとしての発話であるため，話者の主観を提示するというものではない―「ボチャーン」という音の表現は話者の主観に基づいていると言える―が，テクストレベルで文の枠組みを決定するという点での前置きとしての「題目」（文頭詞）であると考えられる。また，後半の「ねこ池落ちよってん」が描写的な説明である点に注目すれば，いささか乱暴ではあるが「ボチャーン」が主題，「ねこ」以下が説明という，主題―説明構造にも対応しているという見方もできる。

では，この「ボチャーン」が右周辺に現われるとどうであろうか。

(6-54)　ねこ池落ちよってん，ボチャーン｛?∅／?と／て｝。

この場合，「ボチャーン」が裸で現われるのは発話としては締まりが悪いように感じられ，引用の「（っ）て」があるほうがより自然に聞こえる。「と」は「（っ）て」が音そのものを再現するのに対して「と」が様子を含めた再現になり，いささか描写的である点，あるいは大阪方言としての一貫性に若干欠けていることからくる違和感の点で不自然になっていると思われる。つまり，左周辺に独立的なオノマトペを置くことは，出来事についての発話の枠組みを積極的に作り出そうとする行動であり，右周辺に置かれた後付けのような消極的なダメ押しとは行動の面で全く異なると言える。

このような独立的な擬音語・擬声語は，語りの発話にしか現われない。また，オノマトペの独立用法は書き言葉としてはそれほど不自然ではないが，話し言葉としてはいささか作為のある，講談のような口調であり，特殊なコンテクストや話者の性格などが関連しているかもしれない。

6.7.2　「ショーアップ語」

では，語りの発話以外に現われるオノマトペの独立用法とはどのようなものか。

(6-55)　a.　うぇーん！わたしが大事に育ててるメダカちゃんがぁ～。

（http://shop.kodansha.jp/bc/aoitori/park/10wow/wow01.html より）

b.　わたしが大事に育ててるメダカちゃんがぁ～。うぇーん！

(6-55)の「うぇーん」は分類上はオノマトペとも感動詞ともいえそうなものであるが，このような独立性の高いオノマトペ的感動詞は，定延(2005b, c)の言う「ショーアップ語」に相当するであろう。ショーアップ語は，その語のとおり話者が何らかの状況や行動を殊更演出しようとする場合に現われるが，これを発話すると想定される人物の属性は外交的であ

る，かつ，子供か若い女性である点―実際には違うかもしれないが―では話者を選び，また実際の会話よりもメールやチャット，ブログと言った，レスポンスが比較的早く，話し言葉的な表現が用いられる文字媒体で使用されることが多い。

(6-55a)について見てみると，文頭に話し手の置かれている状況を想起させるような表現「うぇーん」を置き，その後で状況を描写または説明するような「わたしが大事に育てたメダカちゃんがぁ～（死んじゃったよ）」が現れているという点で，前節のオノマトペの独立用法と基本的な構造は同じであると言える。そして，語り récit ではなく現場に根ざした発話 discours であるという点では，感動詞や文副詞，前置きなどと同じように話し手の態度に基づいて，かつ，発話行動の枠組み付けを行っている。また音声的な面を考えると，「うぇーん」に卓立を置かなくても発話できるという点でもこれらと共通しており，主題などに対応する「題目」（文頭詞）として十分に位置づけられる資質を持っていることが分かる。

逆に(6-55b)のように末尾に現れる「うぇーん」は，話者の状況を想起させているというよりは，前件「わたしが…がぁ～」が示す事態に対する気持ち・態度の表れとして，右周辺文副詞や感動詞で見てきたような評価の形容詞に相当するものであると言える。しかし，積極的に評価を下そうとする表現ではない点では，むしろ終助詞・間投助詞のように働いているようにもなっている。

右周辺の表現と感情・態度という面を考えると，メールで使用されるような顔文字や「(笑)」「(汗)」などといった表情や態度に代わる文末符との連続性もあるが，これらも前置き表現が右周辺に現われた後付け（6.6.2 節参照）のように発話行動に関する枠組み付けをしていると思われる。たとえば「ついに阿藤快さんとお会いすることができました (笑)」の（笑）は，単に照れくさくて笑いたくなることを付与するような評価を行っているという見方だけではなく，この内容は話し手（書き手）が照れながら発言している（書いている）ことを積極的に示そうとする表現方法であるという，発話の枠組み設定としての見方もできる。メールやブログ記事のような文字媒体であるからこそ，このような後付けの発話の枠組み設定がしやすくなるのかもしれない。

6.8 まとめ

本章では第 3 章で考えた「題目」（文頭詞）の枠組みを生かして，主題に比べると周辺的であるとされてきた，しかし談話においては重要な役割を果たす接続詞，感動詞，呼びか

け表現，あるいは文副詞，前置き表現，オノマトペとショーアップ語について考察を行ってきた。これらが左周辺に現れる場合は，その文ないし発話の内容あるいは発話の行動そのものの枠組みを規定するような働きがあることを見出したが，話し言葉においては話し手の態度や意図がリアルタイムに影響し言語に反映されるという点で，単に規定する働きを持っているのではなく，話し手自身によって枠組みを設定するメタ言語行動そのものであることがわかる。そして主題もまた，言及範囲の設定を行うという行動を考えれば，感動詞などが行う発話の枠組みの設定と基本的に変わらないと言える。違うとすれば，関与する対象が発話内容なのか，発話内容を包括する発話という行動そのものかというレベルの違いであると思われる。これらは前置き表現においても「が」や「けど」のような対立の接続助詞を伴う節で現われる点で形式的に全く同じこととも関連している。

また，右周辺についても同時に観察を行ってきたが，言語の線条性を考えると左周辺とは鏡像的にはならず, 発話の枠組みの設定というメタ言語行動を積極的に行うことはなく，評価や価値判断と言った認知的な推し量りの反映と考えられ，これらは終助詞や間投助詞のほうに近づいていく。

第7章 おわりに

7.1 まとめ

第 3 章では，フランス語と現代ギリシャ語との文法および韻律の対照を通じて，日本語主題および時間・場所表現といった「題目」（文頭詞）を，これらの言語における命題の外側としての左周辺として位置づけ，命題の最左端に現われうる前置焦点のスロットとは別のものであり，それよりも先行するものが「題目」（文頭詞）として認められるという結論を得た。また主題に対しては特別なイントネーションパターンを必ずしも持つわけではなく，単独で句を構成する場合と同じイントネーションでもって発話されることから，主題ないし「題目」（文頭詞）とは命題の外側の左周辺にあり，単独で句またはイントネーションユニットを構成することによって実現されることを主張した。

また，その中では，主題・焦点と構文・韻律の関係についてフランス語とギリシャ語にも違いがあることも分かった。フランス語では，構文の違いを超えて情報構造と韻律パターンが対応し，ギリシャ語では情報構造，構文，韻律パターンの三つが同時に対応しなければならない。これはギリシャ語の語順が極めて自由であること，フランス語では原則的に語順が SVO に固定されているという点にその原因が求められるが，両言語において共通するのは情報構造に従う形で韻律パターンと要素の配置を行おうとすることである。このようなことは日本語においても共通しており，Li and Tompson(1976)では主語卓立型とされるフランス語やギリシャ語（そしてイタリア語やスペイン語なども），実際には Lambrecht (1986)が口語フランス語について主張しているように，主題卓立的な面があると言える。

第 4 章では，日本語に現われる句末のイントネーションのうち昇降調に注目し，これがせいぜい，句単独で発話できるようなイントネーションユニットを構成する場合に現われることを指摘した。その背後には発話計画の遅れによる非流暢性が絡んでいることが動機の一つでもある。

また，発話計画の観点から再びフランス語およびギリシャ語の左方転移構文における，拘束左方転移（CLLD）と自由左方転移（HTLD）について，格の一致・不一致および連続的・非連続的なイントネーションという観点から，HTLD が非計画的発話の場合にとりあえず提示するような主題で，後で説明をつけようとする心の動きであることを指摘した。このようなことは，日本語において「うち，兄貴，嫁さん，風邪ひいてんねん」のように，談話の表出における推論の過程と主題提示が対応していることにも関係する。また昇降調

などの句末イントネーション，延伸（音引き），ポーズ，フィラーといった非流暢に関係するような要素も，主題の設定にも関わっていることを指摘した。このことは，主題のある文が品定め文になりやすい点で，認知的な推し量りを行うことが主題にも関わっていることを示すものである。

第 5 章では，話し言葉に特有な無助詞および「って」による主題表現について，その談話上の特徴から認知的な活動としての動機について考察を行った。「は」が判断，「って」が知識の有無や修正といった対比に関わる積極的な心内処理を担っているのに対し，無助詞は，そのような処理を特別行わず，現場および拡張された現場としての文脈，談話空間，話者の意識における存在物（話者も含め）を選択指定だけを行うことを指摘した。

第 6 章では，第 3 章で明らかにした日本語の左周辺である「題目」（文頭詞）の枠組みを利用して，従来の文論では周辺的なものとされきた接続詞や感動詞，呼びかけ，文副詞，それからうな「うぇーん」のようなショーアップ語といった言語形式についての分析を行い，これらにも「題目」（文頭詞）として位置づけられることを確認した。これらが左周辺に現れる場合は，その文ないし発話の内容あるいは発話の行動そのものの枠組みを，話し手自身によって枠組みを設定するメタ言語行動そのものであることがわかる。そして主題もまた，言及範囲の設定を行うという行動を考えれば，感動詞などが行う発話の枠組みの設定と基本的に同じである。感動詞や接続詞，「うぇーん」といったショーアップ語などは，まさに心の隙間から言語へ滲み出てくるような表現であり，そこから話し手自身の心を垣間見ることができるという点でも，主題とや焦点といったものの現れる動機を知るための大きな手がかりとなりうる。

7.2 結論—行動としての「題目」（文頭詞）提示

左周辺に置かれる「題目」（文頭詞）はまさに Halliday(1994)の言う発話のスタートポイントであり，「題目」（文頭詞）を提示することはそのスタートポイントを設定することに他ならない。その場合には，現実世界における場所，場所へのメタファー的拡張がなされる時間，あるいは条件といった状況設定に関するものに始まり，談話および思考におけるスタートポイント，あるいは発話に対する言及領域を設定するものとしての主題，前の発話を受け継ぐ新たな視点としての「それを」などの句やギリシャ語の拘束左方転移(CLLD)といったように，基本的には現実的あるいは仮想的な場の設定ということに位置づけられる。接続詞は前の発話の受け継ぎだけではなく，前に示された内容以外に現場の状況に対

する話者の態度を，メタ認知的な場の設定に関わっているし，感動詞は発話行動そのものと一体となって，感動詞によって言語的に枠組みが決定されるものである。語り（Benvenisteのいう récit や histoire）に現われる独立用法のオノマトペは出来事の枠組みを与え，現場とのかかわりのある discours に現われるショーアップ語は，発話者がどのような状況にあるのか，どのような心理状態にあるのかを言語的に簡潔に表しているものであるといえる。

しかし，「題目」（文頭詞）が何を表しているのかを研究しただけでは，現実の言語使用を考えると不十分であり，それが行われる動機ないしその行動そのものについても考えなければならない。本稿は，第 6 章で「題目」（文頭詞）を設定することとは発話の枠組みの設定であることを示した。発話内容については，出来事や状態に関連付けるために時間や場所表現でその生起範囲を設定する。時間も軸で捕らえればそれは「場」として捕らえることができる。主題は，言及の範囲を設定するものであり，文脈としての「場」に関わっている。「ボチャーンねこ池落ちよってん」に見られるオノマトペの独立用法は，語りにおける出来事の起こった「場」を先に設定し，後から説明的描写を追加する。現場に依存するような発話行動については，どのような態度であったのか，あるいはどのような行動として発話するのかを話し手が設定するが，この場合に使用されるが感動詞や接続詞，文副詞，前置き，ショーアップ語である。また呼びかけは，発言の相手や働きかけの範囲を設定するという面では主題にも共通する。

現場に依存しない自在的言表（尾上 1996）では，「題目」（文頭詞）は内容の生起範囲や言及範囲としての「場」を設定し，現場依存性のある発話では，「題目」（文頭詞）は現場として「場」が固定されていることから，その「場」における発話のあり方にを設定するものであると言える。主題はその両者に跨るものであり，情報に関する面と発話の行動に関する面の両方から積極的な設定を行おうとするものであり，その意味でも主題は言語上特別なステータスを持っているとも言える。そしてそれが左周辺に現われることは，言語の線条性を考えるとメタ情報にもなっており，この位置で「題目」（文頭詞）が設定されるからこそ様々な発話行動が可能になっているのではないだろうか。

そのような拡張された「場」ないし「場」における発話のあり方の設定に関わる「題目」（文頭詞）とは対照的に，右周辺に現われたものは，「場」の設定を行わず，発話内容あるいは発話そのものの行動に対して話し手が認知的推し量りを行った結果であり，それが態度（モダリティ）に関わる形式として現われる。これらを行う典型的なものは終助詞や間投助詞であるが，これらとて，自称詞の「われ」が終助詞「わ」に文法化したことから考

えると，様々な要素がこの位置に現われ，さも終助詞のように振舞うことは何ら不思議ではない。

7.3 従来の品詞分類の限界

左周辺に現われる「題目」（文頭詞）は，右周辺の文末詞（藤原 1990）に対立するものとして発話のあり方を設定する「立ち上げ詞」（友定 2005）と呼ぶべきであり，また第 6 章で見てきたように，接続詞や副詞，感動詞といった従来の文法的なカテゴリの問題点をあらわにしている。この問題は名詞や動詞についても言え，たとえば動詞と分類される「違う」の過去形が「違った」ではなく「違うかった」「違かった」のように形容詞型の形式を取る話者が増えていることも，認知的に「違う」が動詞ではなく形容詞であると捕らえていることを示している。つまり何を表すかという形式的な特徴に基づく分類も重要であるが，認知的にどのように捉えられている，あるいはどのような発話に使用するのかという観点からの品詞分類が今後必要になるのではないだろうか。

7.4 主題卓立的な文論へ

本稿では，従来の文論ではまともに扱えなかったと思われる周辺的な表現形式についても，実際には一枚岩での分析の可能性を示していると思われる。また，このことは益岡(1987)が主張している，日本語が構造として主題—説明構造を持つという考え方を補強するものである。このことは，実は文レベルだけでなく句レベルにも見られる。それは助詞の遊離である。

(7-1) a. 風邪引いたときは，エッグノッグ　が一番やね。

b. こないだね，笑福亭鶴瓶さん　に会ったんです。

しばしば，話し言葉では名詞と助詞の間にポーズを置いて，名詞を卓立的に提示するようなやり方であるが，これは，発話スタイルや位相によっては三人称の呼称やコ系・ア系の代名詞て受ける，左方転移にも似た表現方法もある。

(7-2) a. エッグノッグ　これが　一番ですわ。

b. こないだな，鶴瓶　あいつに会うてん。

「エッグノッグ」「笑福亭鶴瓶」は，発話上は主題ではなくむしろ焦点であるが，音声的に卓立を持つのは(7-2)では「これが」「あいつに」に現われているので，むしろこれが焦点となっている。「エッグノッグ」「笑福亭鶴瓶」は句レベルで局地的に提示された要素であ

り，焦点としての位置づけは代用表現の「これ」「あいつ」が代わりに引き受けている。そのように考えれば(7-1)の助詞の遊離も，「が」「に」が「これが」「あいつに」に相当するように助詞単独で前方照応していると見ることができる。そしてそれ自体で焦点としての音声的な卓立が課せられる。つまり，名詞と助詞の連続からなる句の内部でも提示成分と，文における関係および焦点を担う成分に，さしずめ主題―説明構造のように分かれていると言える。このような構造は膠着語である日本語だからこそできるのかもしれないが，膠着語と主題卓立性が無縁ではない予想が立つことから，この現象は主題研究の新たな局面におけるテーマとなるのかもしれない。

また，本稿ではフランス語やギリシャ語のとの対照を交えて，このような考え方が他言語についても試験的ではあるがその可能性を認めることができる。今後はこれが可能であるいうレベルにまでに持っていくことが課題であると思われる。そうすることによって主語―述語の構造を基本とする主語中心主義の言語観に対抗しうる，周辺的とされてきた接続詞や感動詞などを同一に形態統語論上で扱うことができるような研究の枠組みが生み出せるのではないだろうか。

参考文献

《和文》

秋田県教育委員会編 (2000) 『秋田のことば』秋田県教育委員会.

秋永　一枝　(1996)　「日本語の発音—イントネーションなど—」『講座日本語教育』vol. 2, pp. 48-60. 東京：早稲田大学言語教育研究所.

飯豊 毅一ほか(編), (1982)　『中国・四国地方の方言』図書刊行会.

庵　功雄　(1998)　「名詞句における助詞の有無と名詞句のステータスの相関についての一考察」　『言語文化』35. 21-32. 一橋大学言語学研究室.

石井カルロス寿憲,　ニック・キャンベル (2004)　「句末音調の機能的役割：談話機能を中心に」. 『日本音響学会 2004 年春季研究発表会予稿集』pp.229-230.　2004 年 3 月 17 日～19 日. 於神奈川工科大学.

市川　熹　(2005)　マルチモーダル音声対話コーパスの収録とうなずきの分析. http://www.gavo.t.u-tokyo.ac.jp/tokutei_pub/houkoku/corpus/ichikawa.pdf.

井上　史雄　(1997)　「イントネーションの社会性」　杉藤美代子(監修), 国広哲弥・廣瀬肇・河野守夫(編) 『アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』 pp. 143-168. 東京: 三省堂.

上村　幸雄　(1989)「現代日本語 音韻」亀井孝・河野六郎・千野栄一(編) 『言語学大辞典第二巻』pp. 1692-1716. 東京: 三省堂.

内間　直仁　(1994)　『琉球方言助詞と表現の研究』 東京: 武蔵野書院.

岩男　考哲　(2005)「「って」による提題と叙述の類型」『日本語文法学会第 6 回大会発表予稿集』pp.35-42. 於明海大学, 2005 年 11 月 27 日, 日本語文法学会第 6 回大会パネルセッション「叙述の類型とその射程」

大谷　博美　(1995)「ハとガと φ」　宮島達夫・仁田義雄(編) 『日本語類義表現の文法—上』 pp.287-295, 東京: くろしお出版.

尾上　圭介　(1985)　「「ボチャーンねこ池落ちよってん」－表現の断続と文音調－」『音声言語』vol. 1. 近畿音声言語研究会.

尾上　圭介　(1996)　「主語にハもガも使えない文について」日本認知科学会第 13 回ワークショップ配布資料.
入手元 http://logos.mind.sccs.chukyo-u.ac.jp/jcss/CONFs/onoe.html.

尾上　圭介　(1999)　『大阪ことば学』大阪：創元社.

甲斐ますみ　(1992)「話者が『は』『が』なし文を発するとき」 *KLS* 12. pp.99-109, 関西言語学会.

加藤　重広　(1997)「ゼロ助詞の談話機能と文法機能」『富山大学人文学部紀要 27』富山大学人文学部,
入手元 http://jinbun1.hmt.toyama-u.ac.jp/gengo/kiyo27.htm.

加藤　重広　(2001)「照応現象としてみた逆接―「しかし」の用法を中心に―」『富山大学人文学部紀要』vol. 34, pp.47-78.

加藤　重広　(2003)『日本語修飾構造の語用論的研究』東京: ひつじ書房.

金田　章宏　(1993)「「二重」表現現象をめぐって―八丈島三根方言を例に―」仁田義雄(編)『日本語の格をめぐって』pp. 163-189. 東京: くろしお出版.

金田　純平　(2005a)『無助詞名詞句の無標性』神戸大学大学院総合人間科学研究科修士論文.

金田　純平　(2005b)「句末卓立と非流暢性の関連についての準備的考察」『言語・音声理解と対話処理研究会資料』vol.44, pp39-44. 人工知能学会.

金田　純平　(2005c)「日本語無助詞名詞句の無標性」*KLS 25*. pp. 315-325. 関西言語学会.

金田　純平　(2006)「間投助詞と発話行為―韻律・非言語行動との相関から―」第 7 回日本語文法学会 (2006 年 10 月 29 日　於神戸大学) パネルディスカッション『自然会話データを使った日本語文法研究の新たな広がり』pp.XX-XX.

川本　茂雄　(1985)『言語の構造―フランス語そのほか―』白水社.

金水　敏　(2003) ヴァーチャル日本語 役割語の謎』東京: 岩波書店.

金水　敏・田窪　行則 (1998)「談話管理理論に基づく「よ」「ね」「よね」の研究」堂下修司・新美康永・白井克彦・田中穂積・溝口理一郎（編）『音声による人間と機械の対話』pp.257-271. 東京: オーム社.

楠本　徹也　(2002)「無助詞文における話し手の情意ネットワーク」『日本語教育』115. pp.21-30. 日本語教育学会.

久野　暲　(1973)『日本文法研究』大修館書店.

郡　史郎　(1997)「日本語のイントネーション―型と機能―」杉藤 (監修), 国広・廣瀬・河野(編)　pp. 169-202. 1997.

国立国語研究所 (1999-2003) 日本語話し言葉コーパス, 6. 予備的分析の結果-II
http://www2.kokken.go.jp/~csj/public/j6_2.html.

佐久間　鼎　(1940)『現代日本語法の研究』厚生閣.

佐久間まゆみ (2002)　「接続詞・指示詞と文連鎖」野田・益岡・佐久間・田窪（編著）『日本語の文法 4　複文と談話』pp. 117-189. 東京: 岩波書店

佐々木　冠　(2004) 『水海道方言における格と文法関係』くろしお出版.

定延　利之　(2003) 「体験と知識－コミュニカティブ・ストラテジー－」『國文學－解釈と教材の研究－』48-12. pp.54-64. 東京:學燈社

定延　利之　(2005a) 『ささやく恋人りきむリポーター—口の中の文化』東京: 岩波書店

定延　利之　(2005b) 「マンガ・雑誌のことば」上野智子・定延利之・佐藤和之・野田尚史（編）『ケーススタディ　日本語のバラエティ』126-133. 東京：おうふう.

定延　利之　(2005c) 「表す」感動詞から「する」感動詞へ. 『言語』. 34(11), 33-39. 東京：大修館書店.

定延　利之　(2006) 「文節と文のあいだ－末尾上げをめぐって－」音声文法研究会(編)『文法と音声 V』pp.107-133.くろしお出版.

定延　利之　(2007)「日本人が空気をすするとき」定延利之・中川正之（編）『音声文法の対照』くろしお出版.

定延　利之, 田窪　行則 (1995)「談話における心的操作モニター機構—心的操作標識「ええと」と「あの(一)」」『言語研究』vol. 108, pp.74-93. 日本言語学会.

定延　利之, 中川　明子 (2005)「非流ちょう性への言語学的アプローチ—発音の延伸，とぎれを中心に」串田秀也・定延利之・伝康晴（編）『活動としての文と発話』pp.209-228. 東京: ひつじ書房.

ザトラウスキー, ポリー (2006) 「アニメーションを語る際の視線とうなずき・相づち・身ぶりとの関係」於神戸市外国語大学, 2006 年 4 月 22 日『談話研究ワークショップ』配布資料.

澤田　浩子，中川　正之 (2004) 「中国語における語順と主題化—主題化とその周辺の概念を中心に—」益岡(編).　pp. 19-42.

柴田　武　　(1977) 「現代イントネーション」『言語生活』vol. 304, pp 16. 東京: 筑摩書房.

杉戸　清樹　(1996) 「メタ言語行動の視野—言語行動の『構え』を探る視点—」『日本語学』15-11, pp.19-27 東京: .明治書院.

杉藤美代子　(1983) 「日本語のアクセントとイントネーション」『文化庁ことばシリーズ 言葉と音声』

杉本　武　　(2000) 「無助詞格のタイプについて」『文藝言語研究言語篇』vol.38, pp.103-116. 筑波大学文藝・言語学科.

杉本　武　　(2004) 「話しことばにみる無助詞の認可条件」『科学研究費補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書「日本語における話しことばの文法研究」(研究代表者: 杉本武)』pp.159-174.

高木　一広，渡辺　誠治 (1997) 「「ガ」・「ハ」・「ゼロ」」於 NTT 基礎研究所(厚木), 1997 年 6 月 20 日，日本認知科学会第 14 回大会ポスター発表予稿.

高木　千恵　(2006) 『阪大日本語研究別冊 2　関西若年層の話しことばにみる言語変化の諸相』大阪大学大学院文学研究科日本語学講座.

高橋美奈子　(2003) 「主題を提示する「って」—「って」主題文の一側面— 」『科学研究費補助金基盤研究(C)(1)研究成果報告書「現代日本語の話し言葉に特有の主題・とりたて助詞に関する実証的研究」(研究代表者 : 野田尚史)』pp.8-14.

竹林　一志　(2004) 『現代日本語における主部の本質と諸相』 東京: くろしお出版.

田中　章夫　(1984) 「接続詞の諸問題—その成立と機能」鈴木一彦・林巨樹(編)『研究資料日本文法　第 4 巻　修飾句・独立句編　副詞・連体詞・接続詞・感動詞』pp. 81-123.東京: 明治書院.

田守　育啓　(1991)『日本語オノマトペの研究』神戸商科大学経済研究所.

田守　育啓・スコウラップ，ローレンス　(1999). 『オノマトペ』. 東京：くろしお出版.

張　麟声　　(2004) 「景頗語(Kachin)の主題マーカーについて」益岡(編) pp. 43-56.

筒井　通雄　(1984) 「「ハ」の省略」 『言語』13-5. pp.112-121, 東京: 大修館書店.

手塚　正昭　(2001) 「「って」形式の主題」『宇大国語論究』vol.12, pp. 21-35. 宇都宮大学国語教育学会.

友定　賢治　(1977) 「助詞「を」「に」「は」表示の表現形態—備中方言の場合—」『島大国文』6:25-35. 松江: 島大国文会.

友定　賢治　(2005) 「感動詞への方言学的アプローチ—「立ち上げ詞」の提唱」『言語』34-11, pp.56-63. 東京: 大修館書店.

外山滋比古　(1981) 『日本語の素顔』中公新書. 東京: 中央公論社.

中村ちどり　(2001) 『日本語の時間表現』東京: くろしお出版

丹羽　哲也　(1989) 「無助詞格の機能—主題と格と語順—」 『国語国文』58-10, pp.38-57. 京都: 中央図書出版.

丹羽　哲也　(1994) 「主題提示の『って』と引用」『人文研究』46-2, pp.79-109. 大阪市立大学文学部.

丹羽　哲也　(2000) 「主題の構造と諸形式」 『日本語学』19-5. pp.100-109. 東京: 明治書院.

丹羽　哲也　(2004)「名詞句の定・不定と「存否の題目語」」『国語学』55-2. pp.1-15. 日本語学会.

丹羽　哲也　(2006)『日本語の題目文』 和泉書院.

長谷川ユリ　(1993)　「話し言葉における『無助詞』の機能」　『日本語教育』80: 158-168. 日本語教育学会.

林　博司　(1990)「遊離構文について」『ことばの饗宴－うたげ』pp.339-350. くろしお出版

原　香織　(1993)　「いわゆる「尻上がり」イントネーションについて—その音響的特徴と印象の関係—」　『言語文化研究』 vol. 11, pp. 61-71. 東京外国語大学大学院外国語学研究科言語・文化研究会.

樋口万喜子　(1998)「無助詞の機能—感情・感覚を表す文の場合—」『横浜国大国語研究』16: 36-44. 横浜国大国語国文学会.

樋口万喜子　(2000)　「存在文における無助詞の機能」『横浜国大国語研究』17-18: 43-52. 横浜国大国語国文学会.

福嶌　教隆　(2004)　「スペイン語の主題に関する記述的研究」益岡(編) pp.129-148.

藤村　逸子　(1993)「わからないコトバ, わからないモノ—「って」の用法をめぐって—」『言語文化論集』14-2. pp.45-56. 名古屋大学国際言語文化研究科.

藤原　雅憲　(1992)「助詞省略の語用論的分析」　田島毓堂・丹羽一彌(編)　『日本語論究３』pp.129-148. 大阪: 和泉書院.

藤原　与一　(1990)　『文末詞の研究』東京: 三弥井書店.

益岡　隆志　(1987)　『命題の文法』東京: くろしお出版

(1997)　『複文』東京: くろしお出版.

益岡　隆志(編)(2004)　『シリーズ言語対照５　主題の対照』東京: くろしお出版

松下大三郎　(1930)　『標準日本口語法』　白帝社.

丸山　直子　(1995)　「話しことばにおける無助詞格成分の格」『計量国語学』19-8: 365-380. 計量国語学会.

丸山　直子　(1996a)「助詞の脱落現象」『言語』25-1: 74-80, 東京: 大修館書店.

丸山　直子　(1996b)　「話しことばにおける無助詞格成分」　於㈱国際電気通信基礎研究所, 1996 年 6 月 22 日, 日本認知科学会第 13 回ワークショップ「日本語の助詞の有無をめぐって」配布資料.

入手元 http://logos.mind.sccs.chukyo-u.ac.jp/jcss/CONFs/maruyama.html.

丸山　直子　(1999)　「話し言葉の諸相」堂下 修司 (編)『音声による人間と機械の対話』

pp.119-132.東京: オーム社.

三上　章　　(1972)　『現代語法序説』東京: くろしお出版.

南　不二男　(1974)　『現代日本語の構造』東京: 大修館書店

村中　淑子, 原　紀代　(1994)　「「助詞の卓立」の頻度と文法的機能および音響的特徴について」『言語文化研究』vol. 1, pp. 193-208. 徳島大学総合科学部.

メイナード, 泉子・K (2004)　『談話言語学—日本語のディスコースを創造する構成・レトリック・ストラテジーの研究』くろしお出版.

山田　孝雄　(1936)　『日本文法学概論』 宝文館.

渡辺　誠治　(1995)「ある要素に対する新規の属性の取り入れに関わる形式—「ッテ」と「∅」を中心に—」『日本語・日本文化』21. pp.105-123. 大阪外国語大学留学生日本語教育センター.

《欧文》

Alexopoulou, Theodora & Dimitra Kolliakou. (2002) "On Linkhood, Topicalisation and Clitic Left Dislocation." In *Journal of Linguistics*, vol. 38-2, pp.193-245.

Ashby, William J. (1988) "The syntax, pragmatics, and sociolinguistics of left- and right-dislocation in French". In *Lingua* 77. pp.203-229.

Bally, Charles (1965)　*Linguistique Générale et Linguistique Française.* Quatrième edition. Éditions Francke.

Baltazani, Mary (2006)　"Intonation and pragmatic interpretation of negation in Greek" In *Journal of Pragmatics* 38-10:1658-1676. Elsevier.

Baltazani, M. and Jun, S. (1999). "Focus and topic intonation in Greek". In *Proceedings of the XIVth International Congress of Phonetic Sciences* (pp. 1305-1308). San Francisco, CA

Benveniste, Émile　(1966) *Problèmes de linguistique générale*. Paris : Gallimard.

Berrendonner, A. and M.-J. Reichler-Béguelin (1997) "Left dislocation in French: varieties, norm and usage." In Cheshire & Stein (eds.) *Taming the vernacular – from dialect to written standard language* -　pp. 200-217. Longman.

Beyssade C, E. Delais-Roussarie, J. Doetjes, JM Marandin et A. Rialland. (2004). "Prosody and Information in French." In F. Corblin & H. de Swart (eds), *Handbook of French semantics*. CSLI Publications. pp. 477-499.

Botinis, Antonis, Stella Ganetsou, Magda Griva and Hara Bizani, (2004) "Prosodic phrasing and syntactic. structure in Greek." *The XVII. th. Swedish. Phonetics Conference*, 96-99, Stockholm

Botinis, Antonis, Stella Ganetsou and Magda Griva (2005) "Prosodic phrasing and focus productions in Greek." In *Proceedings, FONETIK 2005*, pp 95-98.

Botinis, Antonis, Yannis Kostopoulos, Olga Nikolaenkova and Charalabos Themistocleous (2005) Syntactic and tonal correlates of focus in Greek and Russian" In *Proceedings, FONETIK 2005*, pp 99-102.

Chafe, Wallace L. (1976) "Giveness, contrastiveness, definiteness, subjects, topics, and. point of view". In Li (ed.). pp. 27-55.

Chafe, Wallace (1994) *Discourse, consciousness, and time.* Chicago: The University of Chicago Press.

Chafe, Wallace (1987) "Cognitive Constraints on Information Flow." In Russell Tomlin (ed.), *Coherence and Grounding in Discourse*, pp.21-51. Amsterdam: John Benjamins.

Delais-Roussarie E., A. Rialland, J. Doetjes et J.-M. Marandin, (2002), "The Prosody of post-focus sequences in French", *Speech Prosody 2002, Proceedings of the First International Conference on Prosody*, 11-13 April 2002, Aix-en-Provence, pp.239-242

Delais-Roussarie, Elizabeth, Jenny Doetjes and Petra Sleeman (2004) "Dislocation" In Corblin and de Swart (eds.) *Handbook of French semantics*. pp. 501-528. Stanford, CA: CSLI Publications.

Di Cristo, Albert (1998) "Intonation in French" In Hirst, Daniel et Di Cristo, A. (eds.) *Intonation systems: a Survey of Twenty Languages.* pp. 195-218. Cambridge University Press.

Doetjes, Jenny, Georges Rebuschi and Annie Rialland (2004) "Cleft sentences, " In F. Corblin & H. de Swart (eds.) pp. 529-552.

Duranti, Alessandro and Ochs, Elinor (1979) "Left-dislocation in Italian conversation." In Givón (ed.) *Discourse and syntax*, pp. 377-416. New York: Academic Press.

Fukui, Naoki (1995). *Theory of projection in syntax*. Tokyo: Kuroshio.

Givón, T. (1983). *Topic continuity in discourse: Quantitative cross-language studies*. Amsterdam: John Benjamins.

Haidou, Konstantina (2004) “On the Syntax and Pragmatics Interface: Left-peripheral, Medial and Right-peripheral Focus in Greek.” In Benjamin Shaer, Werner Frey, Claudia Maienborn (Eds.) *Proceedings of the Dislocated Elements Workshop*, ZAS Berlin, November 2003 Volume 35, 12 2004

Halliday, Michael Alexander Kirkwood (1994) *An Introduction to Functional Grammar*. （山口登・筧壽雄（訳）『機能文法概説：ハリデー理論への誘い』くろしお出版, 2001）

Hayashi, Hiroshi (2006) “‘Anta’ et ‘Chotto’: deux cas de l’extension de sens – Étude sémentique et pragmatique -,” In *Studia Universitatis Babeş-Bolyai Philologia*, pp. 7-22.

Holton, David, Peter Mackridge and Irene Philippaki-Warburton (1997) *Greek: A comprehensive grammar of modern language*. (Second Edition 2004) London: Routledge.

Iwasaki, Shoichi (1993) "The structure of the intonation unit in Japanese," Choi, Soonja (ed.), *Japanese/Korean Linguistics*, vol. 3, pp. 39-51. CSLI Publications.

Jakobson, Roman.(1936) “Beitrag zur allgemeinen Kasuslehre: Gesamtbedeutungen der russischen Kasus.”［服部四郎(編) (1986)『ローマン・ヤーコブソン選集１　言語の分析』 米重文樹(訳), pp. 71-131. 東京: 大修館書店.］

Joseph, Brian D. (1997) “Methodological Issues in the History of the Balkan Lexicon: The Case of Greek vré / ré and Relatives,” In V. Friedman, M. Belyavski-Frank, M. Pisaro, and D. Testen (eds.), *Balkanistica,* Vol. 10 , pp. 255-277.

Kaneda, Jumpei (2005) "Phrase-final rise-fall intonation and disfluency in Japanese: a preliminary study," *Proceedings of Disfluency in Spontaneous Speech 2005*, Aix-en-Provence, France, pp. 109-112.

Kato, Masumi (2004) “On the markings of subjects with high topicality in pure colloquial Burmese” 益岡(編) pp. 57-88.

Kiss, Katalin É. (1998) "Identificationalfocus and information focus" *Language* 74-2, pp. 245-273

Lambrecht, Knud (1981) *Topic, antitopic and verb agreement in nonstandard French*. Amsterdam: Benjamins.

Lambrecht, Knud (1986) *Topic, focus, and the grammar of spoken French*. Ph.D Thesis, University of California, Berkley.

Lambrecht, Knud (1994) *Information structure and sentence form*. Cambridge: Cambridge University Press.

Lee, Kiri (2002) "Nominative case-marker deletion in spoken Japanese: An analysis from the perspective of information structure," *Journal of Pragmatics* 34: 683-709. Elsevier.

Le Gac, David. & Hi-Yon.Yoo (2000) "Intonative structure of focalization in French and Greek." *14th Symposium on Romance Linguistics Going Romance 2000*, décembre 2000, Utrecht,. www.llf.cnrs.fr/Gens/LeGac/Ut00_ArtFinal.PDF

Li, Charles N. (ed.) (1976) *Subject and topic*. New York: Academic Press

Li, Charles N. and Tompson, Sandra A. (1976) "Subject and topic : A new typology of language." In Li (ed.) pp. 457-489.

Makino, Seiichi (1982) "Japanese grammar and function grammar." *Lingua* 57: 125-173. North-Holland Publishing.

Masunaga, Kiyoko (1988) "Case deletion and discourse context." In: Poser (ed.) *Papers from the second international workshop on Japanese syntax*, pp.145-156. Stanford: CSLI.

Ochs, Elinor (1979) "Planned and unplanned discourse." In Givón (ed.) *Discourse and syntax* , pp. 51-80. New York: Academic Press.

Philippaki-Warburton, Irene , Spyridoula Varlokosta, Michalis Georgiafentis and George Kotzoglou (2004) "Moving from theta-positions: pronominal clitic doubling in Greek," *Lingua* 114-8, pp.963-989, Elsevier.

Pierrehumbert, Janet B. and Mary E. Beckman (1988) *Japanese Tone Structure*, Cambridge, MA: MIT Press.

Prince, Ellen F. (1981) "Toward a taxonomy of given-new information." In Cole (ed.) *Radical Pragmatics*, pp.223-255.

Riemsdijk, Henk. van (1997). "Left Dislocation." In Anagnostopoulou, van Riemsdijk & Zwarts (eds.), *Materials on Left Dislocation,* pp.1-10. Amsterdam: John Benjamins.

Rossi, Mario. (1998) "Intonation in Italian," In Hirst & Di Cristo (eds.), pp. 219-238.

Roussou, Anna and Ianthi-Maria Tsimpli (2006) "On Greek VSO again!" In *Journal of linguistics*, vol.42, pp. 317-354. Cambridge University Press.

Shibatani, Masayoshi (1990) *The languages of Japan*. Cambridge: Cambridge Universtiy Press.

Skopeteas, Stavros and Caroline Féry, (to appear) "Contrastive topics in pairing answers: A cross-linguistic production study." In Sam Featherston and Wolfgang Sternefeld (Eds.) *Linguistic Evidence*. Mouton De Gruyter.

"www.sfb632.uni-potsdam.de/homes/fery/NeuePapiere/LE-Skopeteas-Fery.pdf"

Spyropoulos, Vassilios and Anthi Revithiadou (2007) "Subject chains in Greek and PF processing." *Workshop on Greek Syntax and Semantics* MIT MA May 20-22, 2007 http://www.revithiadou.gr/files/papers/Subject_chains_PF_processing.pdf

Suzuki, Satoko (1993) *Topic and presupposition in Japanese*. Ph.D. Dissertation, University of Minnesota.

Tateishi, Koichi (1994) *The syntax of 'subjects'* Tokyo: Kuroshio.

Vallduvi, Enric (1992) *The Informational Component*, Garland, New York.

Weydt, Harald (1969) *Abtönungspartikel*. Bad Homburg: Gehlen.

Yotsukura, Lindsay Amthor (2003) "Topic initiation in Japanese business telephone conversations," In W. McClure (ed)., *Japanese/Korean linguistics* 12, pp.75-87. CSLI Publications.

謝辞

指導教員である定延利之先生には，この不肖の学生に対して研究面のみならず生活や進路の面でも多大なるサポートをいただき，大変どころでは言い表せないほどの感謝を申し上げる。それにもかかわらずこちらは常にご迷惑とご心配をおかけするばかりだったので，恩を仇で返しつづけてしまったと申し訳ない気持ちでいっぱいである。

また，定延先生をはじめ審査委員の中川正之先生，林博司先生，林良子先生，そして筑波大学の砂川有里子先生には，審査の際に大変有益なコメントや指摘，時には厳しいお言葉を頂戴し，そのたびに，論文に反映させて進めていこうという励みにもなった。まことに感謝申し上げる。しかし，小生の怠惰さと臆病さのせいで，せっかく戴いたコメントを論文に十分に生かせられずに，不本意な形で論文を完成させてしまい，本当に申し訳なかったと猛省している。

審査委員以外にも，杉藤美代子先生，ニック・キャンベル先生，益岡隆志先生，福嶌教隆先生，友定賢治先生，小川暁夫先生，水口志乃扶先生，澤田浩子先生には，発表や雑談の際に，様々な有益なヒントやアイデアを戴き，大変感謝している。しかし，論文にうまく生かせられたかどうかに難がある点が非常に心残りである。

また，友定先生には，本論文の核となる「立ち上げ詞」の概念を利用させていただいただけでなく，平成 17 年度の神戸大学国際文化学会研究助成金を元に，先生の郷里である岡山県新見市での方言会話データ収録において，その手法と進め方のご教授や様々なお世話をしていただいた。そのおかげで，同学会の第 17 回研究発表大会(平成 18 年 11 月 10 日)で行った，「無助詞構文の方言間対照―備中方言と大阪方言を中心に―」の発表は，大会賞を受賞することができた。友定先生にはここで特別の感謝を申し上げる。

ギリシャ語の会話データを収録させていただいた，現代ギリシャ語教室エリニカの藤下幸子先生，Konstandinos Karayiannis 氏，日本学術振興会特別研究員の奨励金でギリシャへ取材に行ったとき，録音だけでなくご自宅に滞在させて戴いた，スパルタの Yiannis Hadzidakis・亜希夫妻とそのお子さんの潤君，Alexia ちゃん，アテネで移動しながら会話を録音させていただいた Dimitris 氏とその友人 Christos 氏に，この場を借りてお礼を申し上げる。

この論文は，本当に先生方をはじめ皆様のご指導・ご支援を戴いたおかげで，一応の完成を見ることができた。小生一人だけでは，途中で挫けて投げ出していたところであり，皆様のおかげでこの世界に生きていることを改めて痛感している。

定延先生をはじめお世話になった先生方，皆様，本当にありがとうございました！そして，たいへん申し訳ございませんでした！

平成 19 年 12 月吉日

金田　純平